

有田・小田部

第 24 集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第471集

1996

福岡市教育委員会

有田・小田部

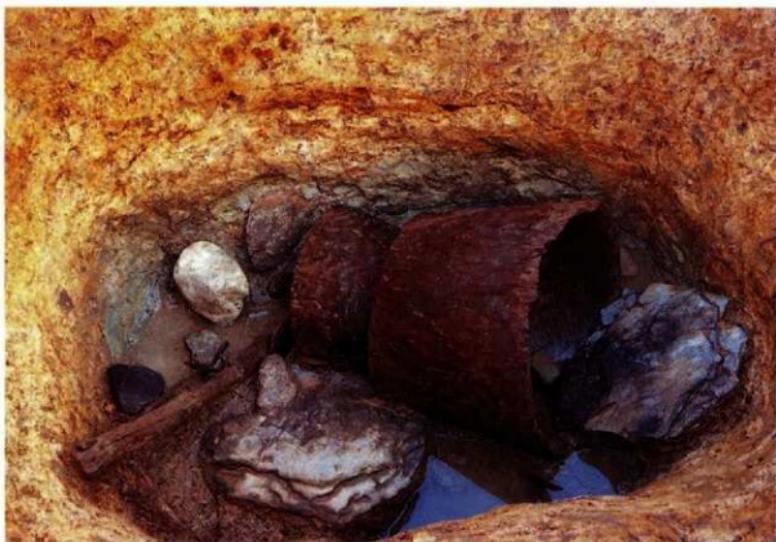
第24集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第471集



1996

福岡市教育委員会



井戸SE01内遺物出土状態（西から）



井戸SE02内遺物出土状態（西から）



第77次調査区全景（東から）



据立柱建物SB01と溝SD11（北から）

序 文

玄界灘に面した福岡市は、豊かな自然環境と歴史的な遺産に恵まれています。しかし、近年の福岡市は著しい都市化によってその姿を変貌しつつあります。

早良平野は大陸との交流の中で古くから栄え、そのために遺跡も多く存在している地域ですが、都市の市街地化の拡大と共にこの地域も都市基盤の整備がすすめられ、これに伴い埋蔵文化財の発掘調査も増加しているところです。

福岡市教育委員会では、この地域における各種の開発事業に伴い、大切なわれゆく埋蔵文化財の保存と保護措置に努めているところです。

本書は昭和57年・58年度に発掘調査を行った有出遺跡第74・77・78次調査の成果について報告するものです。これらの調査地点は「有田・小田部」と呼ばれる台地上に立地しており、旧石器時代から江戸時代までの遺構・遺物を発見することができました。なかでも繩文時代晩期の環濠やその出土遺物は早良平野における稲作の始まりの時期を知る重要な手懸かりになるものと考えられます。

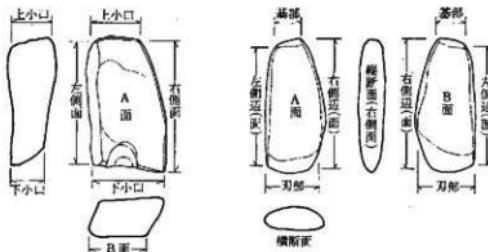
本書が市民の埋蔵文化財へのご理解と認識を深める一助となり、また研究資料としてご活用頂ければ幸いに存じます。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会
教育長 尾花剛

例 言

- (1) 本書は福岡市早良区有田・小田部・南庄地域内における住宅開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和57・58年度の2ヶ年において国庫補助を得て実施した緊急発掘調査報告書である。
- (2) 本書には昭和57年度の第74次調査、昭和58年度の第77・78次調査について収録する。
- (3) 本書では有田・小田部台地上の遺跡を一連のものと見做し、広義の有田遺跡と呼称する。
- (4) 発掘調査は井澤洋一、松村道博が担当した。
- (5) 本書に掲載した遺構実測は、第74次調査を井澤、松村、渡辺武子、清原ユリ子が、第77・78次調査を井澤、松村、谷沢仁、辻哲也、清原が行った。
- (6) 本書に掲載した遺物実測は、牛房綾子、池田孝弘、田中昭子、吉永祐美子が行った。石器、陶磁器については器械実測を行った。第74次調査は廣嶋香が行い、第77次調査は廣嶋、古田扶希子が担当した。
- (7) 遺構・遺物の製図は主に牛房、廣嶋が行い、石器の製図の一部を井澤が担当した。
- (8) 遺構の写真撮影は井澤、松村が分担して行い、遺物の撮影は牛房が行った。
- (9) 本書に掲載する遺構一覧表は池田、牛房が、遺物の一覧表は井澤、三浦明子が作成した。
- (10) 本書作成にあたっては福田小菊、多山暁子、西口キミ子、吉田扶希子、池田洋子の協力を得た。
- (11) 遺構番号は発掘調査中に於いて検出した順に番号をふり、本書では遺構略号を遺構番号の頭に付けた。遺構の略号として用いたのはSC(住居跡)、SE(井戸)、SK(土壙)、SU(貯蔵穴)、SX(構築物)、SB(掘立柱建物)、SA(棚)、SP(小穴)である。
- (12) 本書の遺物番号は遺構の種類毎に通し番号で示し、挿図・図版番号に一致させている。
- (13) 本書に用いた方位は磁北である。
- (14) 本報告にかかわる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。
- (15) 本書の執筆は井澤が担当し、編集は牛房の協力のもと井澤が行った。



本文目次

第1章はじめ	1
1. 調査に至る経過	1
2. 発掘調査組織	1
(1) 昭和57年度の調査組織（第74次調査）	1
(2) 昭和58年度の調査組織（第77・78次調査）	2
(3) 平成7年度資料整理	2
第2章有出・小田部の歴史	8
1. 立地・歴史的環境	8
2. 文獻資料	8
第3章第74次調査	11
1. 地形と概要	13
(1) 立地	13
(2) 概要	13
2. 遺構・遺物説明	17
(1) 住居跡(SC)	17
(2) 井戸(SE)	17
(3) 井戸出土遺物	32
(4) 土壙(SK)	46
(5) 土壙出土遺物	51
(6) 製鉄遺構(SX)	52
(7) 製鉄遺構出土遺物	55
(8) 掘立柱建物	55
(9) 掘立柱建物出土遺物	68
(10) 溝(SD)	69
(11) 溝出土遺物	74
(12) 小穴(SP)	81
(13) 小穴出土遺物	81
(14) 包含層出土遺物	81
(15) 遺構面出土遺物	81
3.まとめ	86
第4章第77次調査	97
1. 地形と概要	99
(1) 立地	99
(2) 概要	100
2. 遺構・遺物説明	104
(1) 住居跡(SC)	104
(2) 住居跡出土遺物	118

(3) 井戸 (SE)	121
(4) 土壇 (SK)	124
(5) 土壇出土遺物	131
(6) 土壇墓 (SX)	136
(7) 土壇墓出土遺物	137
(8) 挖立柱建物 (SB)	142
(9) 挖立柱建物出土遺物	150
⑩ 棚列 (SA)	153
⑪ 古代から近世の溝 (SD)	155
⑫ 古代から近世の溝出土遺物	168
⑬ 繩文時代の溝 (SD)	180
⑭ 繩文時代の溝出土遺物	180
⑮ その他の出土遺物	190
3.まとめ	191
第5章 第78次調査	207
1.地形と概要	209
(1)立地	209
(2)概要	209

挿 図 目 次

Fig. 1 有田・小田部周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)	4
Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (縮尺1/7,500)	5
Fig. 3 調査地点位置図 (縮尺1/8,000)	9
Fig. 4 調査地点及び中世溝配置図 (縮尺1/3,000)	10
Fig. 5 第74次調査地点位置図 (縮尺1/600)	13
Fig. 6 第74次調査構造配置図 (縮尺1/200)	14
Fig. 7 第74次調査区周壁土層実測図 (縮尺1/80)	15
Fig. 8 住居跡SC01～03実測図 (縮尺1/80)	18
Fig. 9 第74次調査井戸配置図 (縮尺1/300)	19
Fig. 10 井戸SE01実測図 (縮尺1/20・1/40)	21
Fig. 11 井戸SE02実測図 (縮尺1/20・1/40)	26
Fig. 12 井戸SE03実測図 (縮尺1/40)	28
Fig. 13 井戸SE04実測図 (縮尺1/40)	29
Fig. 14 井戸SE08実測図 (縮尺1/40)	32
Fig. 15 井戸SE01出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/10)	33
Fig. 16 井戸SE02出土遺物実測図① (縮尺1/3)	35
Fig. 17 井戸SE02出土遺物実測図② (縮尺1/1・1/3)	36
Fig. 18 井戸SE02出土遺物実測図③ (縮尺1/3)	37

Fig.19	井戸SE03出土遺物実測図（縮尺1/4）	39
Fig.20	井戸SE04出土遺物実測図①（縮尺1/3）	40
Fig.21	井戸SE04出土遺物実測図②（縮尺1/3）	42
Fig.22	井戸SE04出土遺物実測図③（縮尺1/3）	43
Fig.23	井戸SE04出土遺物実測図④（縮尺1/3）	44
Fig.24	井戸SE08出土遺物実測図（縮尺1/3）	46
Fig.25	土壤SK04・05・07・10・11実測図（縮尺1/40）	47
Fig.26	土壤SK12実測図（縮尺1/40）	48
Fig.27	土壤SK07・10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）	50
Fig.28	土壤SK12出土遺物実測図（縮尺1/4）	51
Fig.29	製鉄造構SX03・06実測図（縮尺1/30）	52
Fig.30	第74次調査掘立柱建物配置図（縮尺1/300）	55
Fig.31	掘立柱建物SB01～06実測図（縮尺1/80）	57
Fig.32	掘立柱建物SB07～11実測図（縮尺1/80）	59
Fig.33	掘立柱建物SB12・13実測図（縮尺1/80）	63
Fig.34	掘立柱建物SB14～19実測図（縮尺1/80）	64
Fig.35	掘立柱建物SB20～24実測図（縮尺1/80）	65
Fig.36	掘立柱建物SB01・03・05・06・08・10～12 出土遺物実測図（縮尺1/3）	67
Fig.37	第74次調査溝配置図（縮尺1/300）	69
Fig.38	溝SD04・05・10実測図（縮尺1/30・1/40）	70
Fig.39	溝SD04・05出土遺物実測図（縮尺1/3・1/6）	73
Fig.40	溝SD05出土遺物実測図（縮尺1/3・1/1）	74
Fig.41	溝SD07・09・10出土遺物実測図（縮尺1/3）	76
Fig.42	溝SD10出土遺物実測図（縮尺1/3）	77
Fig.43	溝SD10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）	79
Fig.44	SP出土遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）	82
Fig.45	SP出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）	83
Fig.46	包含層・造構面出土遺物実測図①（縮尺1/1・1/3）	84
Fig.47	第77次調査地点位置図（縮尺1/600）	99
Fig.48	有田遺跡概要図（昭和41～43年）（縮尺1/300）	100
Fig.49	九州大学調査27街区発掘区域実測図（縮尺1/100）	101
Fig.50	第77次調査造構配置図（縮尺1/250）	102
Fig.51	第77次調査住居跡配置図（縮尺1/400）	104
Fig.52	27街区第1号竪穴住居址【転載、一部改編】（縮尺1/60）	105
Fig.53	住居跡SC01・11実測図（縮尺1/60）	105
Fig.54	27街区第2号竪穴住居址【転載、一部改編】（縮尺1/60）	108
Fig.55	住居跡SC02実測図（縮尺1/60）	108
Fig.56	27街区第3号竪穴住居址【転載、一部改編】（縮尺1/60）	111
Fig.57	住居跡SC03実測図（縮尺1/60）	111

Fig. 58 住居跡SC04実測図（縮尺1/60）	112
Fig. 59 住居跡SC05～07・09・10実測図（縮尺1/60）	114
Fig. 60 住居跡SC08実測図（縮尺1/60）	117
Fig. 61 27街区第1～3号竪穴住居址出土遺物実測図【転載、一部改編】（縮尺1/4）	118
Fig. 62 住居跡SC01・04～06出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	119
Fig. 63 第77次調査井戸配置図（縮尺1/400）	121
Fig. 64 井戸SE11・15実測図（縮尺1/40）	122
Fig. 65 井戸SE18実測図（縮尺1/40）	124
Fig. 66 第77次調査土壤配置図（縮尺1/400）	125
Fig. 67 土壌SK01～03実測図（縮尺1/40）	126
Fig. 68 土壌SK04・06・12・16実測図（縮尺1/40）	130
Fig. 69 土壌SK01出土遺物実測図（縮尺1/3）	131
Fig. 70 土壌SK02出土遺物実測図①（縮尺1/3）	132
Fig. 71 土壌SK02出土遺物実測図②（縮尺1/1・1/3）	133
Fig. 72 土壌SK03・04・12出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	134
Fig. 73 第77次調査土壤墓配置図（縮尺1/400）	137
Fig. 74 土壌墓SX05・08・09・13・14実測図（縮尺1/40）	138
Fig. 75 土壌墓SX05・08・09・13・14出土遺物実測図（縮尺1/3）	141
Fig. 76 第77次調査掘立柱建物・柵配置図（縮尺1/400）	143
Fig. 77 掘立柱建物SB01実測図（縮尺1/100）	145
Fig. 78 掘立柱建物SB02・03実測図（縮尺1/40・1/80・1/100）	148
Fig. 79 掘立柱建物SB01出土遺物実測図（縮尺1/3）	148
Fig. 80 掘立柱建物SB04・05実測図（縮尺1/100）	150
Fig. 81 柵SA01・02実測図（縮尺1/50・1/200）	151
Fig. 82 第77次調査溝配置図（縮尺1/400）	153
Fig. 83 溝SD02実測図（縮尺1/40）	155
Fig. 84 溝SD03実測図（縮尺1/40）	157
Fig. 85 溝SD04・05実測図（縮尺1/40）	159
Fig. 86 溝SD06・07実測図（縮尺1/40）	160
Fig. 87 溝SD09～11実測図（縮尺1/40）	162
Fig. 88 溝SD14実測図（縮尺1/40）	164
Fig. 89 溝SD01出土遺物実測図（縮尺1/3・1/4）	165
Fig. 90 溝SD01・02出土遺物実測図（縮尺1/3）	167
Fig. 91 溝SD02出土遺物実測図①（縮尺1/3・1/4）	169
Fig. 92 溝SD02出土遺物実測図②（縮尺1/4）	170
Fig. 93 溝SD03出土遺物実測図①（縮尺1/3）	172
Fig. 94 溝SD03出土遺物実測図②（縮尺1/3）	173
Fig. 95 溝SD04・05出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	174
Fig. 96 溝SD06～09出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	176
Fig. 97 溝SD11・13・14出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	177

Fig.98	溝SD12配置図（縮尺1/400）	180
Fig.99	環濠配置図（縮尺1/2,000）	181
Fig.100	溝SD12土層図・大型甕出土状況実測図（縮尺1/40）	182
Fig.101	溝SD12出土遺物実測図①（縮尺1/3）	185
Fig.102	溝SD12出土遺物実測図②（縮尺1/3）	186
Fig.103	溝SD12出土遺物実測図③（縮尺1/1・1/3・1/4）	188
Fig.104	SP65・88、Na3 トレンチ、表土出土遺物実測図（縮尺1/1・1/3）	189
Fig.105	第6・19・47・77・101・107・113次造構配図（縮尺1/600）	193
Fig.106	第78次調査地点位置図（縮尺1/400）	209
Fig.107	第78次調査造構配図（縮尺1/200）	210
Fig.108	第77・78・100・107次調査造構配図（縮尺1/600）	211

表 目 次

Tab. 1	第74次調査住居跡一覧表	18
Tab. 2	第74次調査掘立柱建物一覧表	66
Tab. 3	第74次調査遺構一覧表	87
Tab. 4	第74次調査遺物一覧表	88
Tab. 5	第74次調査軒平瓦計測表	94
Tab. 6	第74次調査丸瓦計測表	94
Tab. 7	第74次調査平瓦計測表	94
Tab. 8	第74次調査鉄製品一覧表	94
Tab. 9	第74次調査木製品一覧表	95
Tab. 10	第74次調査石製品一覧表	96
Tab. 11	第77次調査住居跡一覧表	117
Tab. 12	第77次調査掘立柱建物一覧表	150
Tab. 13	第77次調査遺構一覧表	194
Tab. 14	第77次調査遺物一覧表	196
Tab. 15	第77次調査軒平瓦計測表	203
Tab. 16	第77次調査丸瓦計測表	203
Tab. 17	第77次調査平瓦計測表	203
Tab. 18	第77次調査棟瓦・道具瓦・瓦塊計測表	204
Tab. 19	第77次調査鉄製品一覧表	204
Tab. 20	第77次調査石製品一覧表	204

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

福岡市は、昭和50年までに1市30町村が合併した都市で、面積は約336.81km²を測る。平野部は大きく分けると福岡平野と早良平野からなっている。有田・小田部地区は福岡市の西部に広がる早良平野のほぼ中央部に位置し、古地図上の面積は約70万m²を測る。この地域はかつては福岡市近郊の農村地帯であった。昭和47年に政令指定都市に福岡市が指定された以降、九州経済の中核都市としてめざましく発展すると共に、人口の集中にしたがって福岡市の西部地域は道路網の整備や地下鉄の開通によって、住宅化が著しく進められているところである。有田・小田部地区も同様に過日の田園・畑作地域の面影はなく、現在では高層アパートが樹立している。

福岡市教育委員会では、昭和50年より有田・小田部地区的これらの開発に対し、発掘調査を実施しており、平成6年度現在までに177件を数える。多くは個人専用住宅であったが、近年は学校建設、市営住宅の改築などの公共事業や大型の民間開発事業も含まれている。本書では個人専用住宅及び、店舗付住宅など国庫補助の対象事業として発掘調査を実施した昭和57年度の第74次調査、昭和58年度の第77次・第78次調査の成果を報告するものである。

2. 発掘調査組織

(1) 昭和57年度の調査組織（第74次調査）

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

調査責任 文化部文化課課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾 学

発掘担当 井澤洋一、松村道博

庶務担当 岡崎洋一

調査員 山口勝己、池野尚昭、谷沢仁（現 佐賀県人町教育委員会）、辻哲也（別府大学）

調査協力者 松尾和雄、岩城庄助、山下敏、結城茂巳、高浜謙一、渡辺武子、松井フユ子、佐藤テル子、金子由理子、清原ユリ子、真子昌子、西尾たつよ、松尾玲子、柴田幸子、上妻崎初栄、庄野崎ヒデ子、庄野崎チタカ、末松信子、延綿千江子、堀川ヒロ子、中村千早、伊庭秀子、坂田まさ子、平井和子、後藤ミサヲ、柴田勝子、柴田春代、緒方マサヨ、山田悦子、筒井ひとみ、新香代里、久保順子、山田晶子
安部宏、明野隆、安達昌利、池田考弘、堺裕明、前田次郎、安岡洋二、西島健一、前田乱、松江宏文、萩原陽一郎、江見尚美、緒方希、北川智穂美（以上西南学院大学）

西南学院大学郷土史研究会

資料整理 宮嶋成昭、松尾正直、原秋代、青柳米子、石橋千恵、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、落合弥生、久保順子、池田洋子、山下仁美、当房純子、深堀博子

(2) 昭和58年度の調査組織（第77次・第78次調査）

調査主体 福岡市教育委員会

調査担当 福岡市教育委員会文化部文化課埋蔵文化財第2係

調査責任 文化部文化課課長 生田征生

埋蔵文化財第2係長 折尾 学

庶務担当 岡嶋洋一

調査担当 井澤洋一、松村道博

調査員 谷沢仁（現 佐賀県大町教育委員会）、辻哲也（別府大学）

調査協力者 松尾和雄、真子康次郎、高浜謙一、結城茂巳、座親秀文、西原達也、海田龍生、武田秀司、合屋龍介、松尾正明、下野敏夫、伊庭秀子、諸方マサヨ、金子由利子、清原ユリ子、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、柴田幸子、柴田春代、柴田タツ子、庄野崎ヒテ子、土斐崎初枝、砥継千江子、西尾たつよ、平井和子、堀川ヒロ子、松井フユ子、松井邦子、松尾玲子、有富いつ子、米嶋チズヨ、日野良子、木松信子、中村千里、後藤ミサヲ、吉岡田鶴子、宮原邦江、砥上志華子、木村伸子、吉出祝子、原花千代、江口洋子、合尾文子、坂田まさ子、結城律子、渡辺武子、森みえ子、浜口由美子、川口初、川田久子、吉川タエ、佐藤ヒサエ、島田まり子
西南学院大学歴史探求会

資料整理 原秋代、池田洋子、深堀博子、元田明子、内尾トミ子、仲前智江子、永井和子、友田妙子、小江英美子、大田けい子、久門みちよ、山下仁美

(3) 平成7年度資料整理

整理主体 福岡市教育委員会

庶務担当 埋蔵文化財課第1係 内野保基

整理報告 福岡市博物館学芸課主査 井澤洋一（前職 埋蔵文化財課）

調査員 池田孝弘、牛房綾子、廣瀬香、吉田扶希子

作業員 多田映子、西口キミ子、福田小菊、田中昭子、三浦萌子

(有田第74次調査)

遺跡調査番号	8215	遺跡略号	ART-74
地番	有田2丁目7-80	分布地図番号	原82
開発面積	1,156m ²	調査対象面積	1,156m ²
調査期間	昭和57年10月12日～12月31日		

(有田第77次調査)

遺跡調査番号	8305	遺跡略号	ART-77
地番	有田1丁目30-1～3	分布地図番号	原82
開発面積	1,703m ²	調査対象面積	1,703m ²
調査期間	昭和58年4月8日～6月20日		

(有田第78次調査)

遺跡調査番号	8316	遺跡略号	ART-78
地番	有田2丁目20-2	分布地図番号	原82
開発面積	411m ²	調査対象面積	411m ²
調査期間	昭和58年5月23日～7月21日		



1. 西新町道跡 2. 藤崎道跡 3. 原道跡 4. 原越後造跡 5. 飯倉道跡
6. 飯倉原造跡 7. 千隈道跡 8. 鶴町道跡 9. 原深町道跡 10. 有出七田前造跡 11. 橋本櫻田道跡

Fig. I 有出・小田都周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

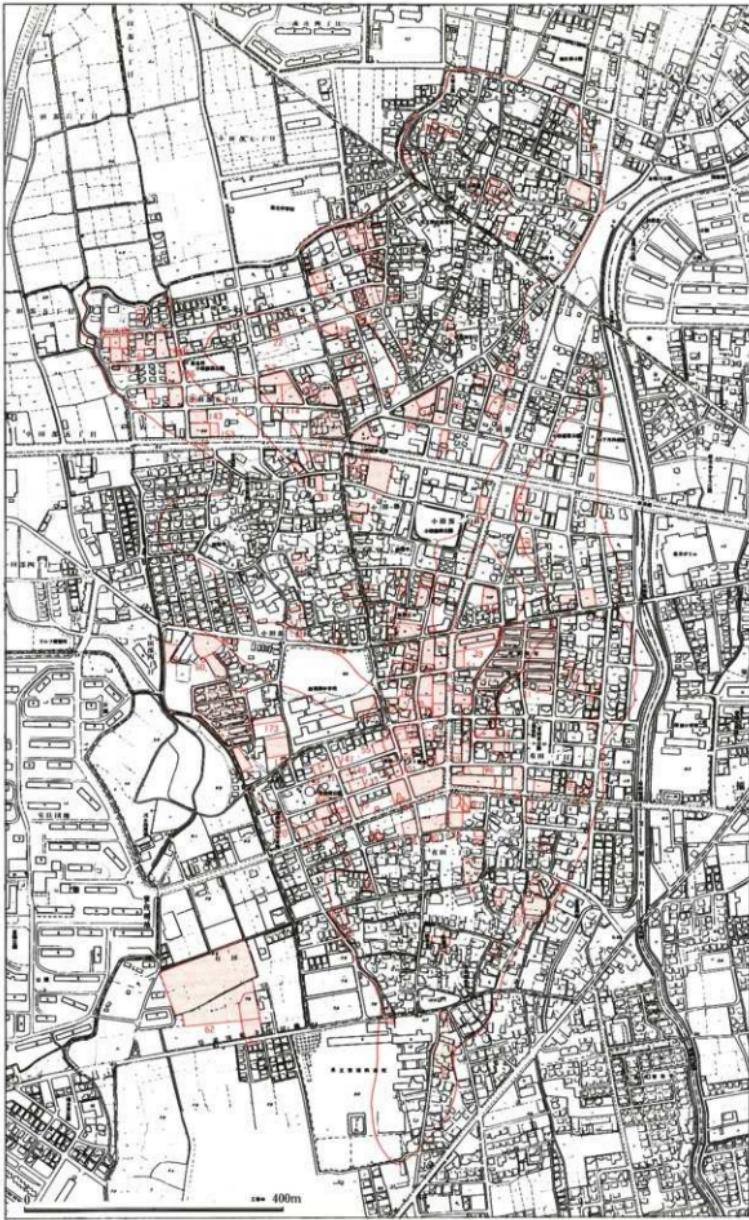


Fig. 2 有田・小田部台地と発掘調査地点 (縮尺1/7,500) ■数字は調査次数を表わす。



有田・小田部周辺航空写真（昭和21年米軍撮影）



有田・小田部周辺航空写真（昭和50年撮影）

第2章 有田・小田部の歴史

1. 立地・歴史的環境

有田・小田部の立地環境及び、歴史的環境については、既刊の報告書の中で詳細に述べられているので、これらの報告書を参照されたい。ここでは、発掘調査に関連する有田・小田部地区の歴史的事項を「筑前国續風土記拾遺」「早良郡志」の文献より転記した。

2. 文献資料

「筑前國續風土記拾遺」

小田部村
和名抄に此村に田部郷あり。此村は其郷也なるべし。日本紀實行大

皇五十七年に諸國に田部を置れし所也。日本紀實行大

古墳 松浦殿等 築城故跡

松浦殿跡は松尾原に在す。又丸山城とも云ふ。周四十間開辟一間。上に

古墳あり。小田部氏の系譜を載るに、元世は後醍醐天皇にて松浦殿也。

左大臣源公五代の孫を後醍醐天皇といふ。老子源太夫利高久く

肥前國松浦平戸に住す。右男松浦小六といふ。其後源清満

佐佐藤平戸に住す。右田部主上何某と云ふを討て、當城を領し初て

小田部氏もす。其子義綱も云ふ。義綱も後醍醐天皇の御子と見

えたり。しかばねは此松浦城を云ふ。かの华人佐佐藤を云ふ者

筑前殿は村の東北田間にある。また八家と云。

西ノ門許三間許三段に腰高上の段に上り回り。古松一本立

篠原氏由來許ならず。又村の西に山と云ふあり。又松原の内

に立石三つある。中の隕石高六尺幅七寸厚二尺四寸あり。左右の二

石はや、低。共に踏子なし。是も「並木さへ」。其由来傳らず。

有田村

北ノ門在。東に金扇川有。北に流る。

寶満寺

村南に在。慈母也。所登士族想命。特功皇廟。慈母天皇也といへり。

由来未し詳。

○天満宮。小田部氏の鎮守として祭りし社といふ。其側にから堀

本丸。下に見えたる小田部氏の墓碑なり。

西應寺

村内在。真宗西博多方行寺末也。開基の僧を忠正といふ。

古寺

村内在。堀基残れり。寺宅なりしと見ゆ。是小田部氏が成城といふもあり。堀基に切石一

重を覆り。銛はなし。壁を想ふる名跡すれば必疑ありとなん。

又村南に築城といふ所あり。鍋西要略に小田邊城といふ見えたるは是らをさしていふか。

「早良郡志」

村社寶滿寺社。當社は、有田西焉場にあつて、祭神は玉依姫命・佐佐藤御子・佐佐藤御子の合祀である。例祭は九月十九日にして、境内火出見事熱氣放車不令合祭である。例祭は九月十九日にして、境内

火出見事熱氣放車不令合祭である。例祭は九月十九日にして、境内

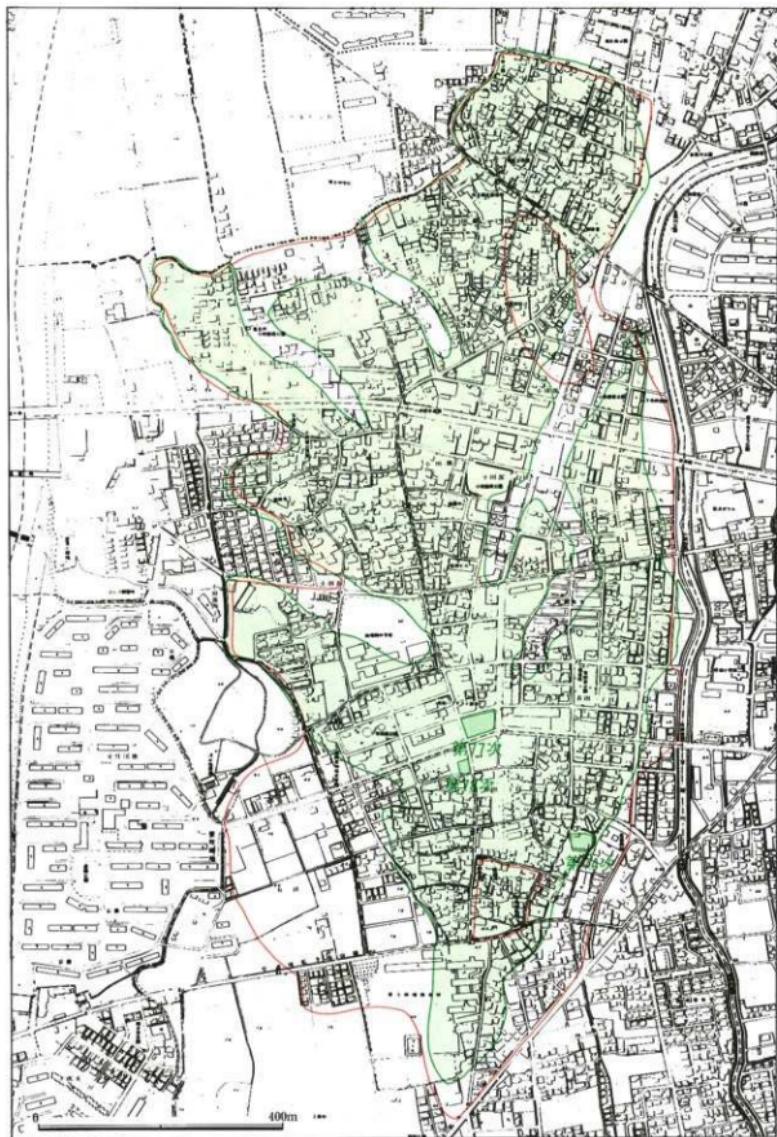


Fig. 3 調査地点位置図 (縮尺1/8,000)

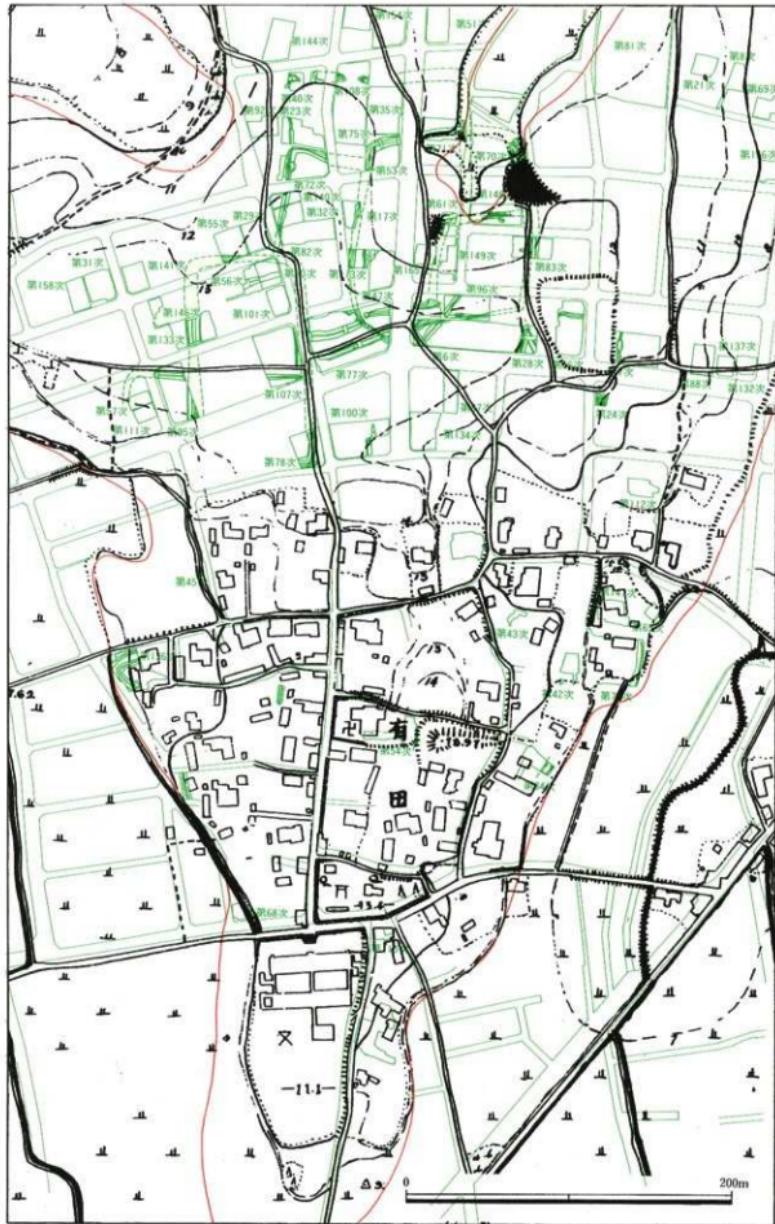


Fig. 4 調査地点及び中世溝配置図 (縮尺1/3,000)

第3章

有田遺跡第74次調査



溝SD15発掘作業風景（東から）



西側調査区全景（北から）



東側調査区全景（北西から）

第3章 第74次調査 (調査番号8215)

1. 地形と概要

(1) 立地

当該地は福岡市早良区有田2丁目7-80に所在し、発掘調査面積は1,010m²である。

有田・小田部台地の南東側斜面に立地し、台地の東側は金屑川によって開削されている。段丘上の平坦地形を形成しており、当該地の平面形は略方形の形状を呈している。西側の後背地との落差は約2.5mを測る。遺構の遺存度は、西側は建物の基礎等が存在したため削平が著しいが、東側は山地形の緩傾斜が残っているため比較的良好であった。遺構の時期は、弥生時代から近世までに亘るが、弥生時代と中世後半期の遺構を主体としている。当該地の北東側には、第65次調査を実施しており、ここでは標高4.5mにおいて遺構を検出している。当該地の現状での標高は7.5mを測る。当該地の東側から西側の縁辺部には水路が開削されているが、これが旧金屑川の河川跡と考えられる。又、伝承に残る戦国時代の濠であった「鬼丸ホゲ」もこれに相当するものである。

今回の発掘調査は住宅建設に伴うものであるが、調査期間が限られていたため、表土・堆土の処理については一部を敷地外へ搬出して調査の迅速化を測った。

(2) 概要

遺構面は標高約7.2~6.9mを測る。西側後背地の標高は9.0mを測り、当該地との間には1.5mの段差

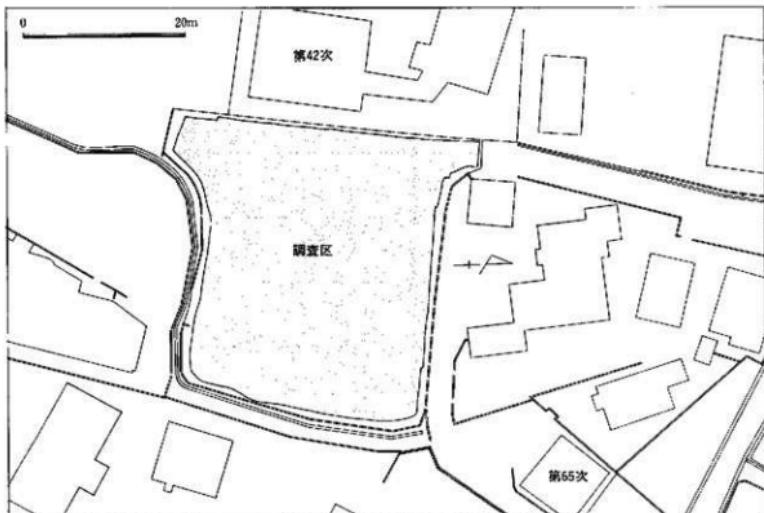


Fig. 5 第74次調査地点位置図 (縮尺1/600)



Fig. 6 第74次調査遺構配置図 (縮尺1/200)

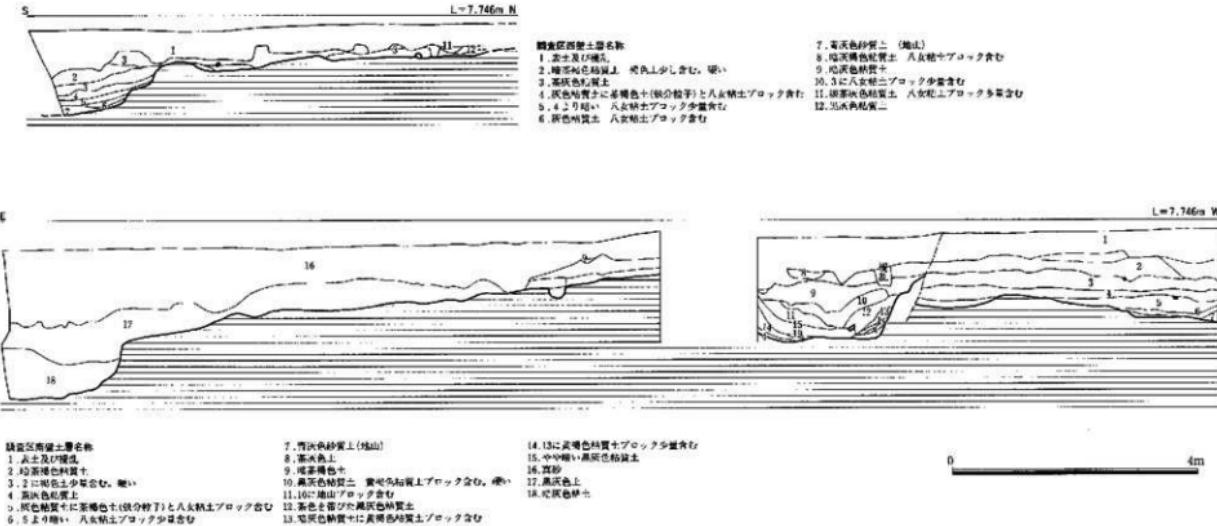
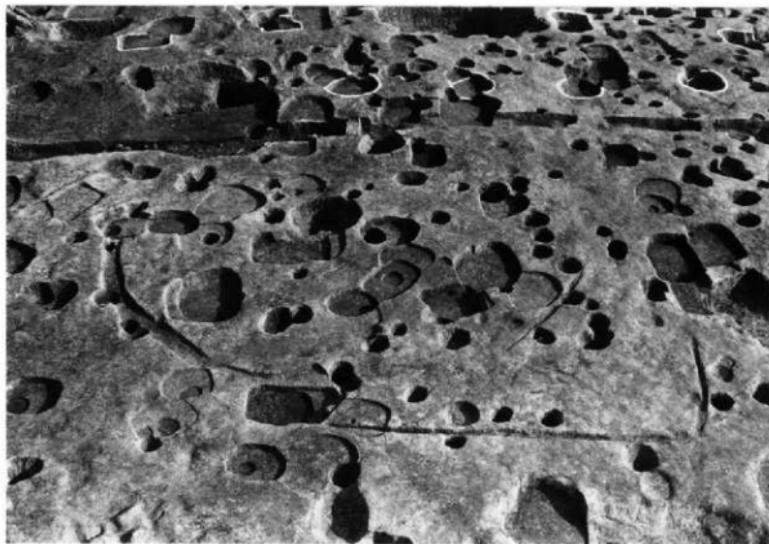
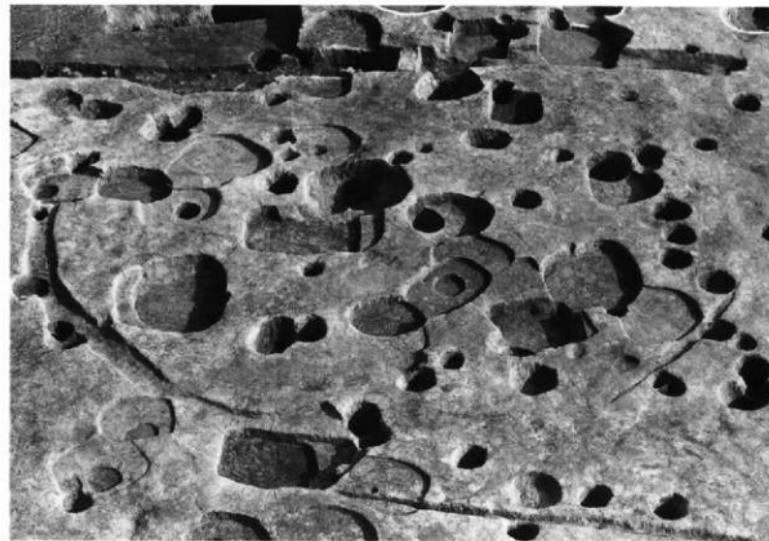


Fig. 7 第74次調査区周壁土層実測図 (縮尺1/80)



住居跡SC01-03（西から）



住居跡SC01（西から）

がある。当該地の山状は住宅地であるが、西側に片寄って延びてれており、コンクリート基礎が遺存している。このため、当該地の西側は地山掘削による著しい削平を受けて、八女粘土が露呈している。遺構の残りは悪い。東側半分については所々に大きなゴミ穴が存在するものの、旧地形が緩傾斜面であったため、遺構の残りは良い。

表土の深さはFig. 7で示したように西側が1.2m、東側は35~50cmの厚さがある。第1層は、表土及び擾乱土であるが、東側は厚さ40~120cmの真砂土の客土がある。第2・3層の暗茶褐色粘質土層は二次的な自然堆積層である。第12層の黒灰色粘質土、第13層の暗灰色粘質土は東側の濠跡（鬼丸ホグ）の埋土である。

検出した遺構の時期は、弥生時代から近世までの幅をもっている。弥生時代は住居跡、掘立柱建物、溝、井戸、古墳時代は土壙、住居跡、奈良時代は製鉄遺構、室町時代は井戸、掘立柱建物、濠で、近世は江戸中期の溝がある。

2. 遺構・遺物説明

(1) 住居跡 (SC)

調査区の東側で検出した。遺構面が削平を受けていたため住居跡の遺存状態は悪く、周溝部分もしくは住居跡の一部が遺存している状態であったため検出は困難をきわめた。

遺構面の精査を行ったところ3軒の住居跡を検出した。但し、炉跡や焼土面は検出できなかった。又、柱穴は住居跡SC01を除いて、いずれが所属するのか判断ができなかった。SC01・03は切り合い関係にあるが、方形住居跡のSC03が後出するものと考えられる。

SC01 (Fig. 8) 削平が著しいため全体形は不明であるが、平面形は円形を呈するものと考えられる。SC03から切られている。壁の遺存状態は悪く、約半周する周溝を残しているにすぎない。周溝の幅は15~25cm、深さ約7cmである。周溝の復原径は約5.5mを測る。柱穴は多数検出したが、この内環状に巡るP495・P736が住居跡の柱穴に相当するものと考えられる。柱穴の径は長径60~68cm、短径58~60cm、深さ52cm、柱根径16~18cmを測る。周溝の覆土は灰黒色粘質土である。覆土からは弥生時代の土器細片が出土した。

SC02 (Fig. 8) 調査区西側の境界地に位置するため全体形は不明であるが、平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。削平が著しく壁の遺存状態は悪い。現状の長さは、東壁で最大長は5.85m、北壁の最大長は1.1m、南壁の最大長は1.65mである。周溝幅は25~35cm、深さ約10cmを測る。柱穴は検出できなかった。周溝の覆土は灰黒色粘質土である。

SC03 (Fig. 8) 調査区東側の傾斜地に位置する。削平が著しいため全体形は不明であるが、周溝の一部が矩形に遺存している。平面形は隅丸長方形を呈するものと考えられる。SC01を切っている。現状の北西壁の最大長は約3m、南西壁の壁の最大長は2.3m、周溝の幅は7~12cm、深さ3~5cmを測る。柱穴は不明である。周溝の覆土は灰黒色粘質土である。土師器片が出土している。

(2) 井戸 (SE)

井戸の構造としては若干疑問の残る1基を含め、全部で6基を検出した。弥生時代の井戸は1基、古墳時代1基、戦国時代2基、戦国時代~江戸時代1基、現代の井戸1基である。

SE04・08は調査区の境界にあるため、全体形状は不明である。

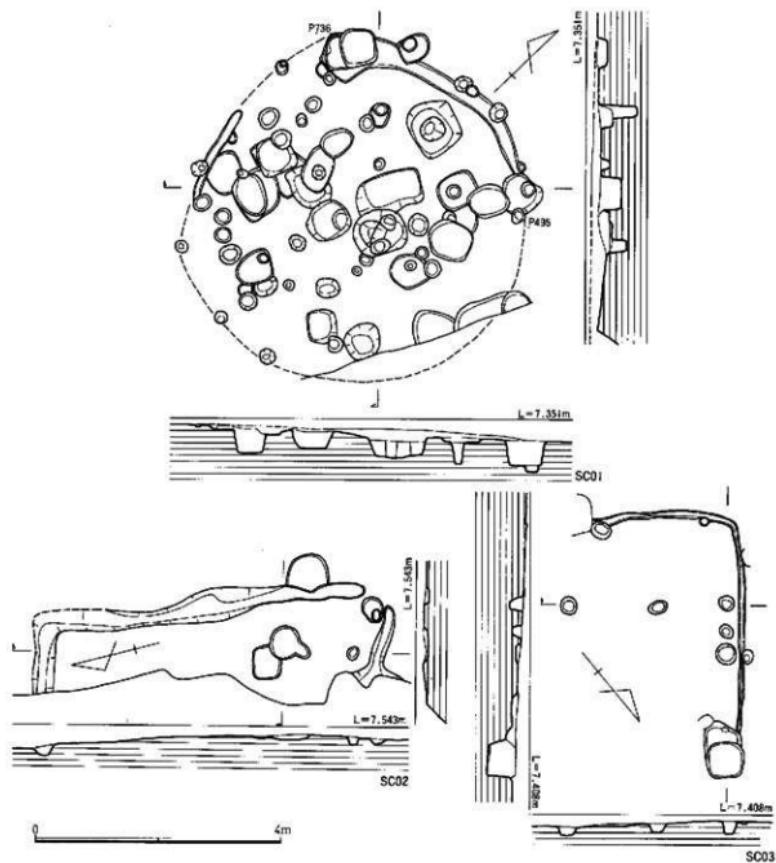


Fig. 8 住居跡SC01-03実測図 (縮尺1/80)

Tab. I 第74次調査住居跡一覧表

遺構名	形態	計測値 (cm)			ベッド状構造		火気施設(窓等) 有無	出上 遺物	時 代	備 考
		長	幅	壁高さ	規 模	位 置				
SC01	円 形	560			×		×	な	し	周溝有り
SC02	長 方 形	585	165**		×		×	な	し	周溝有り
SC03	長 方 形	350**	230**		×		×	な	し	周溝有り、SD03

SE01 (Fig. 10) 調査区東側の緩斜面に位置している。掘立柱建物SB07と切り合う。素振りの井戸で、平面形は上面が不整橢円形、底は不整の隅丸長方形を呈し、断面形は2段掘りになっており、上部は逆梯形、下部は截頭円錐形を呈している。井戸上面での最長径は2.9m、短径2.45m、深さは1mを測る。井戸底部は平坦になっており、厚さ約2mの青灰色粘土が貼られている。

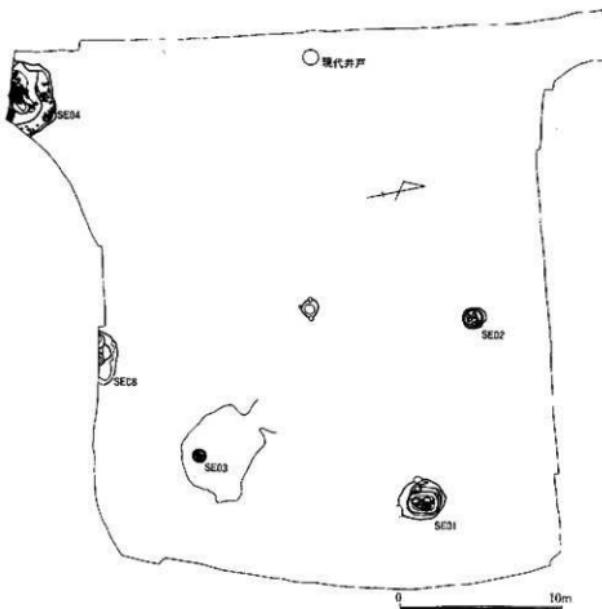


Fig. 9 第74次調査井戸配置図 (縮尺1/300)

井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土と灰色粘質土を主体としている。第1~4層までは明らかに埋めた土層をなす。又、それより以下の第30層までは、褐色土や八女粘土を含む層が多く、これらも又、意図的に埋められた層と考えられる。木製臼直上の第31層以下はヘドロ状の堆積層である。又、1層の下には第12層の炭化物層が存在する。この炭化物層は井戸祭祀の跡と考えられる。井戸覆土からは、上師器、須恵器、李朝陶器、瓦質土器、瓦等が出土しているが、量は少ない。しかし、井戸底からは、木製杵・臼・桶材が出土した。

ここで特徴的なことには、臼・杵が横倒しの状態で井戸底に納められており、これらを固定するかのように玄武岩の板石や礫が押さえとして置かれていたことである。又、臼の中や底付近にも礫が詰めてあった。更にこの臼の3隅には桶の側板が1本ずつ立てられており、桶の底板は杵と共に臼の側に置かれていた。臼の外側には臼上部に巻きついた3本ほどの纖維質が確認できたが臼を安置する際用いた植物質の紐と考えられる。

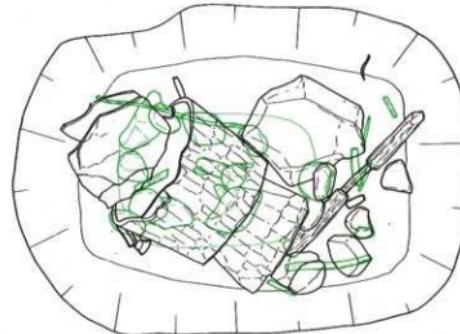
SE02 (Fig.11) 調査区の北側に位置している。上部は擾乱やトレンチにより削平を受け、八女粘土が表出している。素掘りの井戸で、井戸の平面形は、上面が不整橢円形、下面是円形を呈している。断面形は裁頭円錐形を呈しているが、上部は2段掘りになっている。井戸上面での最大径は1.45m、深さは2.0mを測る。井戸の底部は平坦である。井戸の覆土は、真黒色粘質土に径5cmぐらいの白色八女粘土ブロックを多く含んだ土層を主体とする。この層は大きな変化ではなく、間層に砂層が存在することやブロック土の落ち込み状態などで数層に分離することが可能である。又、上面から深さ40~60



井戸SE01（西から）



井戸SE01内遺物出土状態（東から）

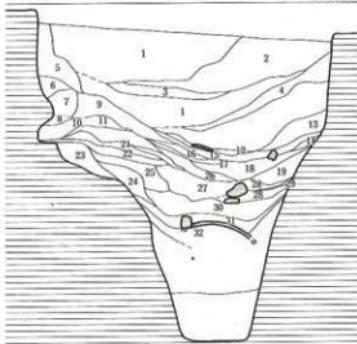
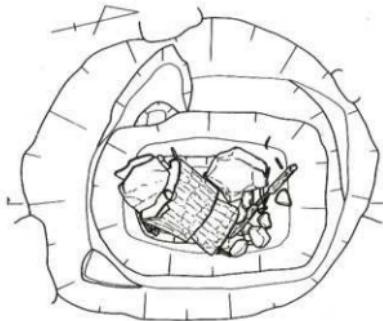


SE01土壤名称

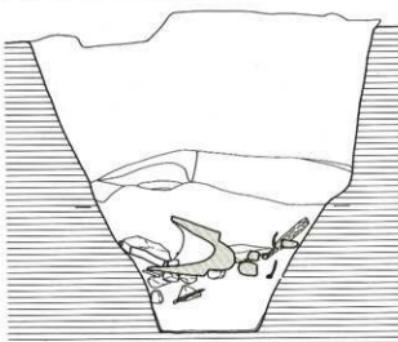
1. 墓塚褐色粘質土に褐色ブロックをわずかに含む
2. 墓塚褐色粘質土に褐色土に少ブロック含む
3. 墓塚褐色粘質土に褐色土に少ブロック含む
4. 黒色土に黄褐色土ブロックをわずかに含む
5. 黑色土に黄褐色土ブロック多量に含む
6. 黑色土に黄褐色土ブロック多量に含む
7. 黄褐色土ブロック
8. 黑色土に黄褐色土ブロック多量に含む
9. 黑色粘質土と褐色粘質土の混合土
10. 小石子を含む褐色粘質土
11. 黄褐色粘質土と褐色粘質土の混合土
12. 硬化物質(褐色)
13. 黑色土に暗灰色土混入
14. 黑色土に暗灰色土混入
15. 暗灰色土層

0 1m

L = 7.463m



L = 7.098m



16. 15cに暗灰色土と褐色土粒子含む

17. 16と同じ。16との間に茶褐色含む層がある

18. 15cに黄褐色土粒子含む

19. 褐色土に暗灰色土混入

20. 黄褐色粘質土

21. 黄褐色粘質土に黒色土含む

22. 黄褐色粘質土

23. 黄褐色粘質土に八木粘土含む

24. 地質学的粘質土ブロック

25. 21よりやや黒色い

26. 15cに茶褐色土と褐色土粒子多く含む

27. 15cに茶褐色土粒子含む

27. 15cに褐色土ブロック少しある

29. 褐色土に暗灰色土

30. 黄褐色土に褐色土粘質土に黄褐色土と褐色土のブロックを含む

31. 黄褐色粘質土に黒土混じ(～下の状)

32. 30より離れた(～下の状)

0 2m

Fig.10 井戸SE01実測図 (縮尺1/20・1/40)



井戸SE 01 土壌状態（南から）



井戸SE 01 考古出土状態（西から）



井戸SE 01 考古出土状態（南から）



井戸SE 01 白内面の状態（北から）



井戸 S E 01 構造板出土状態（西から）



井戸 S E 01 木出土地面（東から）



井戸 S E 01 構造板出土状態（東から）

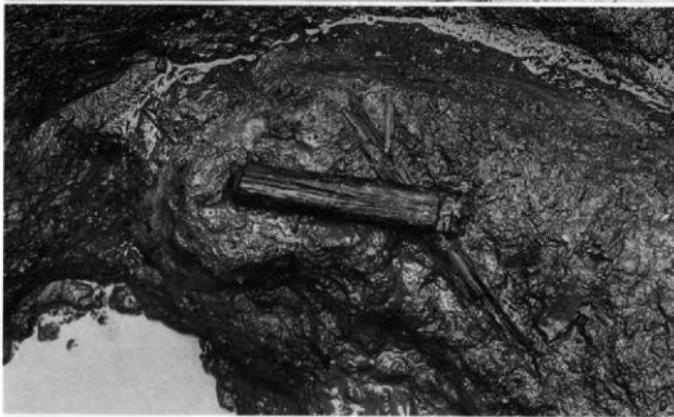


井戸 S E 01 遺物出土状態（南から）

井戸 SE01日に巻きついた縦状繊維状態（東から）



井戸 SE01木製品出土状態



井戸 SE01井戸底の状態（東から）



cmにおいてレンズ状に堆積した砂層があり、更に、深さ150cm前後には摺鉢状態に落ち込んだ粘土ブロックの層がある。井戸の中位から底部までの間に、壺や甕の完形品や木製品が埋置されており、水神祭りの状況を示している。井戸の中位・下位・底部の3ヶ所から弥生土器の完形品が出土している。

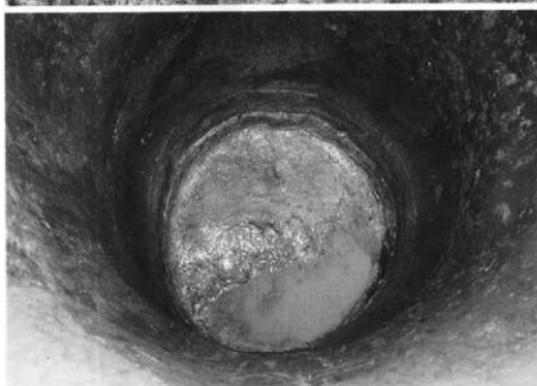
SE03 (Fig. 12) 調査区の東側に位置している。大きな擾乱壠のため上部は著しく削平されている素掘りの井戸で、井戸の平面形は、上面と底面ともに楕円形を、断面形は円筒状を呈している。

井戸上面での最大径は75cm、深さは77cmを測る。井戸の底部は平坦であるが、底には径8~25cm程度の礎を用いて約30cmの厚さに充填している。井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としている。この礎内から宝鏡印塔片、石臼片が出土している。他に土器の出土はない。

SE04 (Fig. 13) 調査区の南側境界地に位置しているため全体の形状は不明である。上部は削平を受け、更に近世の溝や土壤と切り合うために上部の形状が著しく変形している。素掘りの井戸で底



井戸 SE02 (西から)



井戸 SE02 元掘状態 (西から)



井戸 SE02 遺物出土状態 (東から)

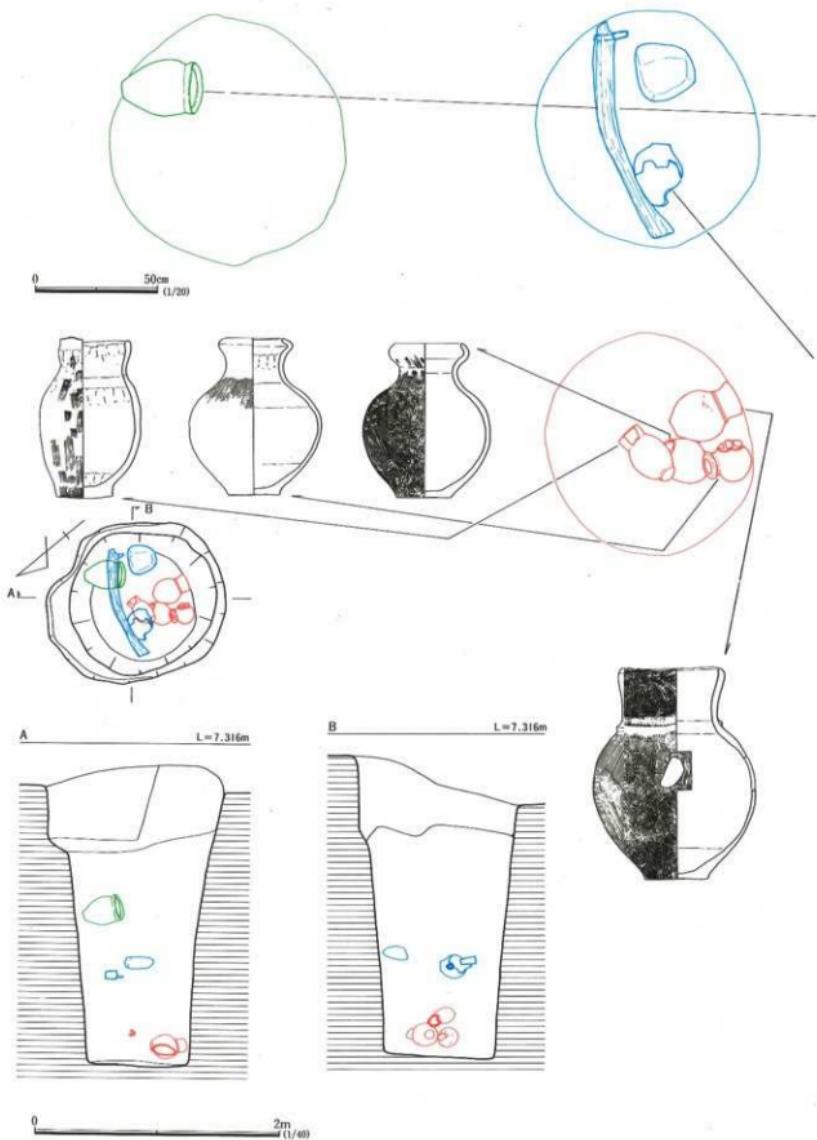
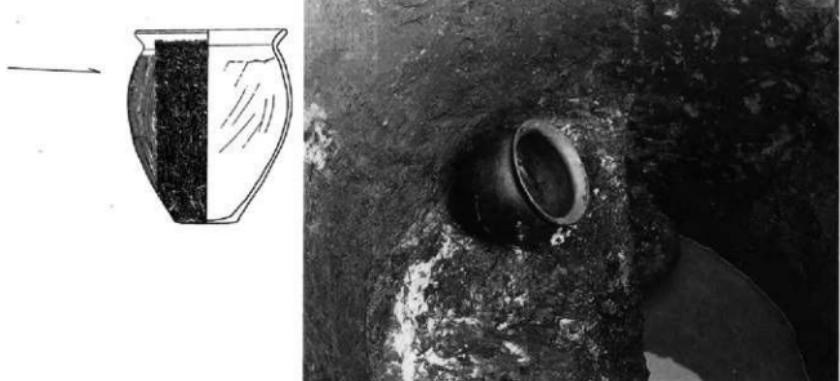
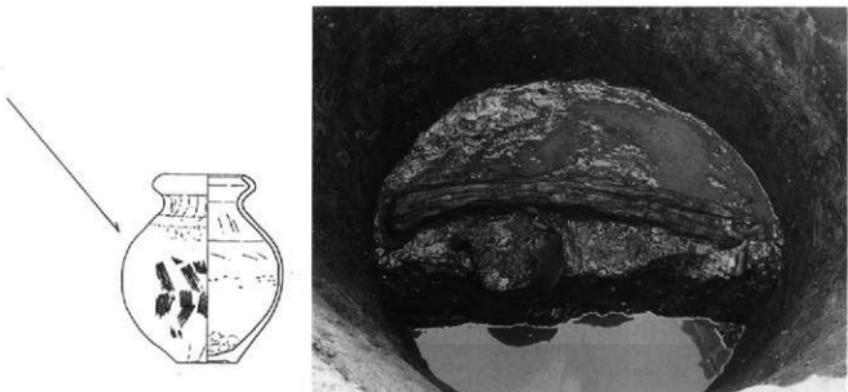


Fig. 11 井戸SE02実測図（縮尺1/20・1/40）



井戸SE02遺物出土状態（西から）



井戸SE02遺物出土状態（南から）

は浅い。井戸上面の平面形は不整橢円形を、断面形は逆梯形を呈しているが、北側側壁は階段状を呈している。

井戸上面の最大径は4.5m、深さは2.0mを測る。井戸底部には直径約52cm、深さ23cmを測る円形の掘り込みがある。ここに曲物を設置していたものと考えられる。又、北側と西側の壁において、木杭を3ヶ所検出した。西側の1本は井戸底に打ち込まれているところから、井側が存在したことを想定できる。

井戸の覆土は暗い茶褐色粘質土を主体としている。井戸上面から底までに径10~20cmの礫が投げ込まれており、特に西側からの礫の流れ込みは、厚く堆積している。これは埋め戻しの際の填圧と考えられる。井戸底には木桶が横倒しで出土した。

覆土から土師器、須恵器、備前焼鉢、瓦質土器、板碑、砥石、木槌、木桶(結桶)材等が出土している。

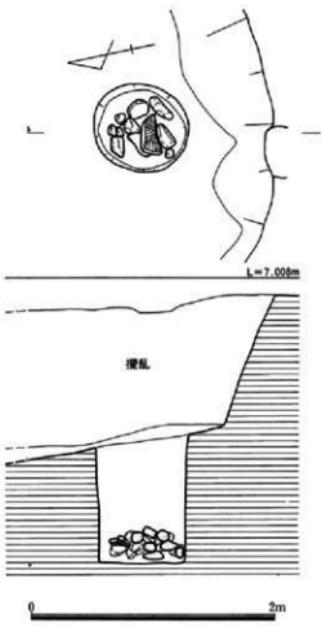


Fig.12 井戸SE03実測図 (縮尺1/40)



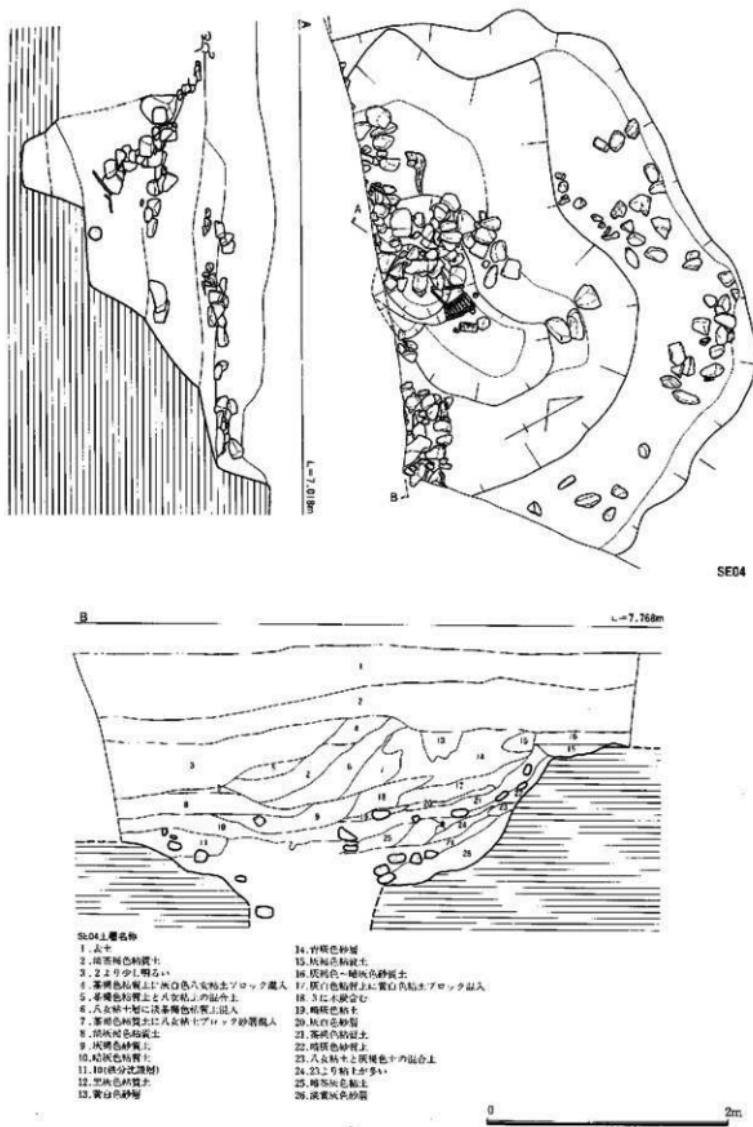


Fig. 13 井戸SE04実測図 (縮尺1/40)



井戸 S E 01 完掘状態（北から）



井戸 S E 01 木机出土状態（東から）



井戸 S E 01 土層状態（北から）



井戸 S E 01 相模出土状態（南から）



井戸 S E 04 桶・桶出土状態（北から）



井戸 S E 04 桶出土状態（東から）



井戸 S E 08 土層状態（北から）



井戸 S E 08 土層状態（北から）

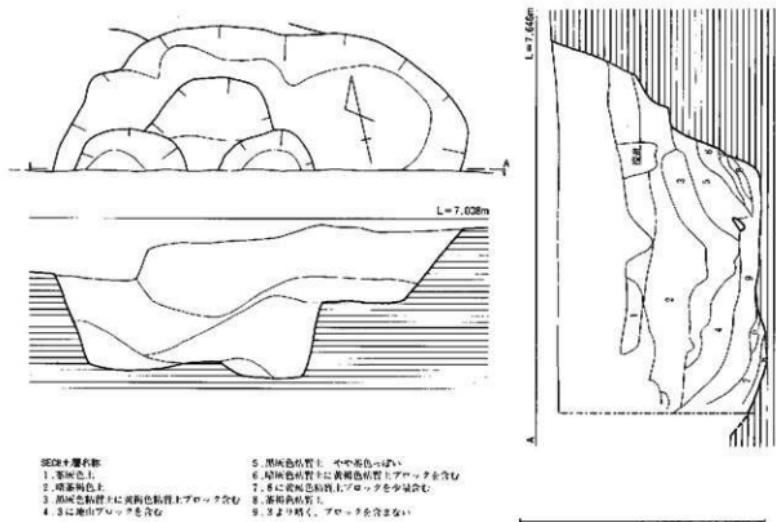


Fig.14 井戸SE08実測図 (縮尺1/40)

SE08 (Fig.14) 調査区の南側に位置しているため、全体形は不明である。上部擾乱のため形状が著しく変形している。素振りの井戸で、井戸上面の平面形は不整橢円形を、断面形は逆彌形で、北側は2段振りとなっている。井戸上面での最大径は3.3m、深さは0.6mを測る。井戸底部は平坦であるが、中央に径74cmの浅い円形の掘り込みを有している。井戸の覆土は黒褐色粘質土を主体としており、井戸覆土から土師器、靖蓋、砥石等が出土している。

(3) 井戸出土遺物 (Fig.15~24)

SE01出土遺物(1~10) 1は弥生土器の蓋形上器片、2は繩縞文の叩きをもった陶質土器である。3は李朝三島手の碗、4は瓦質土器の指鉢である。5は半瓦で、内外面ナデ調整である。叩きはみられない。6は砂岩製の砥石である。7~9は木桶の側板(樽)で、いずれも木製白の三方に立てられていたものである。10は同じく木桶の底板で、7~9と組合せのものである。11は木製の杵で、完形品である。長さ約163cmを測る。12は木製の臼で、ほぼ完形である。胴くびれの臼で、台は台形状に開く。内底は補修のため木片の寄せ木作りの跡物がしてある。高さ約66.5cm、臼の口径約60cm底径45.5cmを測る。材はアカマツであろう。その他には、用途不明製品などが出土している。

SE02出土遺物(13~35) 13は井戸中位、14は井戸下位、15~16・21・22は底部から出土した。14~19・21・22は壺型土器で、いずれも平底である。14~17の口縁部は袋状を呈し、14・16の口縁部の袋部は外面に強い稜を持っている。17の口縁部の袋部は退化傾向があり、21・22では口縁部がわずかに内湾するほどに退化している。22の胴部中位には穿孔がある。13・20は甕で、口縁部は緩やかに外反し、端部は丸味をもっている。胴部の内外面はヘラケズリ状の調整で、タテ方向の強いナデを施している。

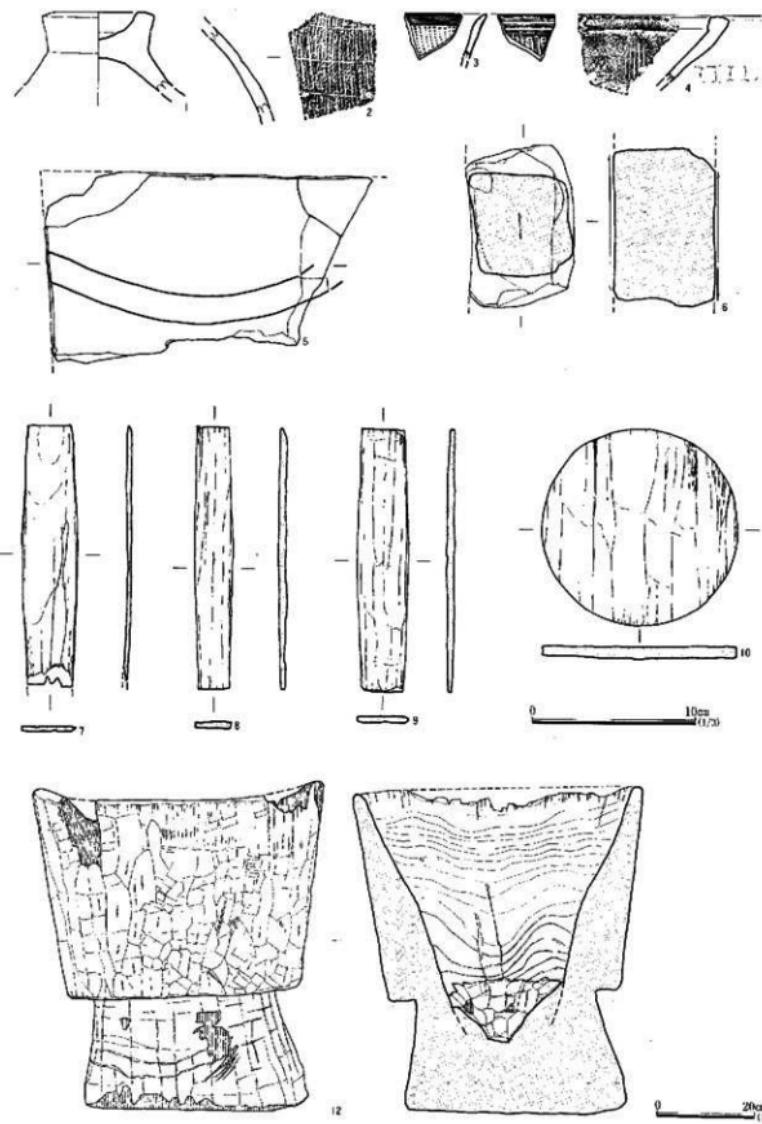
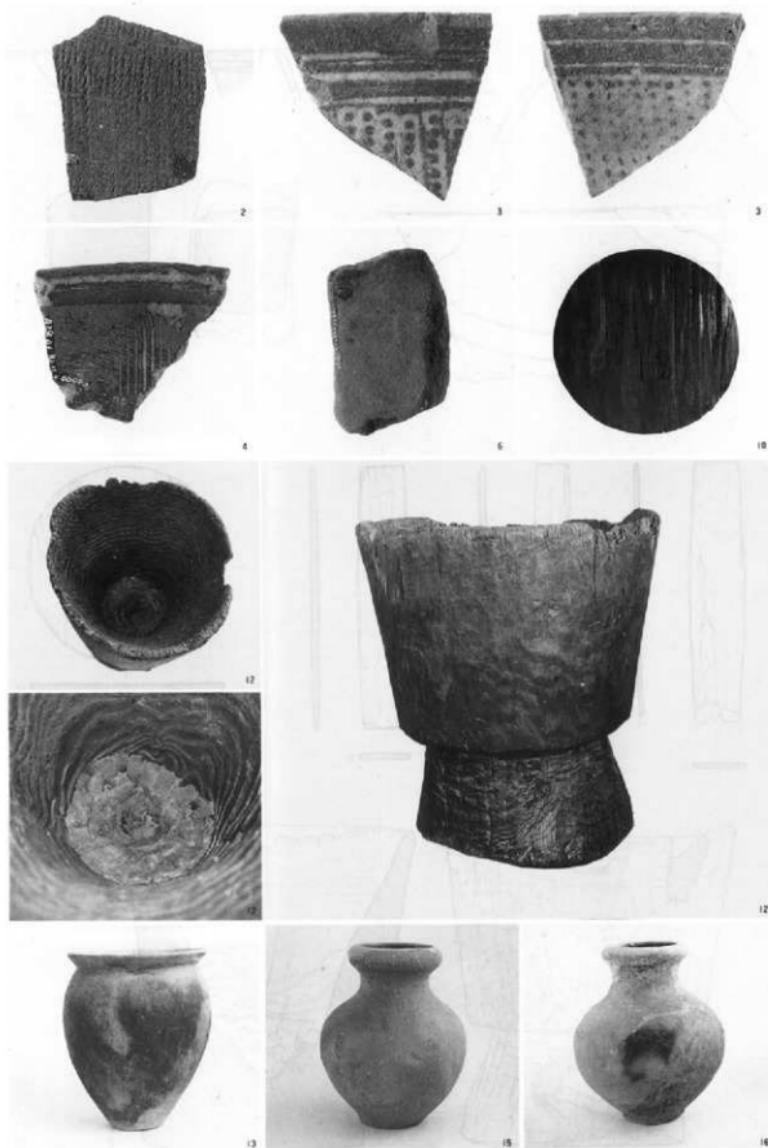


Fig. 15 井戸SE01出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/10)



井戸SE01・SE02出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する。



Fig. 16 井戸SE02出土遺物実測図① (縮尺1/3)

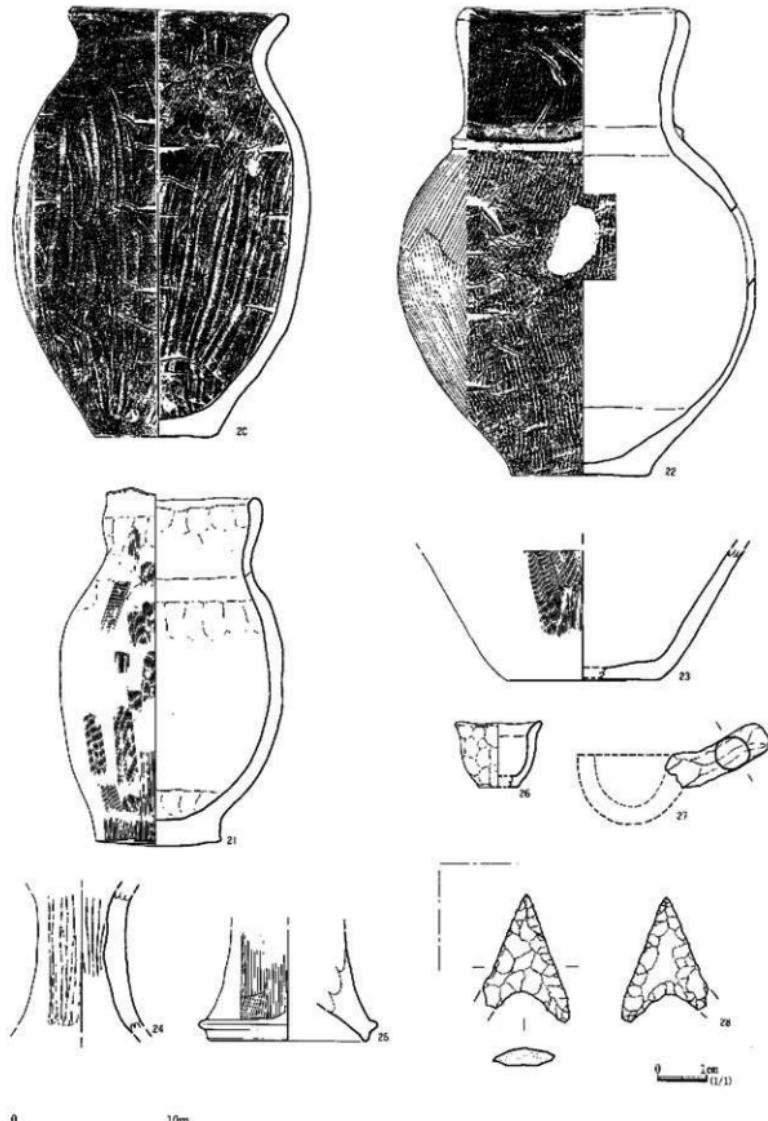


Fig.17 井戸SE02出土遺物実測図② (縮尺1/1・1/3)

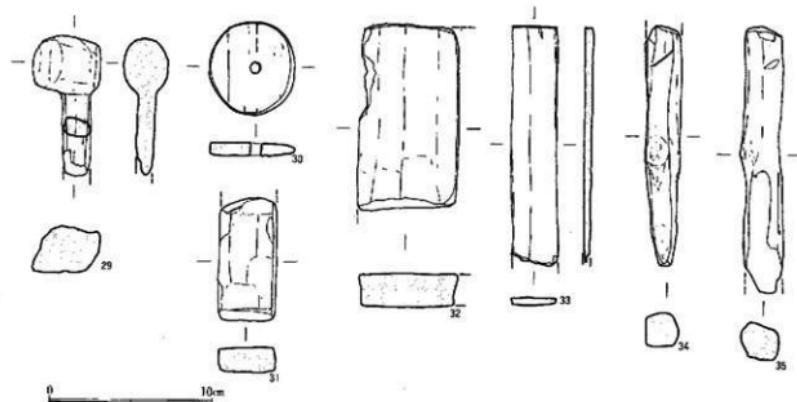


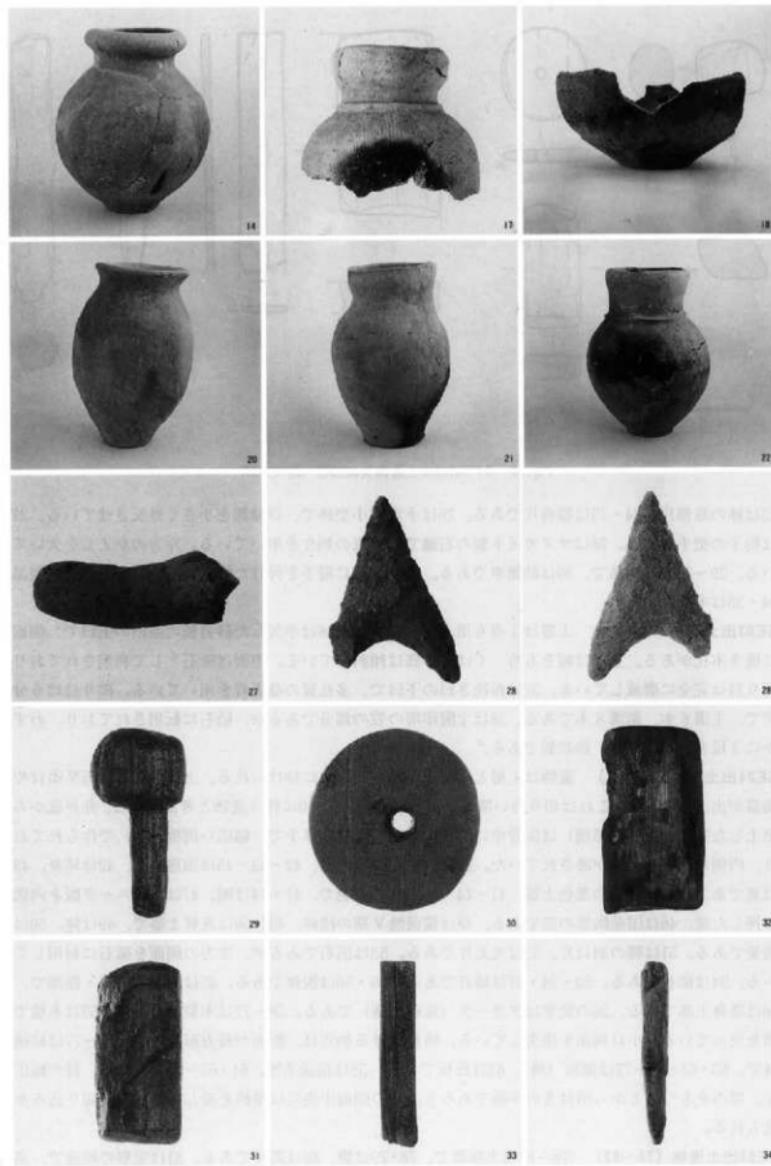
Fig. 18 井戸SF02出土遺物実測図③ (縮尺1/3)

23は鉢の底部片、24・25は器台片である。26は手堀の小型鉢で、口縁部を小さく外反させている。27は杓子の把手である。28はサヌカイト製の石鐵で、横長の剝片を用いている。片方のかえしを欠いている。29-35は木製品で、30は紡錘車である。29は上部に握手を付けた棒状製品、31-33は板状製品、34・35は木杭である。

SE03出土遺物(36~38) 土器は1点も出土していない。36は半欠した砂岩製の茶白の上白で、側面に挽き木孔がある。上縁は幅をもち、くぼみの底は傾斜している。下面是砥石として利用されており、擦り目は完全に磨滅している。37は粉挽き白の下白で、多孔質の凝灰岩を用いている。擦り目は6分割で、主溝6本、副溝8本である。38は宝篋印塔の笠の部分であるが、砥石に転用されており、わずかに3段を残している。砂岩製である。

SE04出土遺物(39~77) 遺物は上層と中層以下からの出土に分けられる。上層からは伊万里染付や陶器が出土しており、これは切り合い関係にある近世清のSD10に伴う遺物と考えられる。井戸底から出土した完形の木桶(結桶)は保管中に粉失した。この桶は厚手で、幅広い側板(樽)で作られており、内側には把手の柄が渡されていた。39は弥生土器の底部、42・43・45は須恵器で、42は环身、43は蓋である。40は内墨の黒色土器、41・44・47は伊万里焼で、41・44は碗、47はコンニャク版を内底に押した皿、46は国産陶器の皿である。48は備前焼V期の指鉢、49・50は瓦質土器で、49は鉢、50は湯釜である。51は輪の羽口片、52は丸瓦片である。53は回石であるが、片方の側面を砥石に利用している。54は砥石である。53・54・57は砂岩である。55・56は板碑である。55は山形の首部・額部で、56は塔身上部である。56の梵字はタラーク(地蔵菩薩)である。58~77は木製品である。59は木柾で、柄を失っている。小口両面を損失している。柄を付ける枘穴は、断面が長方形である。60~77は結桶材で、60・61・63~77は側板(樽)、62は底板である。58は用途不明。61・63~69の側板は、材が幅広く、厚みをもつことから柄付きの平桶であろう。69の側面中央には横柄を差し込む枘穴の切り込みが見られる。

SE08出土遺物(78~82) 78~80は土師器で、78・79は甕、80は高壺である。81は完形の鉢壺で、高さ8.5cmである。82は泥岩製の砥石である。以上の土器は5世紀代の所産である。



井戸SE02出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する。

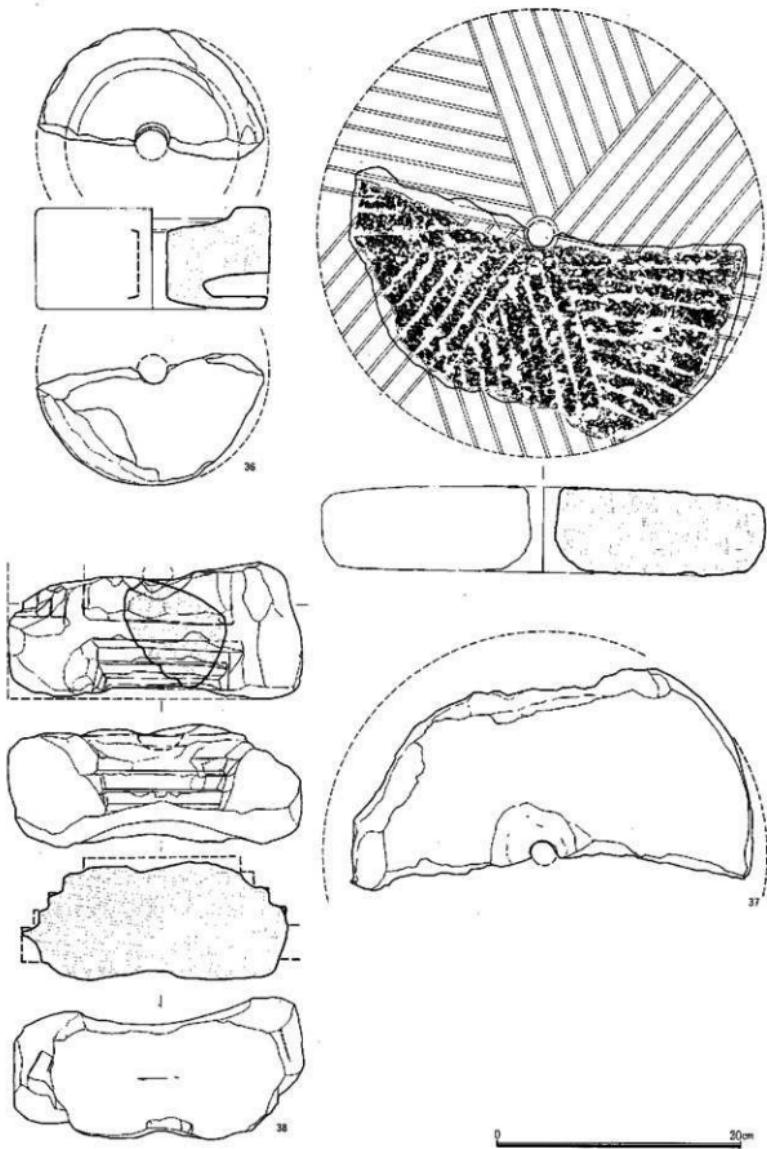


Fig. 19 井戸SE03出土遺物実測図 (縮尺1/4)

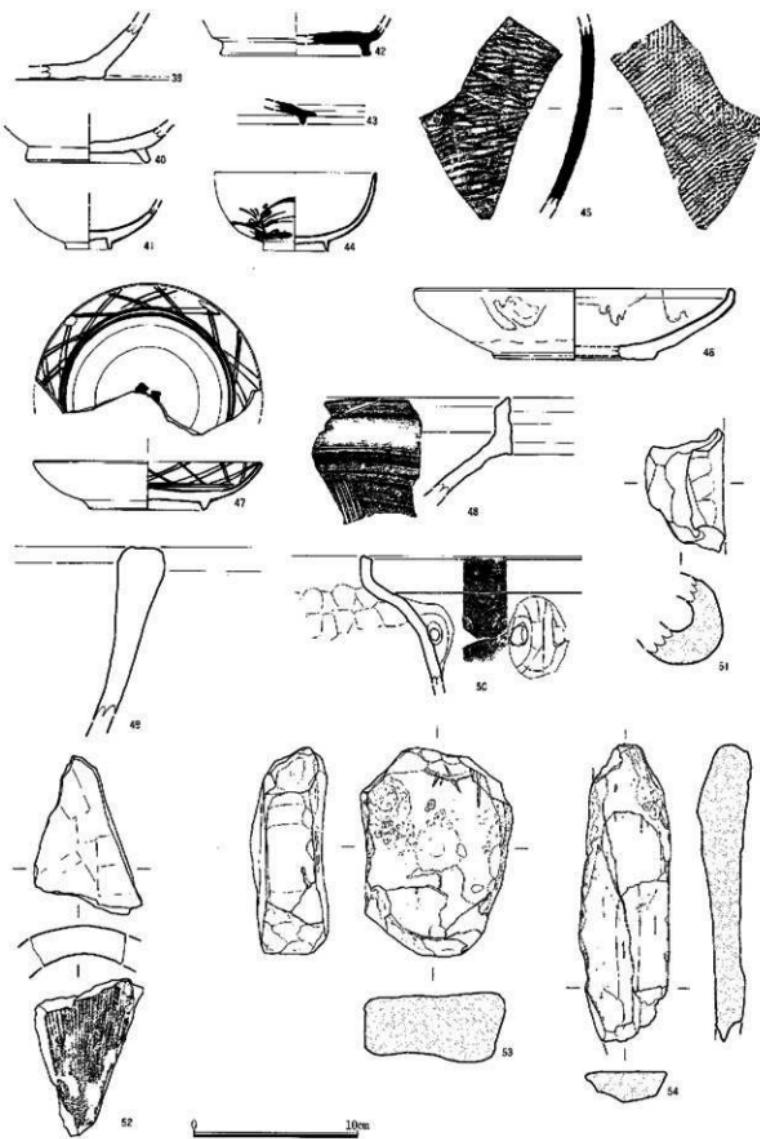
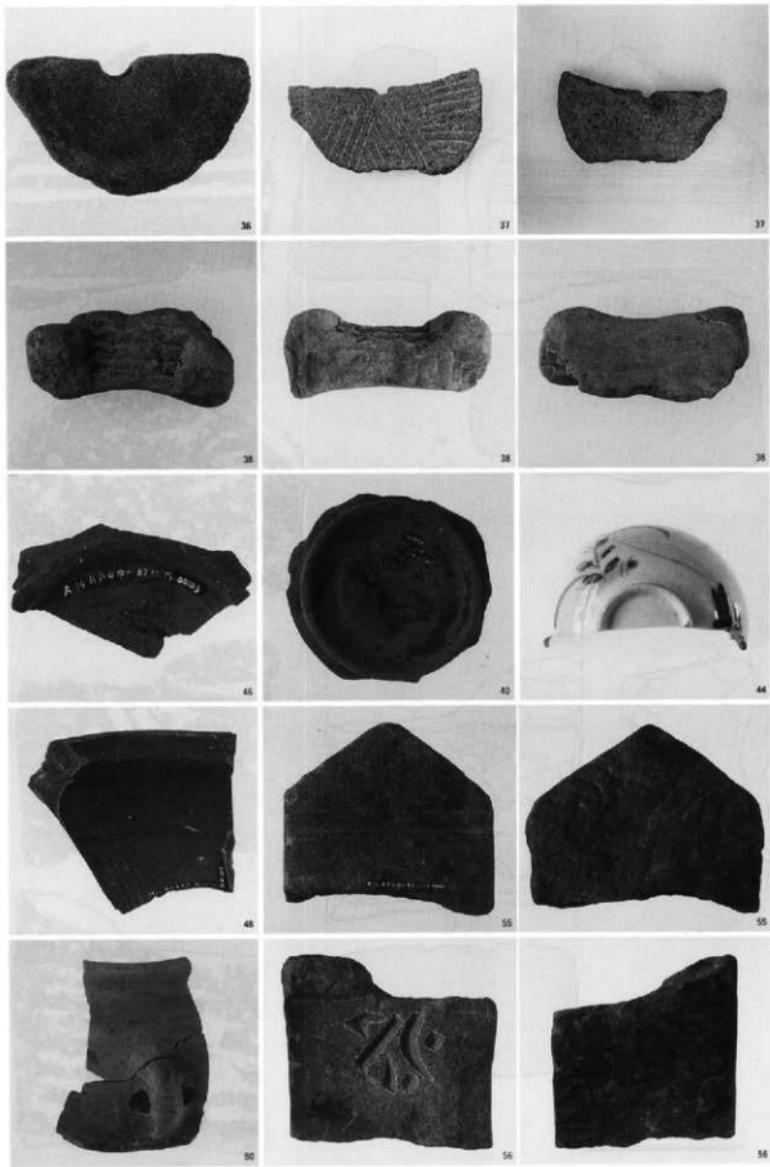


Fig. 20 井戸SE04出土遺物実測図① (縮尺1/3)



井戸SE03・04出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する。

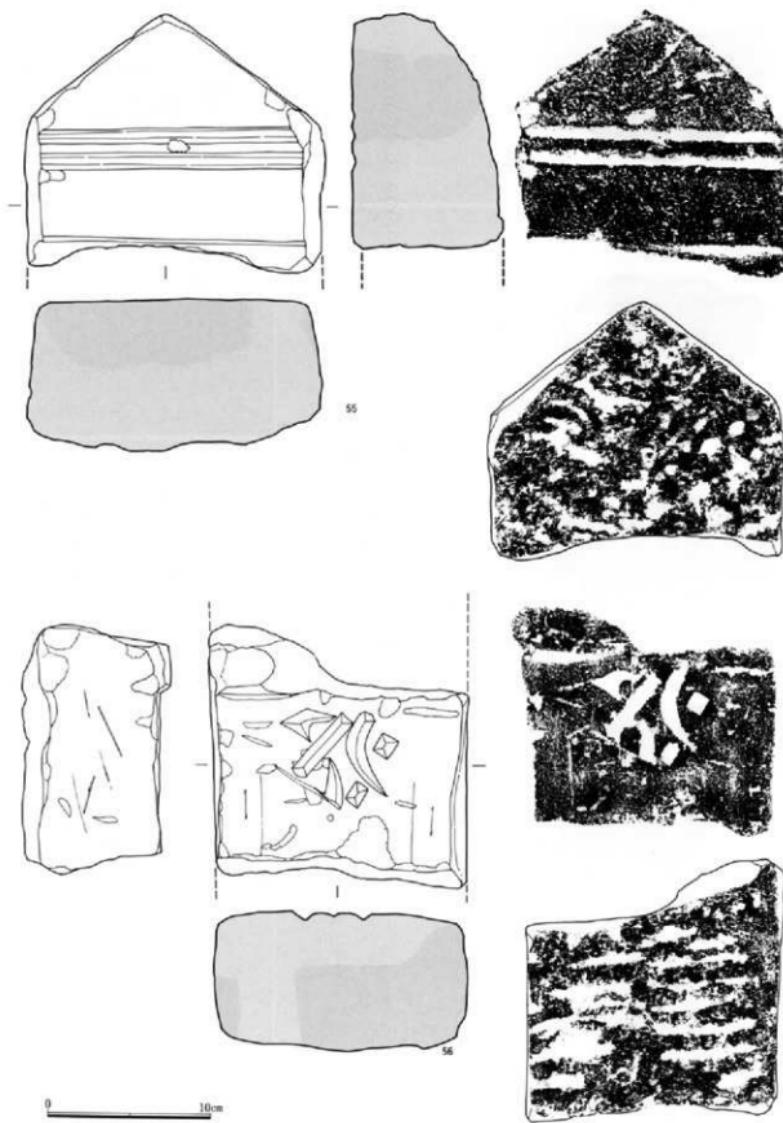


Fig. 21 井口SE04出土遺物実測図② (縮尺1/3)

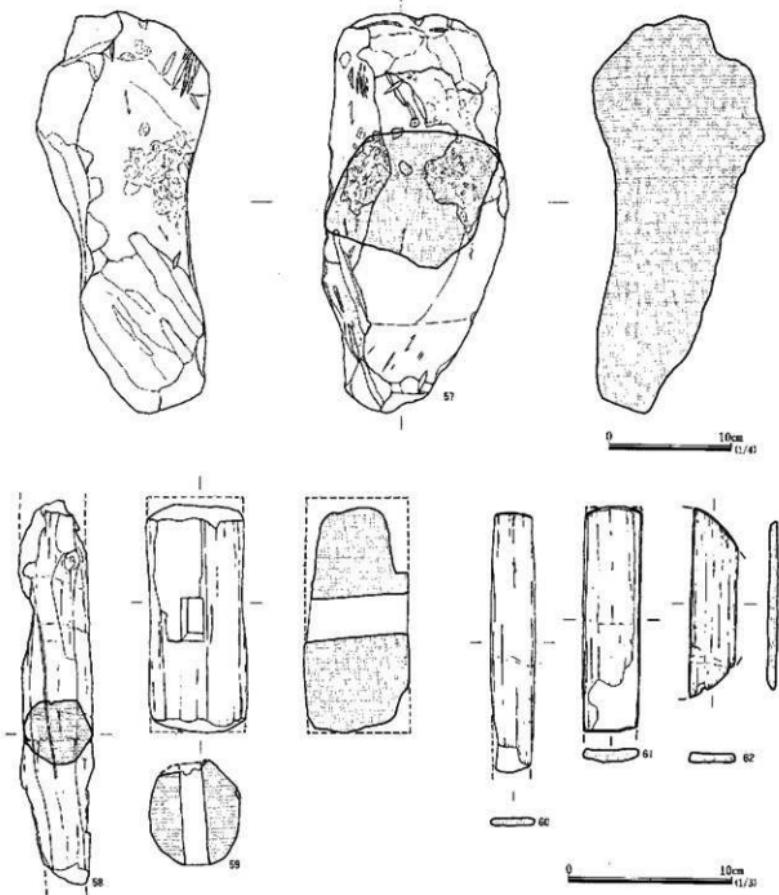
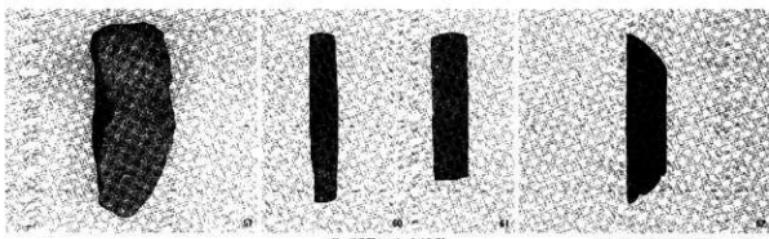


Fig.22 井戸SE04出土遺物実測図③ (縮尺1/3)



*数字は実測図の番号に一致する。

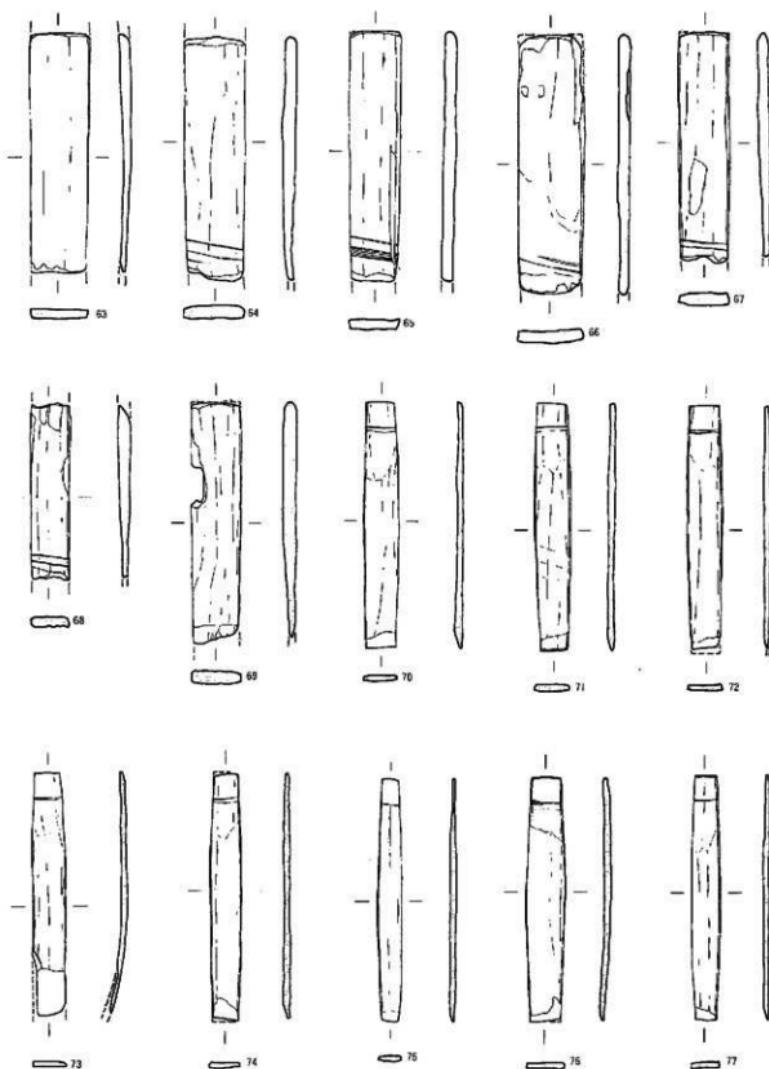
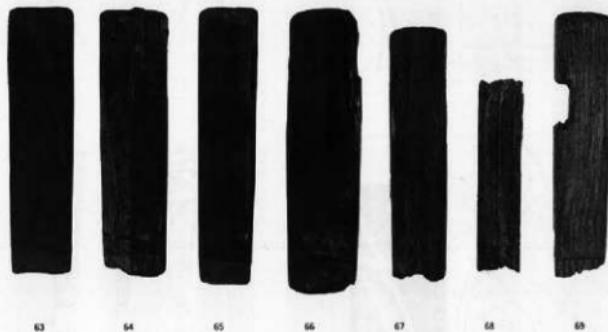
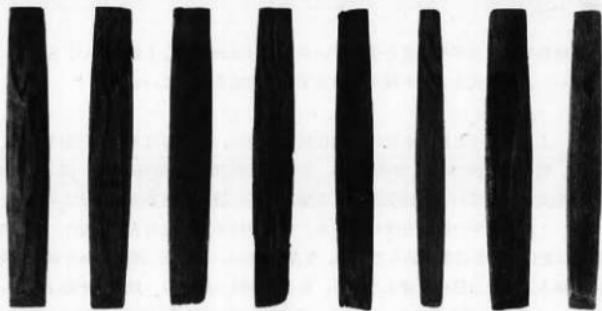


Fig.23 井戸SE04出土遺物実測図④ (縮尺1/3)



63 64 65 66 67 68 69



70 71 72 73 74 75 76 77



80



81



82

83

井戸SE04・08出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する。

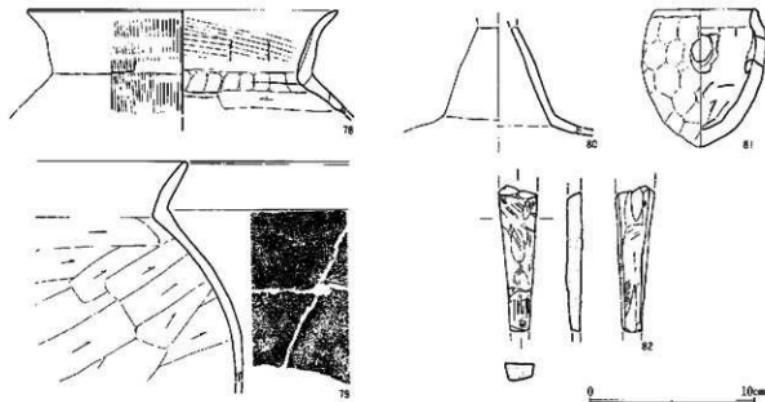


Fig. 24 井戸SE08出土遺物実測図 (縮尺1/3)

(4) 土壙 (SK)

土壙は7基を検出した。削平や擾乱を受けているため形状が不明な土壙が多い。SK01・07・11の削平・擾乱は著しい。古墳時代から江戸時代に相当する時期幅をもっている。

SK04 (Fig. 25) 上面は削平と擾乱を受け、遺存状態は悪い。平面形は不整楕円形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存の長径230cm、短径177cm、底面の長径200cm、短径168cm、深さ40cmを測る。覆土は黒色粘質土を主体としている。出土遺物は土師器高环・甕、須恵器片が出土している。

SK05 (Fig. 25) 上面は削平と擾乱を受けている。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。底部は更に摺鉢状に掘り込んでいる。現存長130cm、幅98cm、深さ47cmを測る。内底のPitの最大径は95cmを測る。覆土は黒色粘質土である。出土遺物は土師器片、鐵滓等が出土している。

SK07 (Fig. 25) 上面は削平を受けている。又、溝SD04、掘立柱建物SB11に切られる。平面形は不整隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形であるが、底面は起伏がある。現存長430cm、現存幅270cm、深さ37cmを測る。出土遺物は土師器腹片・甕片、須恵器片、砥石、黒曜石である。

SK10 (Fig. 25) 上面は削平と擾乱を受けている。溝SD08・09と切り合う。平面形は不整長方形を呈し、断面形は一方に片寄った摺鉢状である。元来は2つの土壙の切り合いと考えられる。現存長170cm、最大幅400cm、最大の深さ21cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土を主体としている。出土遺物は白磁碗、近世陶磁器片、摺鉢片等がある。

SK11 (Fig. 25) 上面は削平と擾乱を受けている。井戸SE04と切り合う。境界地にあるため全体形は不明だが、現状の平面形は不整形を、断面形は逆梯形状を呈している。現存長262cm、最大幅100cm、深さ40cmを測る。覆土は暗い褐色粘質土を主体としている。出土遺物は土師器腹片、土師質土器等が出土している。

SK12 (Fig. 26) 調査区北西側の当該地の出入口付近で検出した。上面は削平と擾乱を受けている。

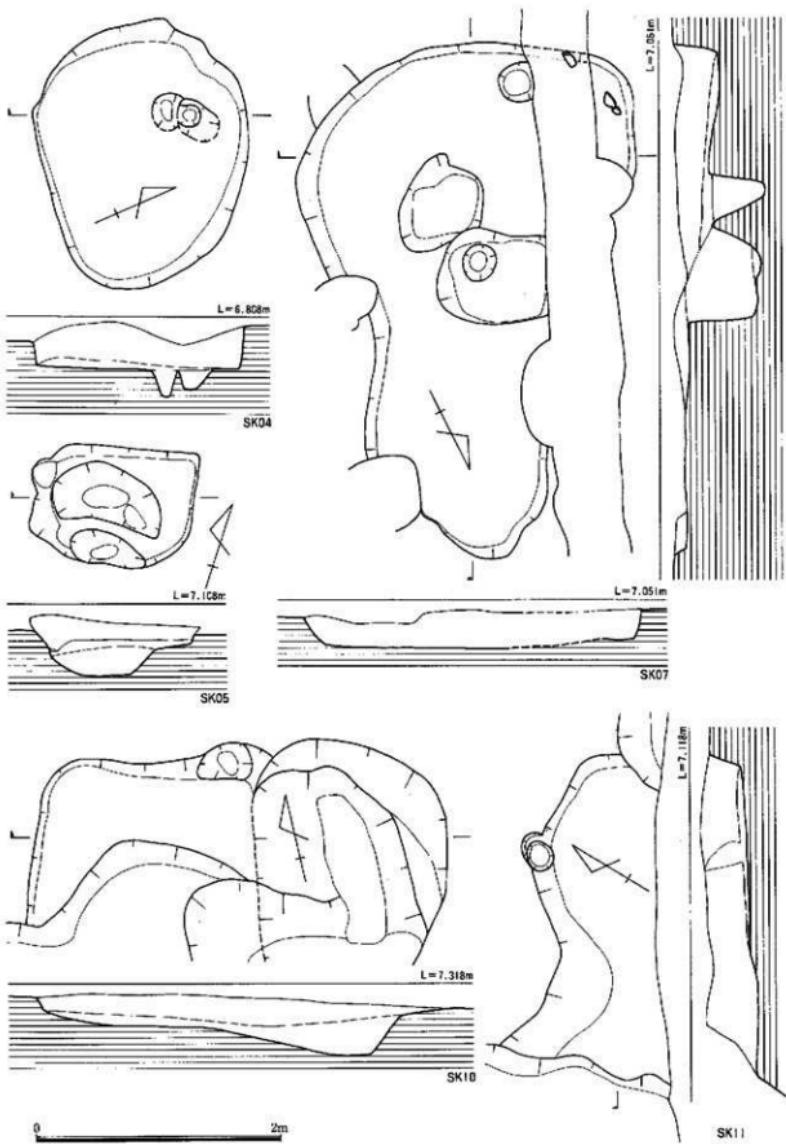
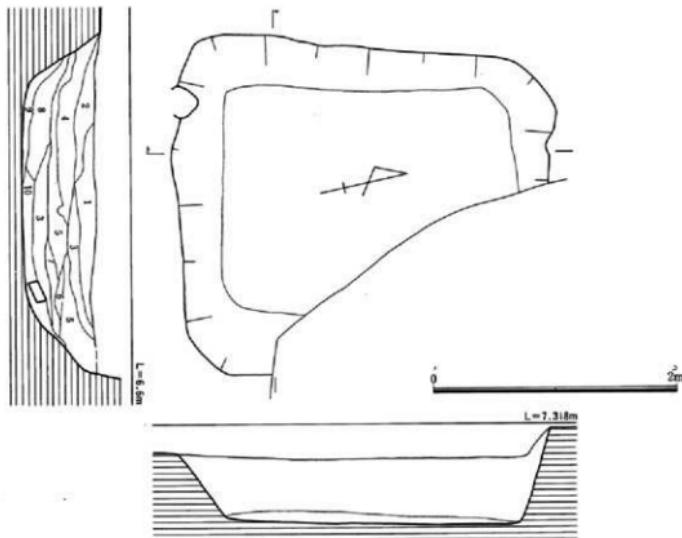
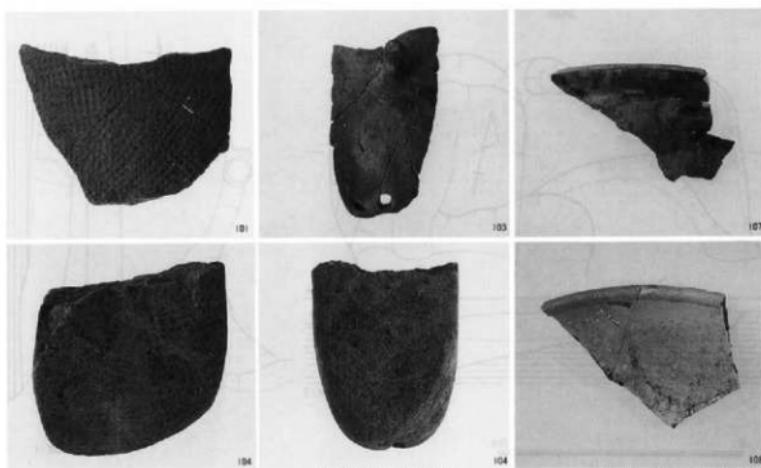


Fig. 25 土壌SK04・05・07・10・11実測図 (縮尺1/40)



SK12土層名類
 1. 黒褐色土(黒色土、赤褐色土大ブロック少含む)
 2. 黄褐色土(黄色土、赤褐色土大ブロック多量に含む)
 3. 黑褐色土(赤褐色土のブロック、明る褐色のブロック含む)
 4. 黑褐色土(黒色土、赤褐色土の小ブロック多量に含む)
 5. 1より暗い

Fig.26 土壌SK12実測図 (縮尺1/40)



土器SK07・12出土物

*数字は実測図の番号に一致する

土壤SK4
(雨から)



土壤SK12
(雨から)



土壤SK12土層状態
(雨から)



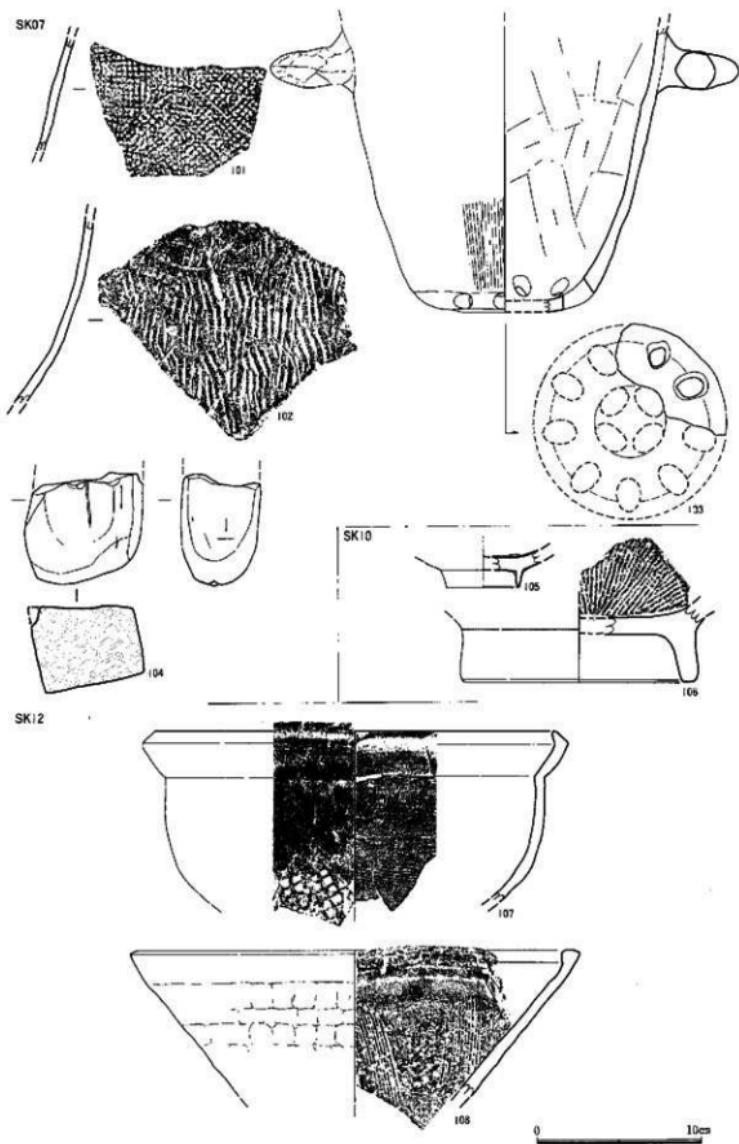


Fig. 27 土壤SK07・10・12出土遺物実測図 (縮尺1/3)

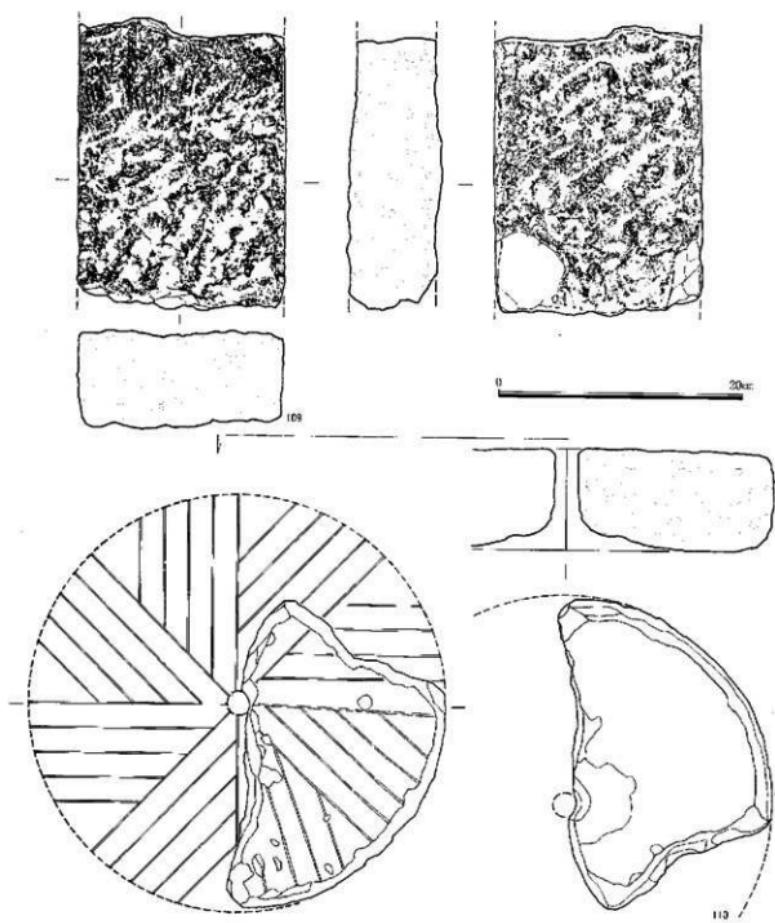


Fig. 28 土器SK12出土遺物実測図 (縮尺1/4)

平面形は隅丸長方形を呈し、断面形は逆梯形状である。現存長310cm、底面の長さ245cm、最大幅275cm、深さ77cmを測る。覆土は黒色粘質土と灰色土を主体としている。遺物は中国白磁皿・碗、瓦質土器の擂鉢と足鍋、板磚、石臼、滑石製品片等が出土している。

(5) 土器出土遺物 (Fig. 27・28)

SK07出土遺物 (101~104) 101~103は土師器で、101、102は蓋片である。101の外面は格子目叩き、

102の外面は平行叩きを施しており、須恵器の器面調整の手法を用いている。103は瓶で、外面に把手を持つ。内面はタテ方向へのラケグリで、丸底の底部には穿孔がある。104は砾石である。これらの造物は6世紀代の所産と考えられる。

SK10出土遺物 (105・106) 105は中国白磁碗V類、106は国産陶器の摺鉢で、江戸時代の所産である。

SK12出土遺物 (107~110) 107、108は瓦質土器で、107は足錠、108は摺鉢である。109、110は石製品である。109は板砂の基部で、両面には粗いノミ痕が残る。110は粉挽き臼の下臼で、約1/4の残欠である。擦り目は8分割しており、主溝8本、副溝4本である。多孔質の凝灰岩を材としている。瓦質土器は16世紀代の所産である。

(6) 製鉄遺構 (SX)

調査区東側で、2ヶ所検出した。いずれも上部を削平されており、遺存状態は良好ではない。

SX03 (Fig.29) 小Pitに切られている。平面形は不整形方で、断面形は二段掘りになっている。底面の北側に寄って、径48cm、深さ16cmの小Pitが設けられている。このPitは摺鉢状を呈し、内部には焼土、炭を含む黒灰色土、黒褐色土が堆積している。このPitの上部には約10cmの厚さに鉄滓が堆積していた。遺物は土師器片、須恵器片、瓦質土器片が出土した。他に近世の陶磁器片が混入している。

SX06 (Fig.29) 平面形は不整形のハート形で、断面形は東西が二段掘りの摺鉢状を、南北が逆梯形状を呈している。中央には径約40cmのPitがあるが、これは2次的な遺構と考えられる。土壌の上位には径5~20cm程度の鉄滓が多く散布している。2段目の肩部周辺には10~20cm大の鉄滓が環状に分布している。下層土層の状態を観察すると、第1・2層はスラッグを多量に含む黒色粘質土層、第3層は黒色粘質土層に地山ブロックが多く含む層で、焼土等は含まない。第4層は茶灰色粘質土層である。中央のPitは1段目から真っ直ぐ壁が立っているので、柱穴と考えられる。

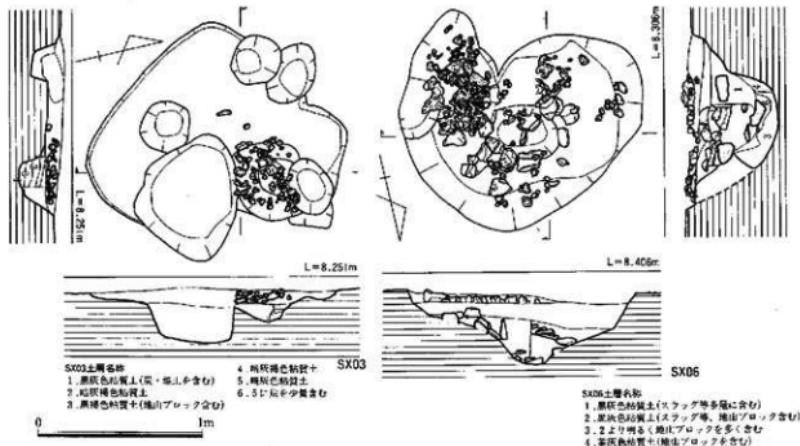


Fig.29 製鉄遺構SX03・06実測図 (縮尺1/30)

製鉄造構SX03・06
(南西から)

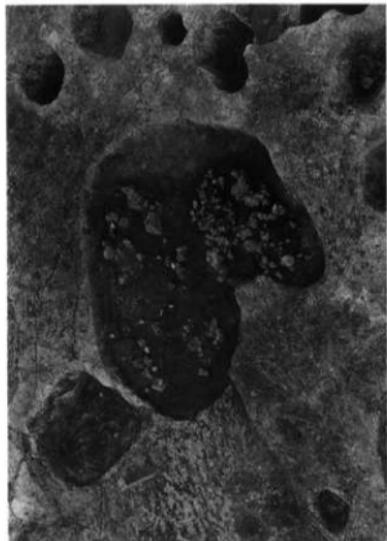


製鉄造構SX03
(東から)



S.P.透土層状態
(南から)





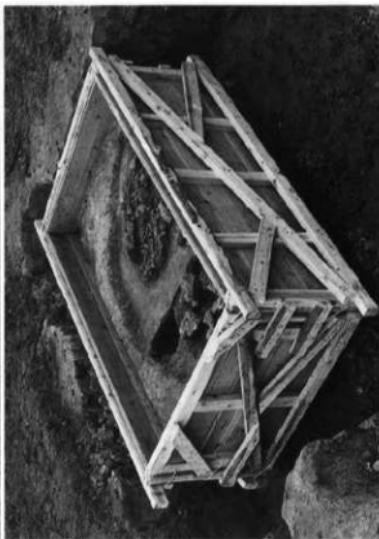
製鉄遺構 SX06 (東から)



製鉄遺構 SX06 (西南から)



SX06 土面状況 (南から)



製鉄遺構 SX06 (西から)

(7) 製鉄遺構出土遺物

SX03出土遺物 多量に鉄滓が出土したが、今だ分析は行っていない。上師器、須恵器片、瓦質土器片の他国産陶磁器が出上している。近世陶磁器は流れ込み資料である。他に鉄釘の破片がある。

(8) 掘立柱建物 (SB)

調査区の東側にPitの集中地域があり、北東側を中心に掘立柱建物を検出した。SB01～SB24までの建物を検出した。その他、柱列が揃うものが、多数存在する。しかし、遺構面の擾乱と削平が著しいことや、柱穴の重複の著しいことなどの理由により掘立柱建物の検出については疎漏が多いものと考えられる。

SB01 (Fig.31) 調査区中央部で検出した。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN38°Eに置き、柱間は梁間8.9尺、桁間15.7尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径50～73cm、深さ18～26cmを測る。柱根径は15～30cmである。柱穴から弥生土器片、土師器高环片が出土している。

SB02 (Fig.31) 調査区中央部で検出した。建物基礎と擾乱により柱穴が削平されており、全形は不明である。梁行2間、桁行2間の規模の掘立柱建物であるが、南西隅の柱穴が削平されている。主軸方位をN25°Wに置き、柱間は梁間11.0尺、桁間16.3尺を測る。掘り方は隅丸長方形と考えられるが、



Fig.30 第74次調査掘立柱建物配置図 (縮尺1/300)

削平を受け、ほとんど遺存していない。径20~40cm、深さ6~54cmを測る。柱根径は22~28cmである。柱穴から土師器、須恵器等が出土している。

SB03 (Fig. 31) 調査区北側で検出した。擾乱層と基礎工事のため柱穴を損傷しており、全形は不明である。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN37°Eに置き、柱間は梁間8.9尺、桁間15尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径47~57cm、深さ10~22cmを測る。柱根径は20cmである。柱穴から弥生土器片、土師器片が出土している。

SB04 (Fig. 31) 調査区北東側で検出した。住居跡SC01-03と切り合い関係にある。梁行1間、桁行1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN65°Wに置き、柱間は梁間7.3尺、桁間10.6尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径70~85cm、深さ40~55cmを測る。柱根径は22cmである。柱穴から弥生土器、土師器が出土している。

SB05 (Fig. 31) 調査区の北東側で検出した。SB04建物と切り合っている。梁行1間、桁行2間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN27°Eに置き、柱間は梁間17.0尺、桁間9.9尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長径30~73cm、深さ19~54cmを測る。柱根径12~30cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

SB06 (Fig. 31) 調査区の東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しい。梁行1間、桁行2間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN27°Wに置き、柱間は梁間8.6尺、桁間15.2尺を測る。掘り方は不整円形を呈し、長径50~76cm、深さ21~56cmを測る。柱根径20cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB07 (Fig. 32) 調査区の北東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しく、また、井戸SE01と切り合う。梁行2間、桁行3間の規模をもち、南側に1間幅の庇が付く掘立柱建物である。主軸方位をN14°Eに置き、柱間は梁間12.5尺、桁間15.9尺を測る。建物内にすっぽり入る形でSE01が存在する。掘り方は隅丸長方形または不整梢円形を呈し、長径44~77cm、深さ8~80cmを測る。柱根径20~22cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB08 (Fig. 32) 調査区の北東側で検出した。井戸SE01から切られ、全形は不明である。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN32°Eに置き、柱間は梁間10.2尺、桁間12.2尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長径48~70cm、深さ10~54cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB09 (Fig. 32) 調査区の北東側で検出した。土壤SK07、溝SD04、井戸SE01から切られ、全形は不明である。梁行1間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN37°Eに置き、柱間は梁間9.6尺、桁間15.2尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長さ90~133cm、深さ42~64cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB10 (Fig. 32) 調査区の北東隅で検出した。溝SD01に切られ、又、削平も著しいため全形は不明である。梁行2間、桁行2間の規模の掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN23°Eに置き、柱間は梁間10尺、桁間13.6尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ65~77cm、深さ31~48cmを測る。柱根径21cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

SB11 (Fig. 32) 北東側の境界地に在るため全形は不明である。梁行1間以上、桁行2間以上の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN64°Wに置き、柱間は桁間16.3尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長径67~78cm、深さ24~33cm、柱根径25cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器、黒曜石が出土している。

SB12 (Fig. 33) 調査区北東側で検出した。住居跡SC01を切っている。溝SD04に切られ、SB11と切

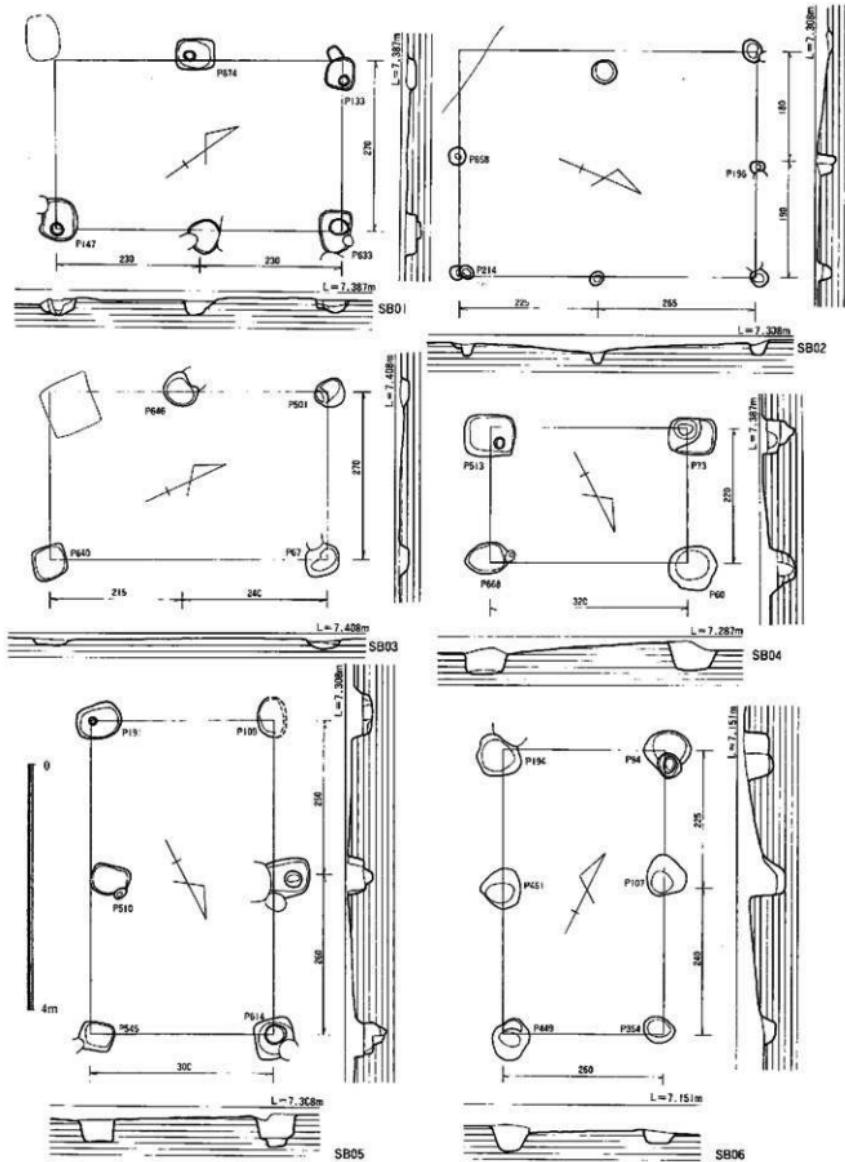
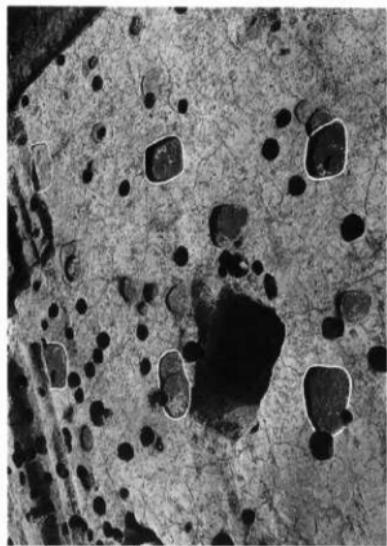
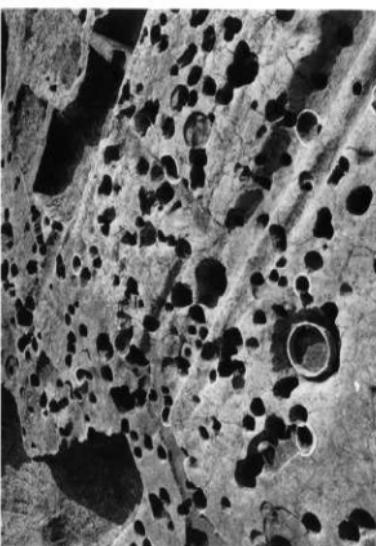


Fig. 31 据立柱建物SB01~06実測図 (縮尺1/80)



擧立柱建物 S B 01 (北から)



擧立柱建物 S B 02 (北から)



擧立柱建物 S B 03 (東から)



擧立柱建物 S B 04 (西から)

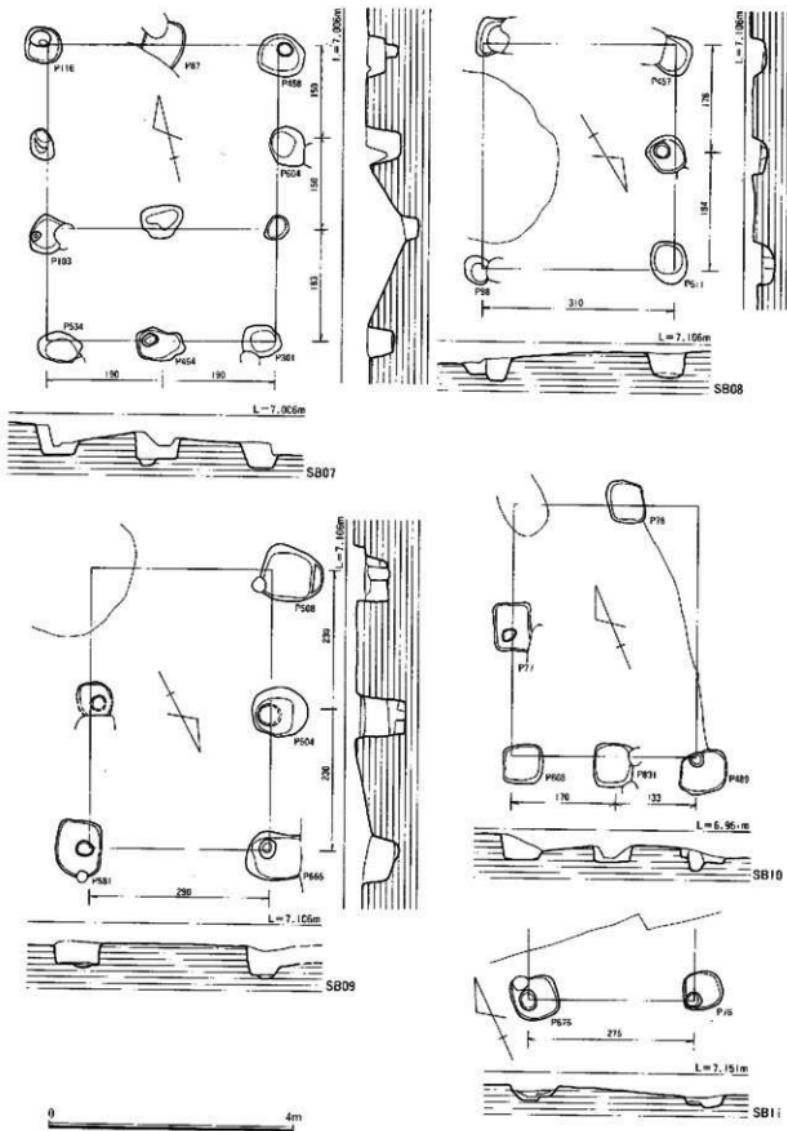
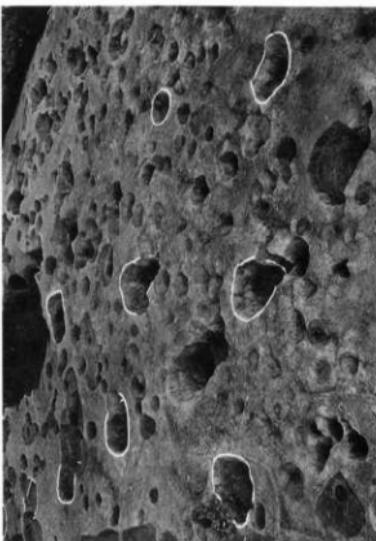


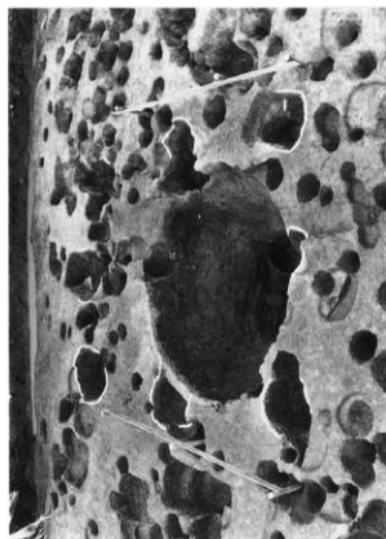
Fig.32 挖立柱建物SB07~11実測図 (縮尺1/80)



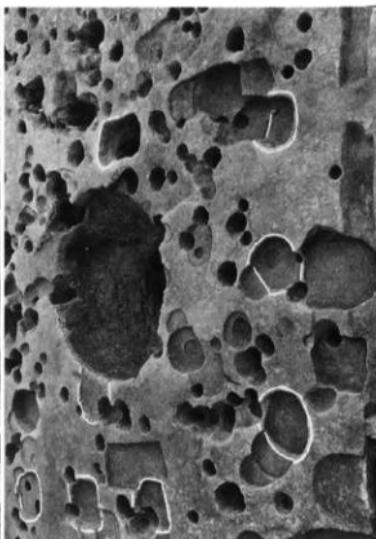
獨立柱繩物 SB 05 (西から)



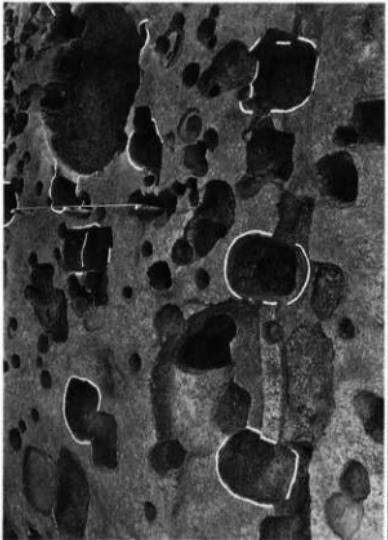
獨立柱繩物 SB 06 (南西から)



獨立柱繩物 SB 07 (東から)



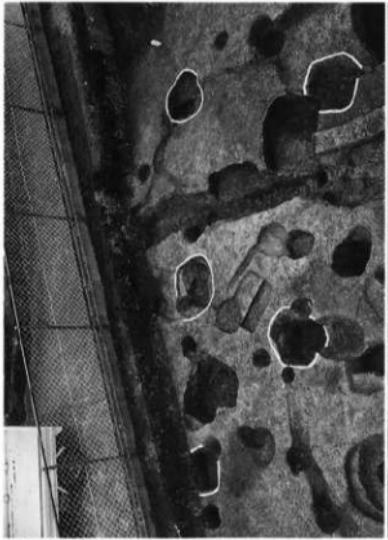
獨立柱繩物 SB 08 (西から)



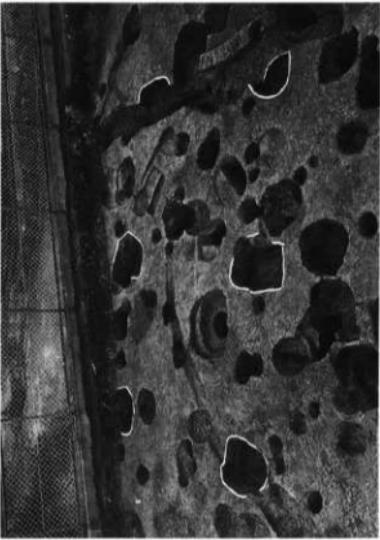
掘立柱建物 S B 9 (西から)



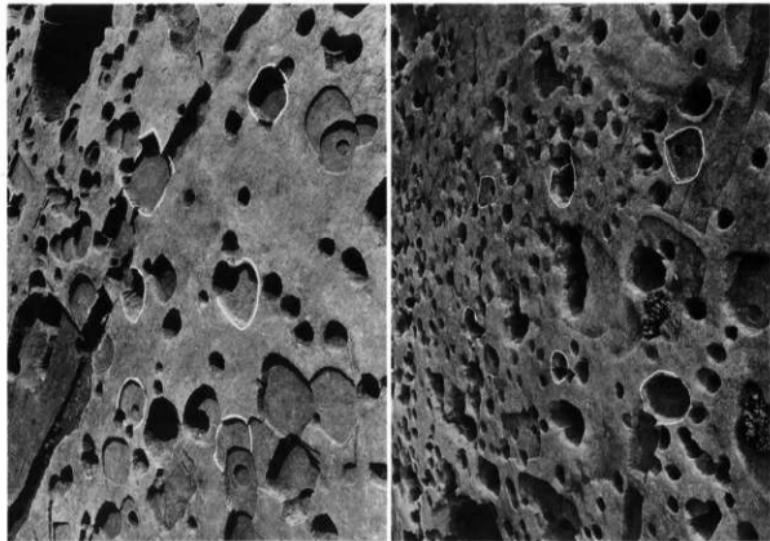
掘立柱建物 S B 10 (南から)



掘立柱建物 S B 11 (南から)

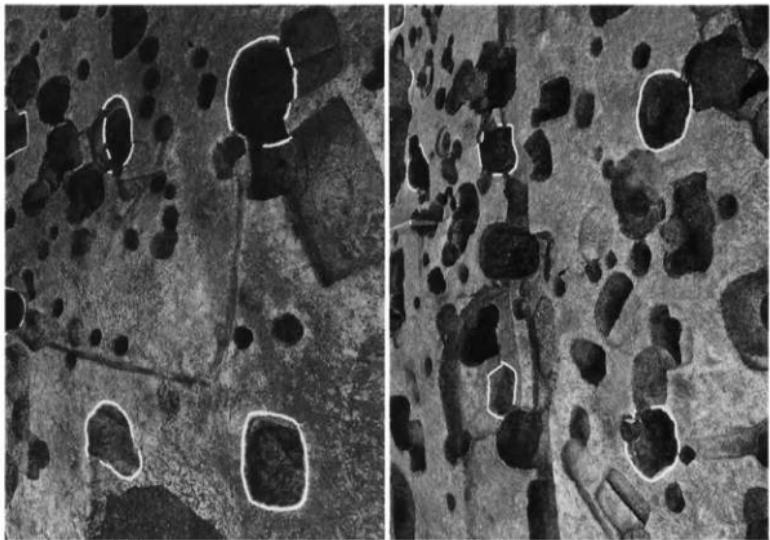


掘立柱建物 S B 12 (南から)



獨立柱植物 S.B.14 (北から)

獨立柱植物 (西から)



獨立柱植物 (南から)

獨立柱植物 (西から)

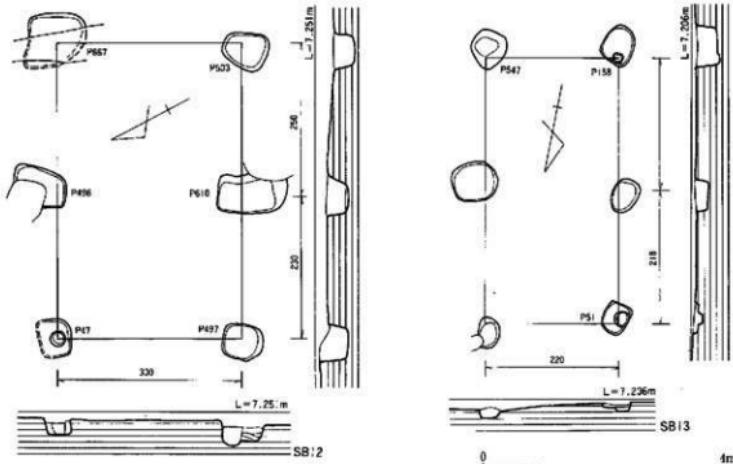


Fig.33 掘立柱建物SB12・13実測図(縮尺1/80)

り合い関係にある。全形は不明である。梁行1間、桁行2間以上の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN63°Wに置き、柱間は梁間9.9尺、桁間16尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長さ65~110cm、深さ12~46cmを測る。柱根径は23cmである。柱穴から弥生土器、土師器、黒曜石が出土している。
SB13(Fig33) 調査区北側で検出した。住居跡SC01と切り合っている。梁行2間、桁行1間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN8°Eに置き、柱間は梁間7.3尺、桁間7.3尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、径52~70cm、深さ10~72cmを測る。柱根径16~24cmである。柱穴から弥生土器片、土師器片が出土している。

SB14(Fig34) 調査区の東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しい。梁行1間、桁行2間の規模をもった掘立柱建物である。主軸方位をN15°Eに置き、柱間は梁間5.4尺、桁間5.4尺を測る。掘り方は不整円形を呈し、長径50~72cm、深さ16~61cmを測る。柱穴から土師器、須恵器が出土している。
SB15(Fig34) 調査区の東側で検出した。他の柱穴と切り合い関係が著しい。削平のため柱穴を欠いている。梁行2間、桁行2間の規模の掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN15°Eに置き、柱間は梁間5.1尺、桁間5.9尺を測る。掘り方は隅丸長方形または不整梢円形を呈し、長径41~43cm、深さ20~28cmを測る。遺物の出土はない。

SB16(Fig34) 調査区の中央で検出した。削平のため柱穴を欠いている。梁間2間、桁間3間の規模をもつ側柱だけの掘立柱建物である。主軸方位をN77°Eに置き、柱間は梁間平均6.3尺、桁間平均7.5尺を測る。掘り方は隅丸長方形を呈し、長径60~65cm、深さ17~34cmを測る。柱根径14~37cmを測る。遺物の出土はない。

SB17(Fig34) 調査区の西側で検出した。削平が著しく柱穴の遺存状態は悪い。梁行2間、桁行3間の規模の掘立柱建物である。主軸方位をN20°Eに置き、柱間は梁間平均6.6尺、桁間5.8尺を測る。掘り方は不整隅丸長方形を呈し、長さ65~80cm、深さ26~30cm、柱根径14~25cmを測る。柱穴から弥生土器、土師器、須恵器が出土している。

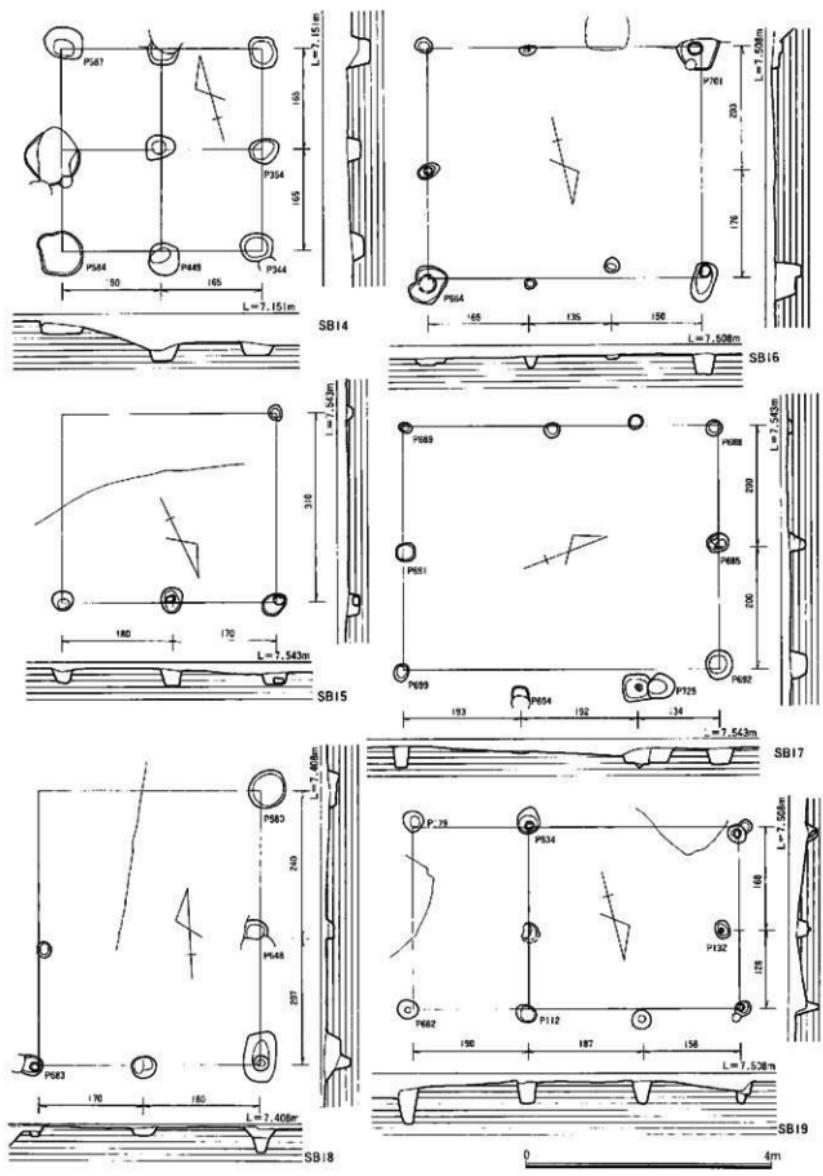


Fig.34 据立柱建物SB14~19実測図（縮尺1/80）

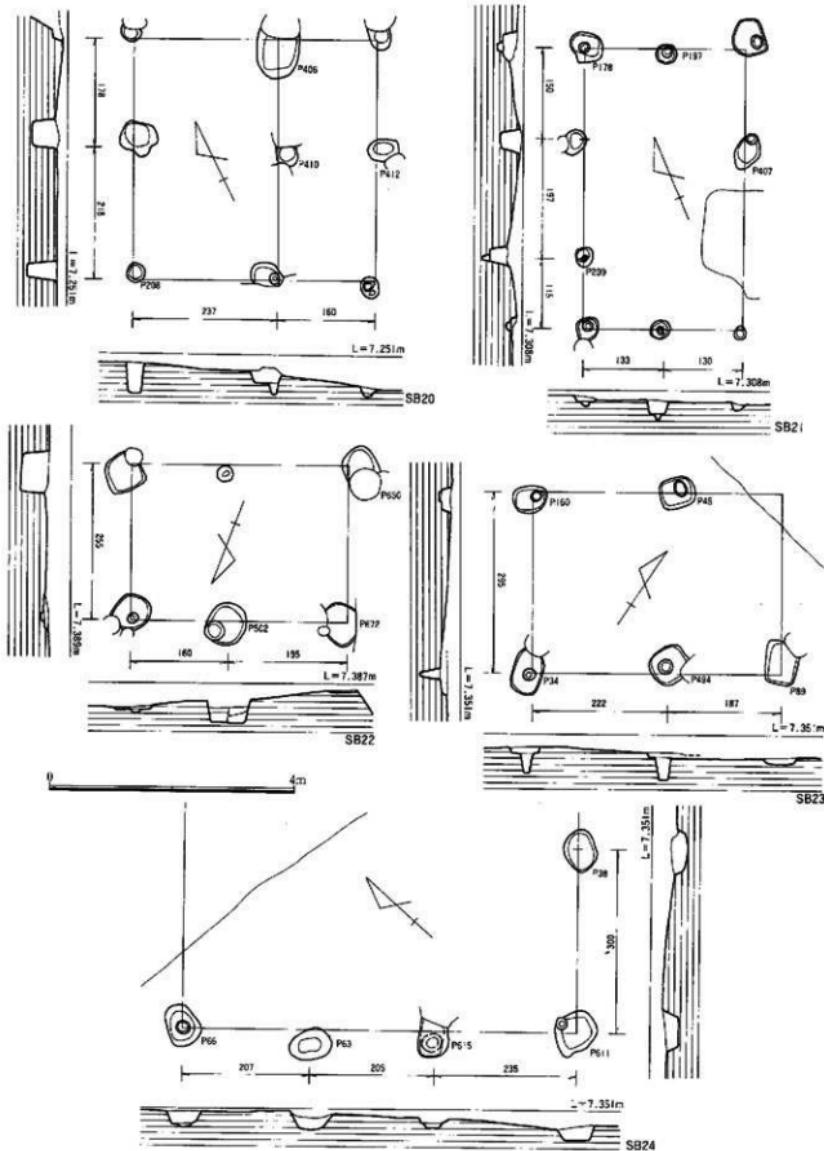


Fig.35 挖立柱建物SB20~24実測図 (縮尺1/80)

SB18(Fig34) 調査区の北隅で検出した。又、削平も著しいため全形は不明である。梁行2間、桁間2間の規模の掘立柱建物と考えられる。主軸方位をN3°Eに置き、柱間は梁間5.9尺、桁間7.4尺を測る。振り方は隅丸長方形を呈し、長さ65~80cm、深さ18~42cmを測る。柱根径14~25cmを測る。柱穴から陶器が出土している。

SB19(Fig34) 調査区の中央に在る。梁行2間、桁行2間の規模の掘立柱建物である。東側に1間の庇をもつ。主軸方位をN76°Wに置き、梁間平均4.9尺、桁間6.2尺を測る。振り方は不整隅丸長方形を呈し、長径31~36cm、深さ31~36cm、柱根径15cmを測る。柱穴から上師器が出土している。

SB20 (Fig35) 調査で東側が検出した。掘立柱建物SB06・14・21と切り合い関係にある。梁行1間、桁行2間以上の規模の掘立柱建物で、東側に1間幅の庇がつく。主軸方位はN66°Wに置き、梁間平均6.5尺、桁間平均6.5尺を測る。振り方は不整隅丸長方形を呈し、径53~60cm、深さ42~45cm、柱根径16cmを測る。柱穴から土師器、須恵器断片が出土した。

Tab.2 第74次調査掘立柱建物一覧表

番号	規模	幅行 (cm)		进行 (cm)		方位	床面積 (m ²)	柱・梁・板				出土品	備考
		幅行 (cm)	柱間 (cm)	进行 (cm)	柱間 (cm)			高さ	幅	厚さ	幅		
SB01	2×1	450 (10.7)	290 (7.4)	290 (8.9)	270 (8.9)	N3°E	12.32	6	18~26	38~73	45~57	15~30	陶土片、灰化土瓦等、土器底片、瓦片、鐵器、西汉石、屋
SB02	2×2	460 (10.3)	320 (7.4)	320 (11.6)	300 (8.3)	N76°W	16.41	7	8~54	20~40	38~49	22~28	陶土片、灰化土、須恵器
SB03	2×1	455 (10.0)	245 (7.1)	270 (6.9)	270 (8.9)	N37°E	12.28	4	10~22	37~67	45~55	20	陶土片、灰化土、瓦
SB04	1×1	320 (0.9)	220 (1.0)	220 (7.3)	220 (7.3)	N48°W	7.04	4	40~55	70~85	50~72	22	陶土片、灰化土瓦等、須恵器
SB05	2×1	515 (17.0)	290 (3.9)	300 (9.5)	150 (5.6)	N27°E	15.45	7	19~54	30~75	47~66	13~35	陶土片、灰化土、土器底片、西漢石
SB06	2×1	465 (12.2)	240 (7.4)	240 (8.0)	240 (8.0)	N37°W	17.69	6	21~56	30~76	40~65	20	陶土片、灰化土、瓦、須恵器、灰陶器、西漢石、鐵器
SB07	3×2	483 (10.9)	185 (6.0)	240 (11.6)	190 (6.3)	N47°E	18.35	11	8~50	44~77	50~68	16~25	陶化土瓦等、土師器等、鐵器、須恵器、青銅鏡
SB08	2×1	270 (2.2)	270 (12.3)	310 (8.2)	340 (8.2)	N42°E	11.47	5	8~60	60~70	50~68	—	陶化土瓦等、土師器、須恵器、鐵器
SB09	2×1	460 (10.6)	270 (7.3)	290 (6.6)	250 (6.6)	N37°E	13.34	5	43~64	90~180	70~90	16~35	陶化土瓦等、土師器等、須恵器、灰陶器
SB10	2×2	410 (12.0)	260 (6.7)	300 (12.0)	158 (4.4)	N37°E	13.31	6	31~45	65~77	60~68	21	陶化土瓦等、土師器、須恵器
SB11	2×1	490 (10.9)	225 (7.3)	225 (9.1)	—	N47°W	—	2	24~33	67~78	47~65	15	陶化土瓦等、土師器、須恵器、灰陶器
SB12	1×2	485 (10.9)	330 (7.6)	360 (9.9)	200 (9.9)	N47°W	14.35	8	15~46	65~110	60~65	23	陶化土瓦等、土師器、須恵器、灰陶器
SB13	7×1	430 (14.3)	215 (7.3)	220 (7.3)	220 (7.3)	N8°W	8.52	5	38~72	50~76	43~57	16~21	陶化土瓦等、土師器、須恵器、灰陶器
SB14	2×2	330 (10.9)	165 (5.4)	315 (10.9)	160 (5.4)	N15°E	10.4	8	19~61	50~72	45~75	—	土師器、須恵器
SB15	2×1	360 (11.7)	190 (5.9)	310 (10.9)	310 (10.9)	N15°E	10.5	4	38~78	43~57	33~35	—	なし
SB16	3×2	450 (14.5)	160 (5.4)	360 (12.0)	180 (5.9)	N77°W	17.2	8	17~34	60~65	35~53	14~25	なし
SB17	3×2	514 (17.0)	190 (5.4)	400 (12.3)	200 (5.5)	N27°E	21.5	10	36~40	45~48	41~45	11	陶土片、灰化土瓦等、須恵器
SB18	2×2	447 (14.5)	200 (7.0)	360 (11.9)	190 (5.5)	N7°E	16.0	7	18~42	45~80	32~54	14~26	須恵器
SB19	3×2	505 (17.7)	190 (5.5)	290 (9.0)	160 (5.5)	N76°E	16.1	9	31~56	29~43	23~37	15	陶化土瓦等
SB20	2×2	397 (13.3)	190 (5.5)	290 (12.1)	218 (7.2)	N60°W	15.7	9	42~45	53~60	47~70	10	土師器、須恵器
SB21	3×2	485 (15.2)	190 (5.5)	293 (8.7)	130 (4.3)	N23°E	12.2	9	28~38	39~60	35~45	15~34	陶土片、土師器、須恵器
SB22	2×1	320 (11.7)	160 (4.5)	250 (8.0)	250 (8.0)	N48°E	9.1	4	45~52	60~70	56~61	18~31	土師器
SB23	2×1	449 (14.5)	230 (4.5)	310 (8.2)	310 (8.2)	N47°W	20.9	4	19~34	68~70	55~66	70	陶土片、灰化土瓦等、須恵器
SB24	3×1	409 (13.9)	182 (6.5)	290 (9.7)	265 (9.7)	N46°E	12.1	5	21~43	55~62	47~55	17~24	陶土片、灰化土瓦等、須恵器

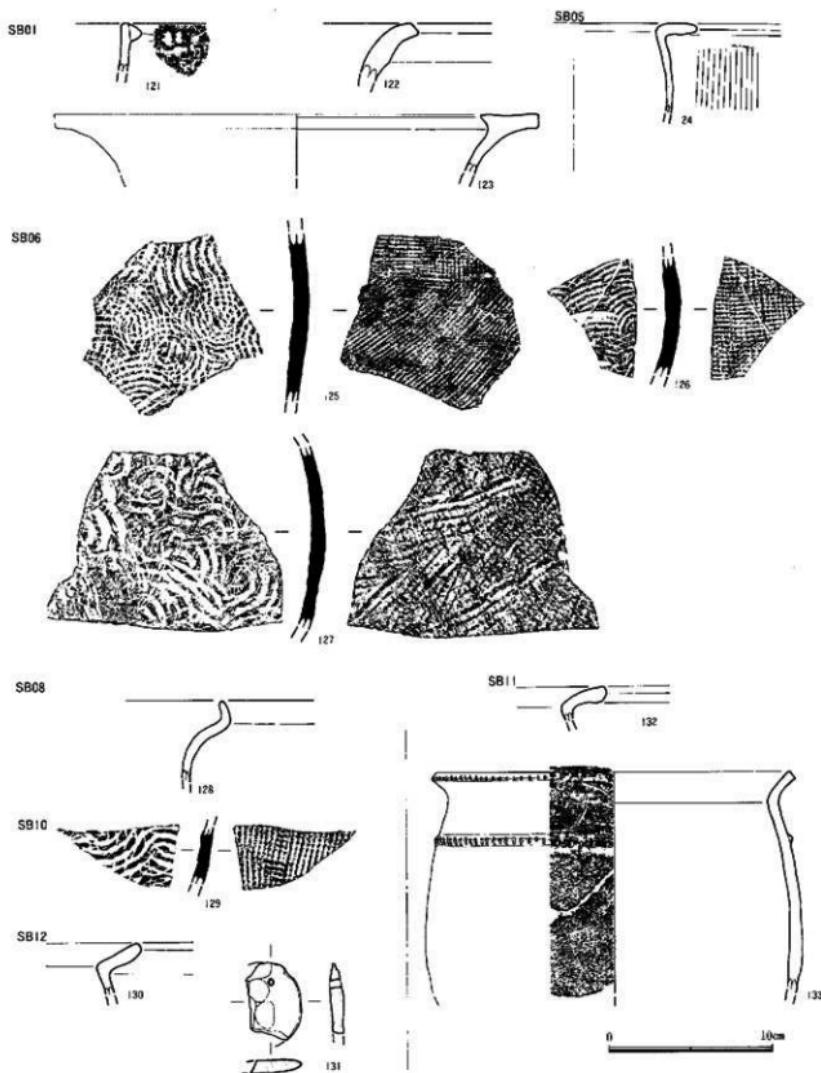


Fig. 36 插立柱建物SB01・03・05・06・08・10～12出土造物実測図 (縮尺1/3)

(9) 挖立柱建物出土遺物 (Fig. 36)

SB01出土遺物 (121) 121は縄文時代晩期の菱形土器で、SP674から出土している。

SB03出土遺物 (122・123) 122はSP646出土で、弥生時代前期の壺の口縁部片である。123はSP67出
土で、弥生時代中期の壺の口縁部分である。

SB05出土遺物 (124) 124はSP162出土。弥生時代中期の壺の口縁部片である。

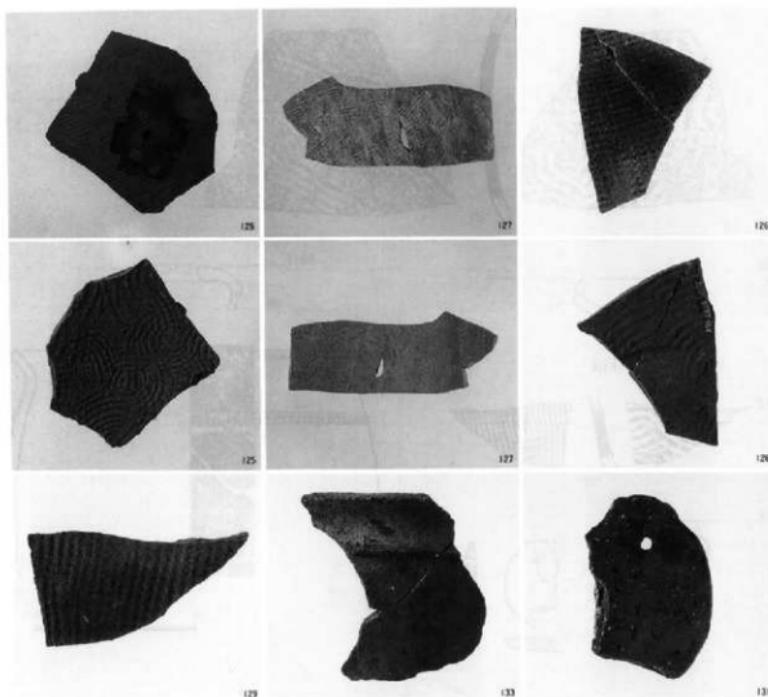
SB06出土遺物 (125～127) 125～127は須恵器の胸部片である。125・127はSP19出土、126はSP107
出土。外面は125が平行叩き、126・127が格子目叩きである。内面は125が同心円、126・127が青海波
の叩きである。

SB08出土遺物 (128) 128はSP457出土。弥生時代後期の袋状口縁部を有した壺である。

SB10出土遺物 (129) 129はSP489出土。須恵器壺片で、外面は格子目叩き、内面は青海波の叩きで
ある。

SB11出土遺物(132・133) 132はSP608出土。弥生時代後期の菱形土器の口縁部片である。133はSP676
出土。弥生時代前期の菱形土器で、口縁部と突帯に刻目を有している。

SB12出土遺物 (130・131) 130はSP496出土、131はSP47出土。130は弥生時代後期の土器片であ



掘立柱建物SB06・10～12出土遺物

※数字は実測図の番号に一致する

る。131は土製品で、扁平な楕円形を呈している。上部に穿孔があるところから、垂飾品と考えられる。

(10) 溝 (SD)

調査区の北東側において南北方向の溝を2条、南側において東西方向の溝3条、南北方向の溝1条を検出した。溝SD01は台地の縁辺を越す形で存在する。伝承に残る戦国時代の濠で「鬼丸ホゲ」と考えられ、現在も調査区境の水路として残っている。溝SD05~10は、排水の役目をもったものと考えられる。溝SD03は住居跡SC03の崩溝である。溝SD01・02は同一の溝と考えられる。

SD01 (Fig. 37) 調査区の東側境界に位置しており、全形は不明である。長さ約15mまでを確認するにとどまった。大略南方向から北方向に流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は逆梯形、又はV字形を呈し、溝上面の幅は100cm以上、底面の幅は不明、深さ90cm以上を測る。覆土は黒灰色粘質土、又は暗灰色粘土を主体としている。覆土から、中国白磁、染付等が出土しており、戦国時代の遺構と考えられる。

SD02 (Fig. 37) 調査区の東南側境界に位置しており、一部を確認するにとどまった。長さ約8mまでを確認するにとどまった。大略西方向から北方向に矩形に曲がりながら流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は一部逆梯形を呈するが、全体は不明。溝上面の幅は100cm以上、深さ90cm以上を測る。覆土は黒灰色粘質土、又は暗灰色粘土を主体としている。覆土から中国白磁等が出土して

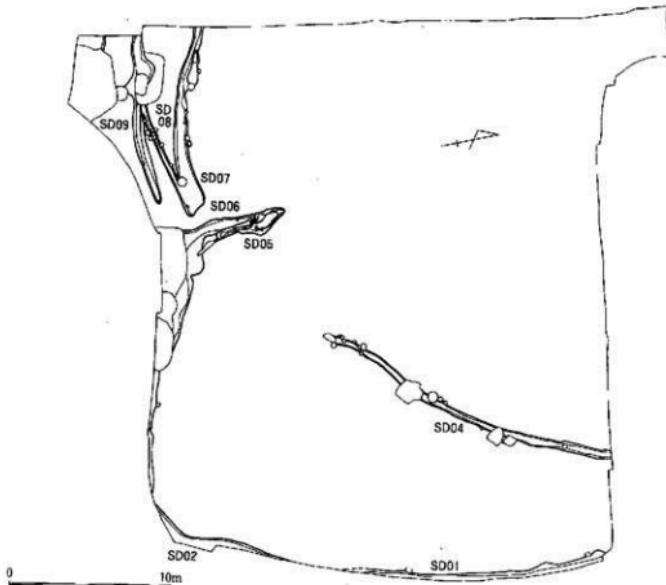


Fig. 37 第74次調査溝配置図 (縮尺1/300)

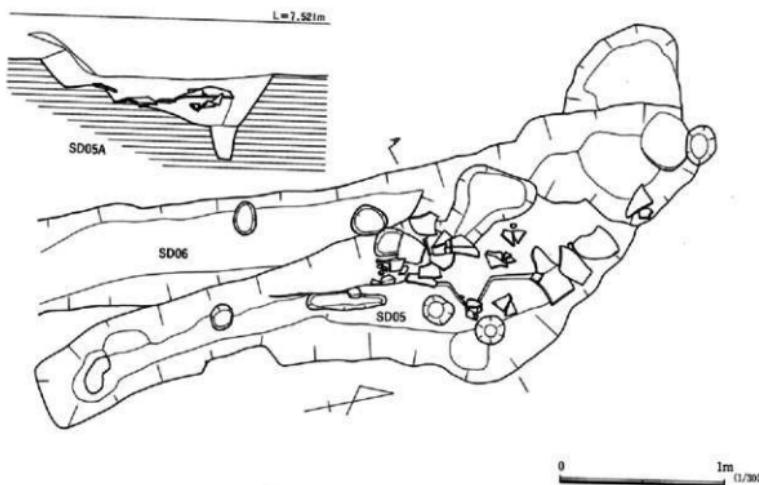
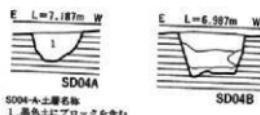
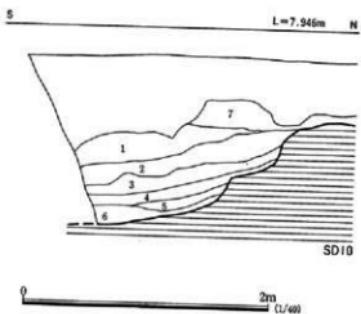


Fig. 38 清SD04・05・10実測図 (縮尺1/30・1/40)



清SD 06 (北から)



清SD 06 (北から)



清SD 06・06 遺物出土状況 (東から)



清SD 07・10 (東から)

おり、戦国時代の遺構と考えられる。溝SD01に接合するものと考えられる。

SD03 (Fig. 8) 調査区の北側に位置している。住居跡SC03の周溝である。詳細は住居跡の項を参照願いたい。

SD04 (Fig. 38) 調査区の東側に位置しており、削平が著しく、西側は消失している。長さ約19.5mまでを確認した。大略西方向から北方向の溝で、西寄り部分が一部途切れている。断面形は逆梯形を呈し、溝の上面の幅は50cm、深さは最大で20cmを測る。覆土は黒色粘質土に八女粘土を含んだ土を主体としている。覆土から弥生土器、土師器環、壺、甕、須恵器等が出土しており、古墳時代の遺構と考えられる。

SD05 (Fig. 38) 調査区の南側境界に位置しており、上部を溝SD06から切られている。削平を受けており、長さ約7.5mまでを確認した。大略、南方向から北方向の溝で、切れ切れになりながら南へ流下する。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は50~120cm、深さ10~50cmを測る。溝の北側は最大幅120cmを測り、水溜状の袋部を形成している。この部分の両側壁には、須恵器甕片を貼付した状況がみられた。又、底部には最大幅が約80cmの焼土面が広がっていた。

覆土は黒灰色粘質土を主体としている。覆土から土師器、須恵器甕、杯、鉄滓等が出土しており、古墳時代末の遺構と考えられる。

SD06 (Fig. 38) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD05を切っている。北側は現代の建物の基礎で削平されており、長さ約7.4mまでを確認した。大略、北方向から南方向に流下する溝で、排水溝の役目を持っている。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は70cm、深さ20cmを測る。覆土は灰褐色粘質土を主体としている。覆土から土師器片、須恵器甕片等が出土しており、古墳時代以降の遺構と考えられる。

SD07 (Fig. 37) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD08を切っている。長さ約12mまでを確認した。大略、西方向から東方向に流下する溝で、東側は幅広くなって、自然に消失する。排水溝の役目を持っているのであろう。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は西側で53cm、東側の幅は170cm、深さ17~20cmを測る。覆土は暗茶灰色土を主体としている。覆土から土師器、陶器片、染付、瓦類等が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。

SD08 (Fig. 37) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD07、09、SK10に切られているため、長さ約5mまでを確認した。大略、東方向から西方向に流下する溝で、東側は削平のため消失する。排水溝の役目を持っていると考えられる。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は30cm、深さ17~23cmを測る。覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。覆土からの遺物の出土はない。江戸時代の遺構と考えられる。

SD09 (Fig. 37) 調査区の南側境界に位置しており、溝SD08を切り、土壙SK10に切られる。長さ約11.5mまでを確認した。大略、西方向から東方向に流下する溝で、東側先端を削平により消失する。排水溝の役目を持っているものと考えられる。断面形は逆梯形を呈し、溝上面の幅は60~70cm、深さ5~30cmを測る。覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。

覆土から土師器、瓦質土器、甕、陶器片、七輪片、瓦類等が出土しており、江戸時代の遺構と考えられる。

SD10 (Fig. 38) 調査区の南側境界に位置しており、全体形は不明だが、調査区の東側で検出した溝SD01、02が矩形に連続するもので、同一溝と考えられる。井戸SE04（土壙SK13）と切り合い関係にある。長さ2.5mまでを確認した。大略、東西方向の溝である。断面形は逆梯形と考えられる。溝上面の幅は最大90cm、深さ30cm以上を測る。

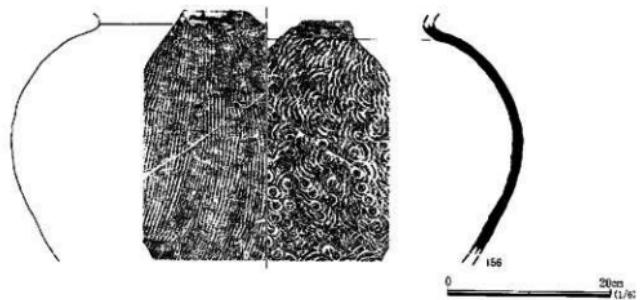
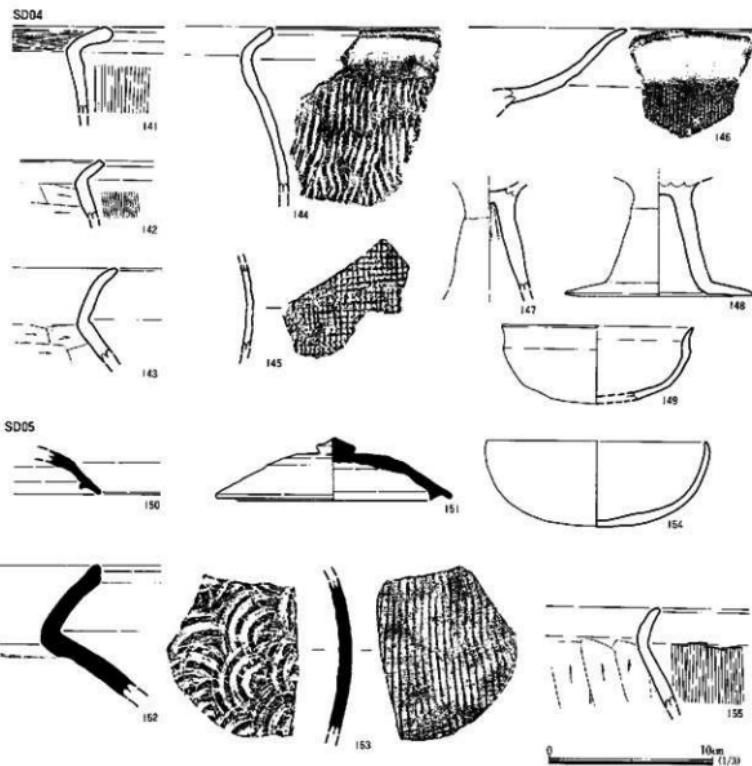


Fig. 39 滇SD04·05出土遗物实测图 (缩尺1/3·1/6)

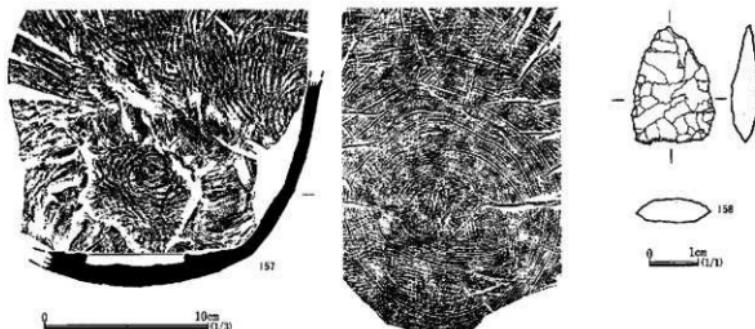


Fig. 40 清SD05出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/1)

覆土は暗い茶灰色粘質土を主体としている。覆土から須恵器、土師器、瓦質土器、伊万里染付、国産陶器、鉄滓、瓦類等が出土している。江戸時代の造構と考えられる。井戸SE04を切っているものと考えられる。

(11) 溝出土遺物 (Fig. 39~43)

SD04出土遺物 (141~149) 141は弥生時代後期の甕の口縁部、142~149は土師器で、142~145は甕である。142・143の胴部内面はヘラケズリ調整、144の外面は平行叩き調整、145は須恵器の調整と同じ格子目叩きである。146~148は高坏で、146は坏部、147・148は脚部片である。149は丸底の坏である。141を除き、いずれも6世紀代の所産である。

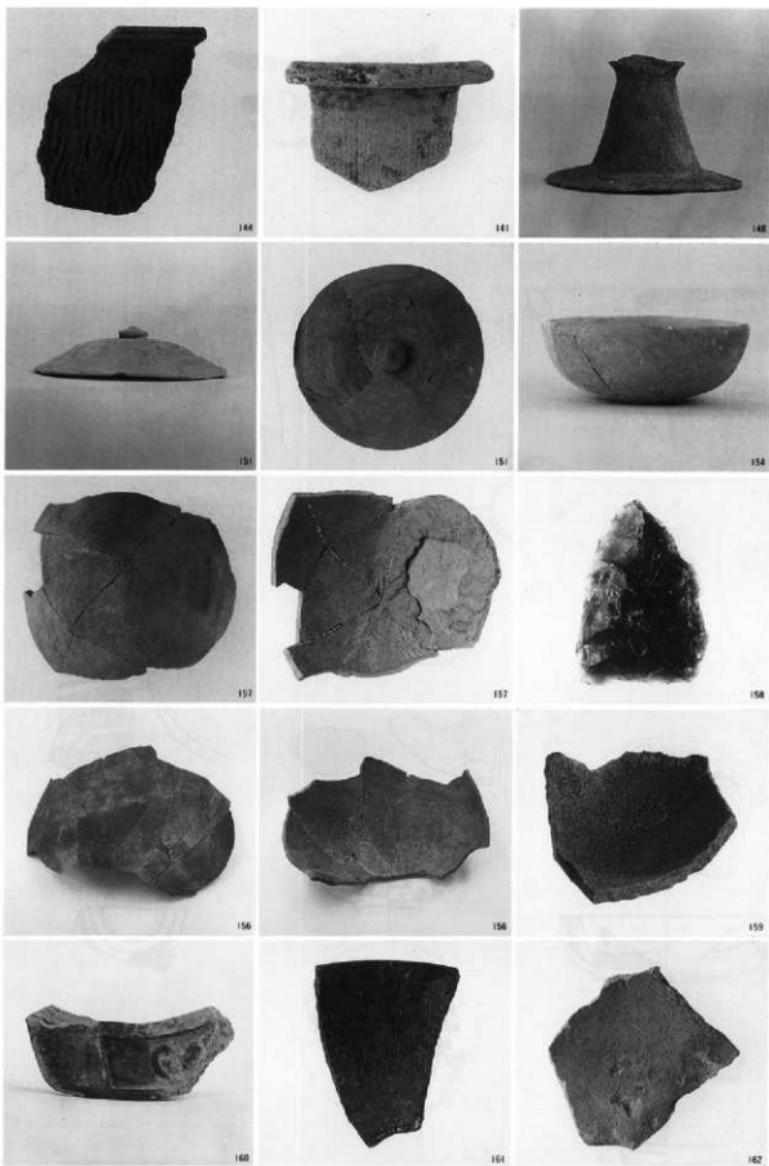
SD05出土遺物 (150~158) 150~153・156・157は須恵器である。150・151は坏蓋で、151は擬宝珠形のつまみを有する。152・153・156は甕で、外面はいずれも平行叩き、内面は152・153は青海波の叩き、156は同心円の叩きである。157は横瓶の破片で、胴部外面は細かい平行叩き、底部はカキ目を施す。内面は青海波の叩きである。158は黒曜石製の石鎚未製品である。

SD07出土遺物 (159~160) 159は初期唐津焼の碗で、内底見込と疊付に目痕がある。160は軒半瓦片である。瓦当文様の唐草文は退化している。

SD09出土遺物 (161~162) 161は唐津系の摺鉢である。162は瓦質土器の甕片である。

SD10出土遺物 (163~189) 163は弥生土器の器台、164・165は須恵器高台付の坏である。167は須恵器甕で、外面に格子目叩き、内面は同心円の叩きである。166は土師器の甕の把手、168は瓦質土器の湯釜である。168の外面上部には印花文がある。169~173は伊万里焼の染付で、169は皿、170~172は碗、173は花瓶である。174~180は国産陶器で、174・175は高取系の碗、176は皿、177~179は摺鉢、180は甕である。181~183は瓦質土器で、181は足錐、182は花瓶、183は鍋である。182の外面は丁寧に研磨し、上から順に四ツ菱文、菊花文、梅花文を3段に押印する。184~185は平瓦で、185の内外面は粗目のハケ調整を行う。186は丸瓦で、内面に布目が残る。187・188は砂岩製、189は滑石製の砥石である。

SD12出土遺物 (190~193) 190は弥生土器の甕底部片、191は土師器の高台付碗の完形品、192は瓦質土器の足錐、193は土師器の高坏の脚部片である。



清SD04~07・09出土遺物

■数字は実測図の番号に一致する

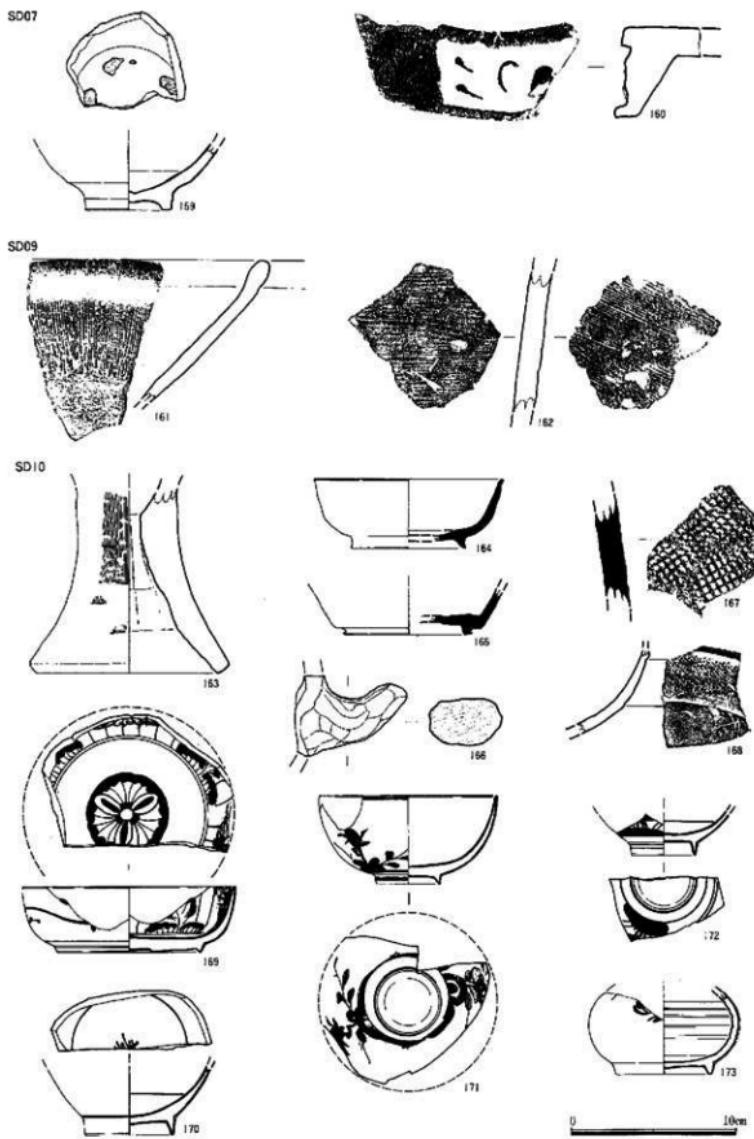


Fig.41 清SD07・09・10出土遺物実測図 (縮尺1/3)

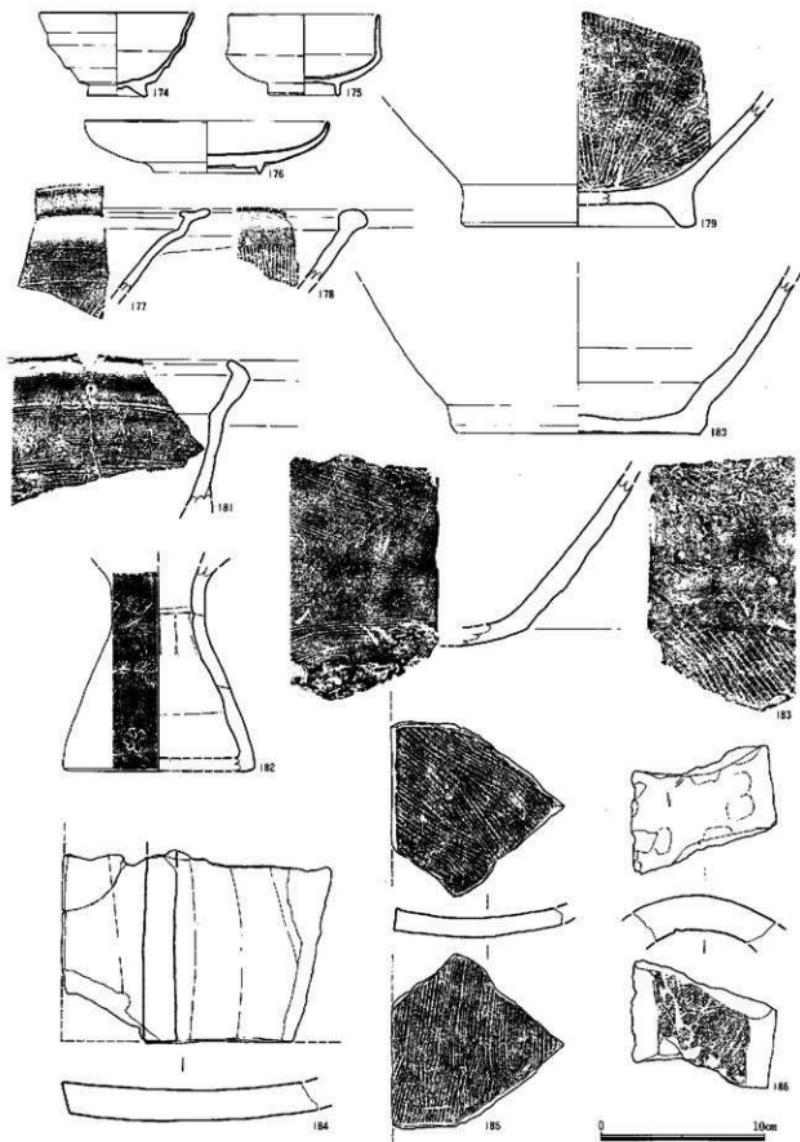
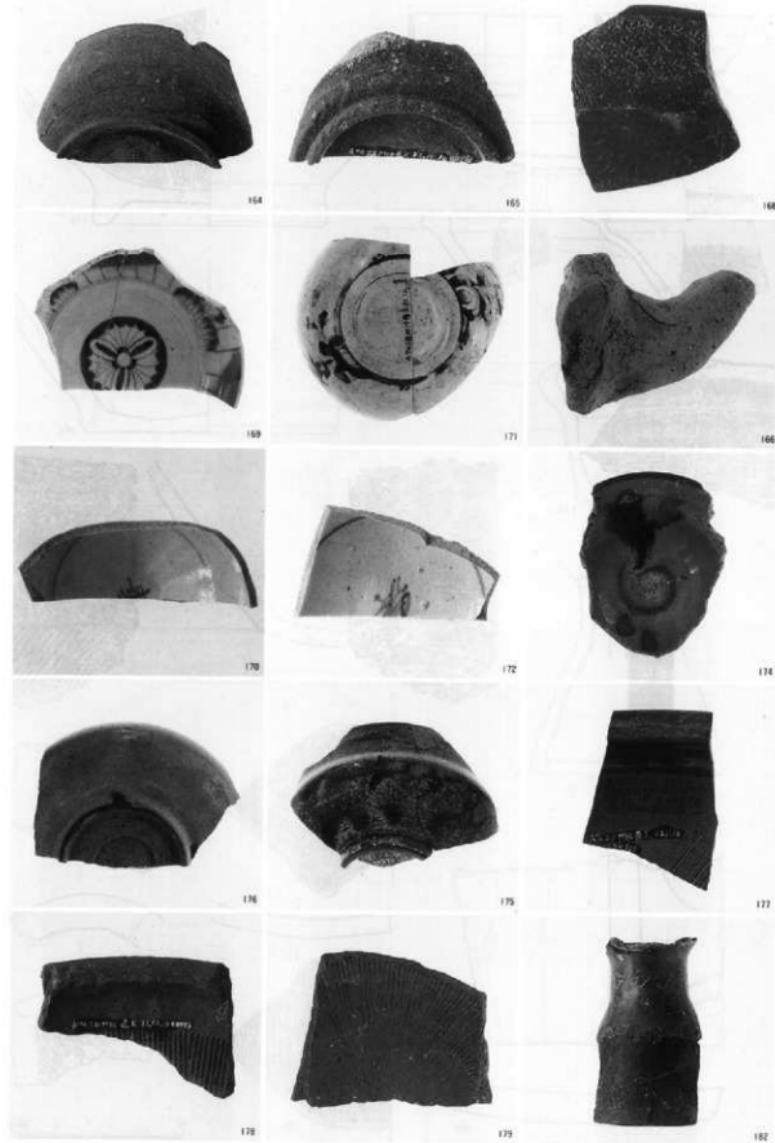
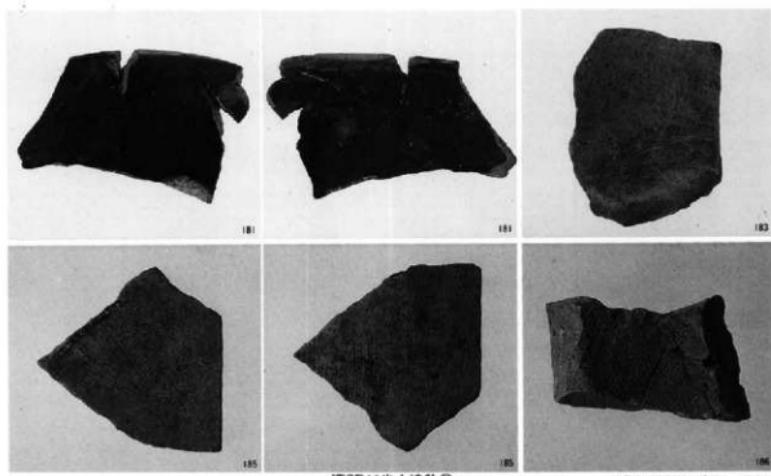


Fig. 42 漢SD10出土遺物実測図 (縮尺1/3)



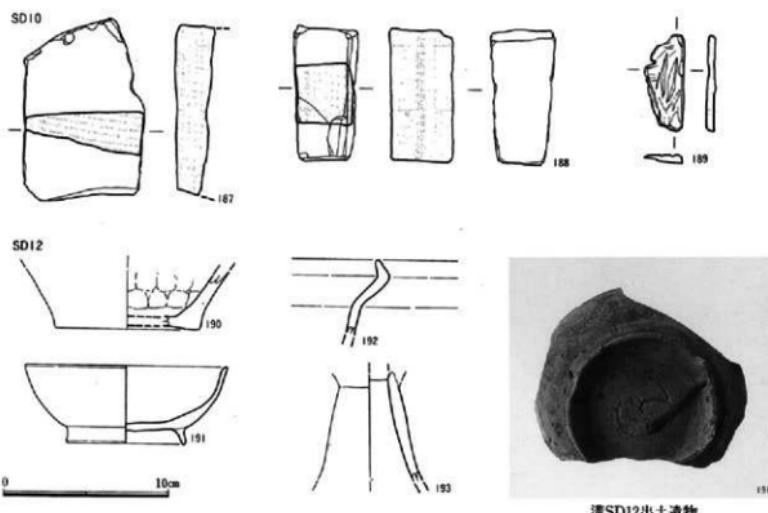
清SD10出土遺物①

*数字は実測図の番号に一致する



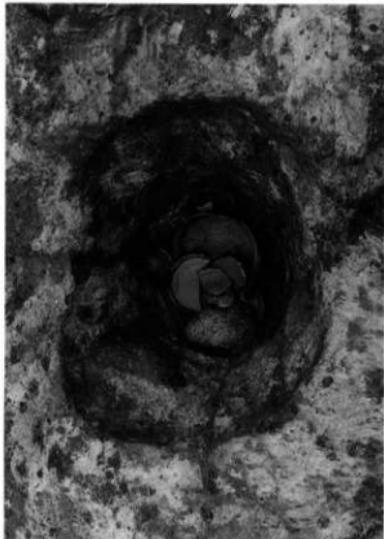
溝SD10出土遺物②

*数字は実測図の番号に一致する

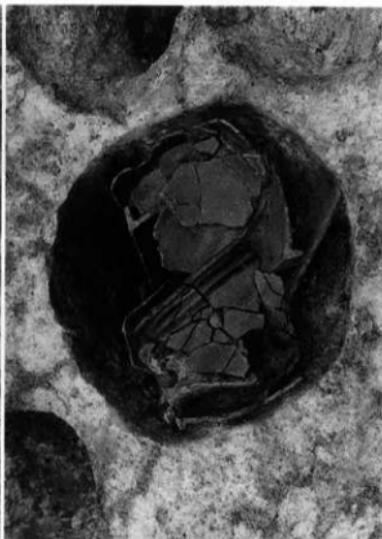


溝SD12出土遺物

Fig.43 溝SD10・12出土遺物実測図（縮尺1/3）



S.P.四輪車胎 (丸み)



S.P.四輪車胎 (丸み)



S.P.四輪車胎 (丸み)



S.P.四輪車胎 (丸み)

(12) 小穴 (SP)

径15~17cmを測るPitを多數検出した。いずれも柱穴と考えられるが、建物として把握することができたのは14棟にとどまった。SP232・SP637からは鎮めとしての追物が出土している。今回検出したPitの作られた時期は、弥生時代から江戸時代までの幅をもっている。

SP232 (P80) 調査区の南側に所在する。柱穴と考えられ、平面形は隅丸長方形を呈する。長さ45cm、幅33cm、深さ35cmを測る。穴底に土師器皿1枚、环2枚が地鎮として入れられていた。土師器は糸切り底であり、形状より14世紀頃の所産と考えられる。

SP637 (P80) 調査区の南側に所在する。地鎮のためのPitと考えられる。上面は削平を受けている。平面形は不整円形を呈し、最大径45cm、深さ36cmを測る。Pit内は弥生時代の甕の破片を、面を外にして包み込むように置き、その内側には、器台を入れていた。弥生時代中期後半の土器である。

(13) 小穴 (SP) 出土遺物 (Fig.44・45)

各SP出土遺物 (201~241) 201・208~210は縄文時代晩期の甕片で、201は突帯文土器の口縁部、208~210は底部である。201はSP403、208はSP415、209はSP557、210はSP66出土。202~204は弥生時代中期の甕の口縁部で、202がSP539、203がSP96、204がSP571出土。205~207は甕の口縁部で、205はSP456、206はSP45、207はSP668出土。211~216は弥生時代の甕の底部で、211はSP373、212はSP167、213はSP538、214はSP96、215はSP97、216はSP181出土である。

SP637出土遺物 (217~222) 217~222はSP637から一括して出土した。弥生時代中期後半の土器群で、217~219は甕、221・222は器台、220は蓋である。

223~226は須恵器で、223はSP482、224はSP588、225~226はSP462出土。223は高環で、高台の脚幅は大きく開く。224は泡又は小型平瓶の胴部、225・226は甕片である。

SP232出土遺物 (227~229) 227~229はSP232から出土。地鎮具である。いずれも糸切り底で、227は皿、228・229は环である。小型化しており、环は口径と底径の比が大きくなりつつある。230は土師器皿で、SP173出土。231・232は土師器の鉢で、いずれも丸底である。231はSP618出土で、238の砥石が伴う。232はSP540出土。233は白磁碗で、SP152出土。234は瓦質土器の擂鉢で、内面に下し目がある。235は越州窯系青磁碗で、SP719出土。236は滑石製石錠で、口縁外側の突帯は小さく低い。外面のケズリ痕は幅が狭い。240は玄武岩製の磨製石斧片で、SP513出土。239は敲石で、角が磨滅し、丸みをもつ。SP615出土。241はサヌカイト製の石鐵で、先端を欠く。SP567出土。237は鉄釘片で、SP538出土である。

(14) 包含層出土遺物 (Fig.46)

(251~257) 遺構面上に堆積していた第2層の暗い茶褐色粘質土から出土した遺物で、2次堆積の遺物である。251は須恵器の环、252は越州窯系青磁碗、253は土師器の高环、254・255は土師器の瓶の把手部分である。256は国産陶器の擂鉢、257は砥石である。

(15) 遺構面出土遺物 (Fig.46)

(258~262) 258は備前焼IV類の擂鉢である。259・260は弥生土器で、259は後期の甕形土器、260は壺である。261は形状不明の滑石未製品で、粗い研磨痕がある。262は滑石製の白玉である。半分欠損している。

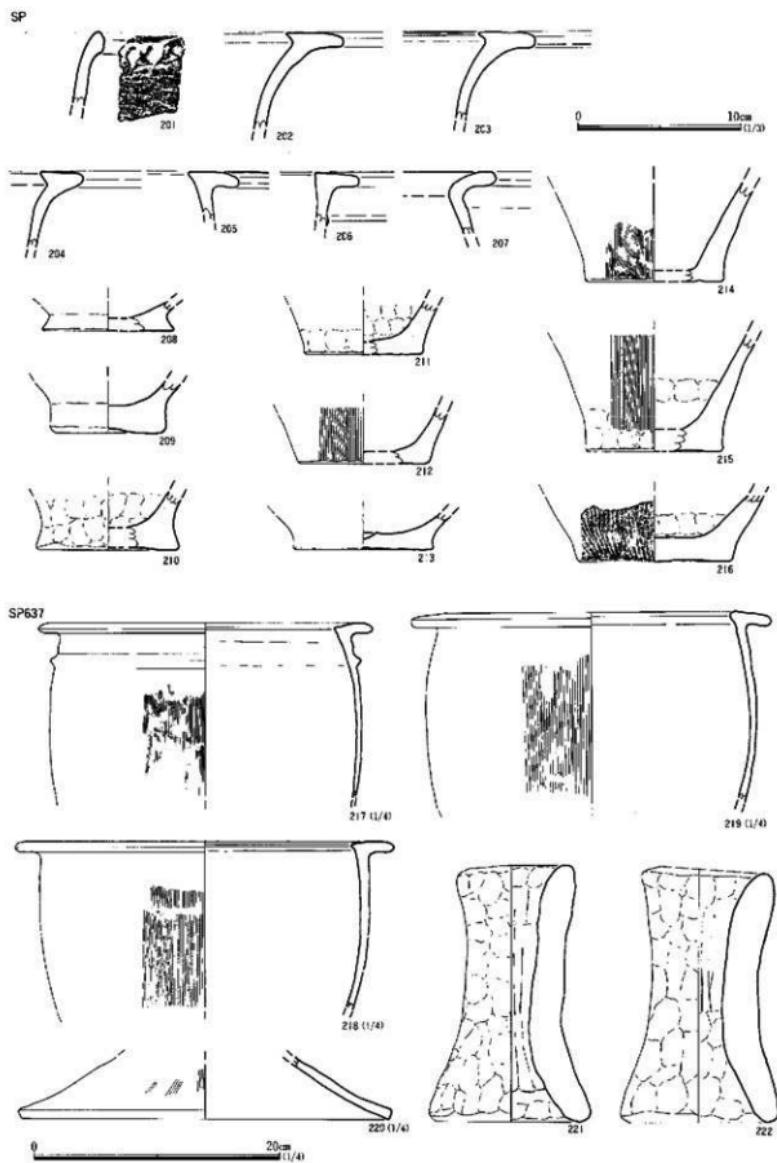


Fig.44 SP出土遺物実測図① (縮尺1/3・1/4)

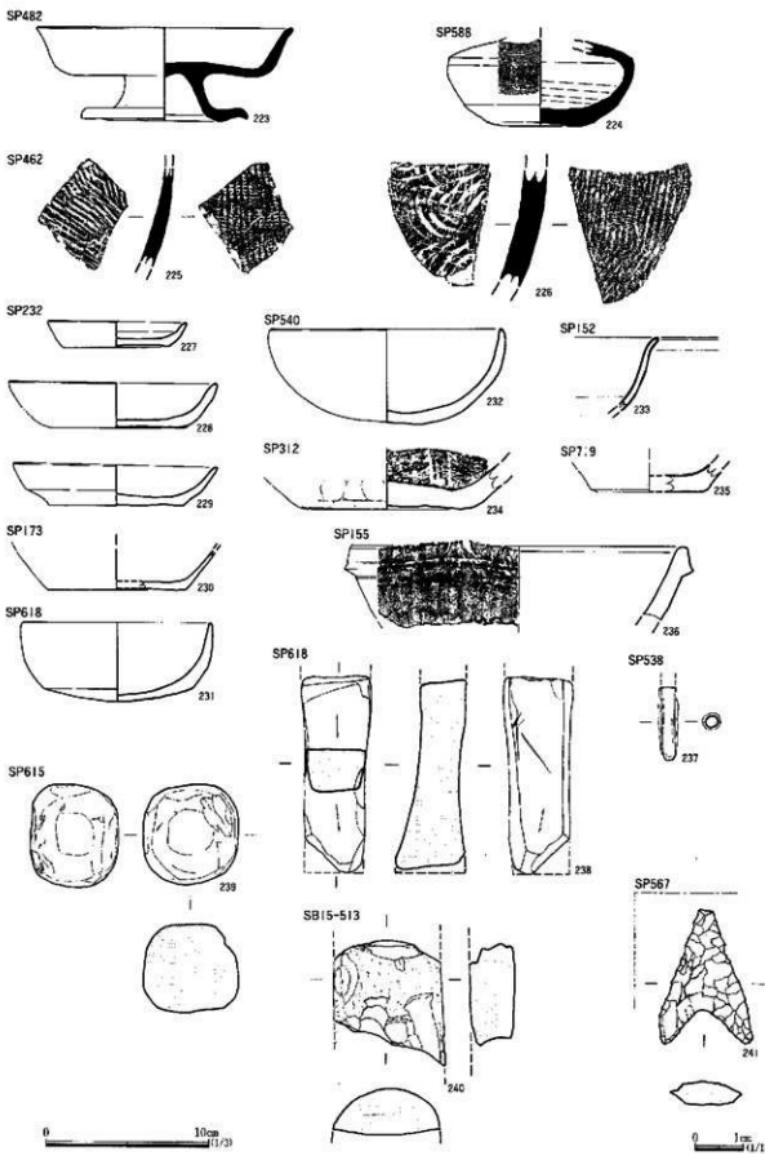
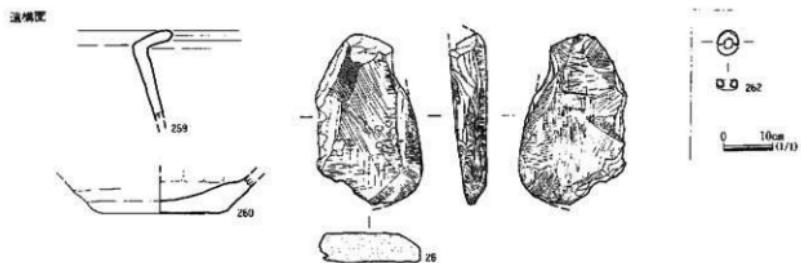
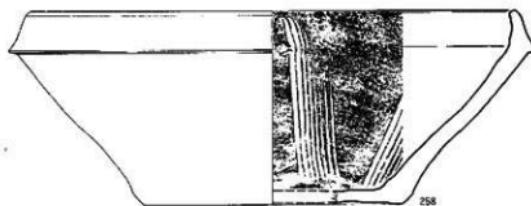
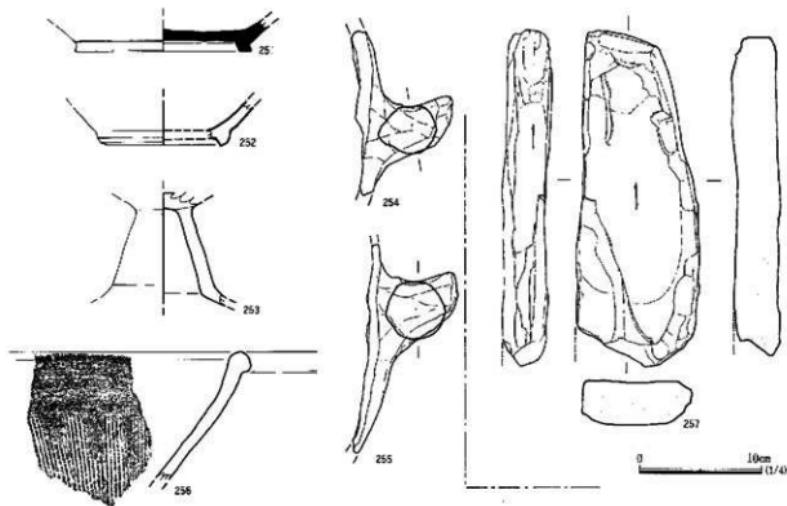
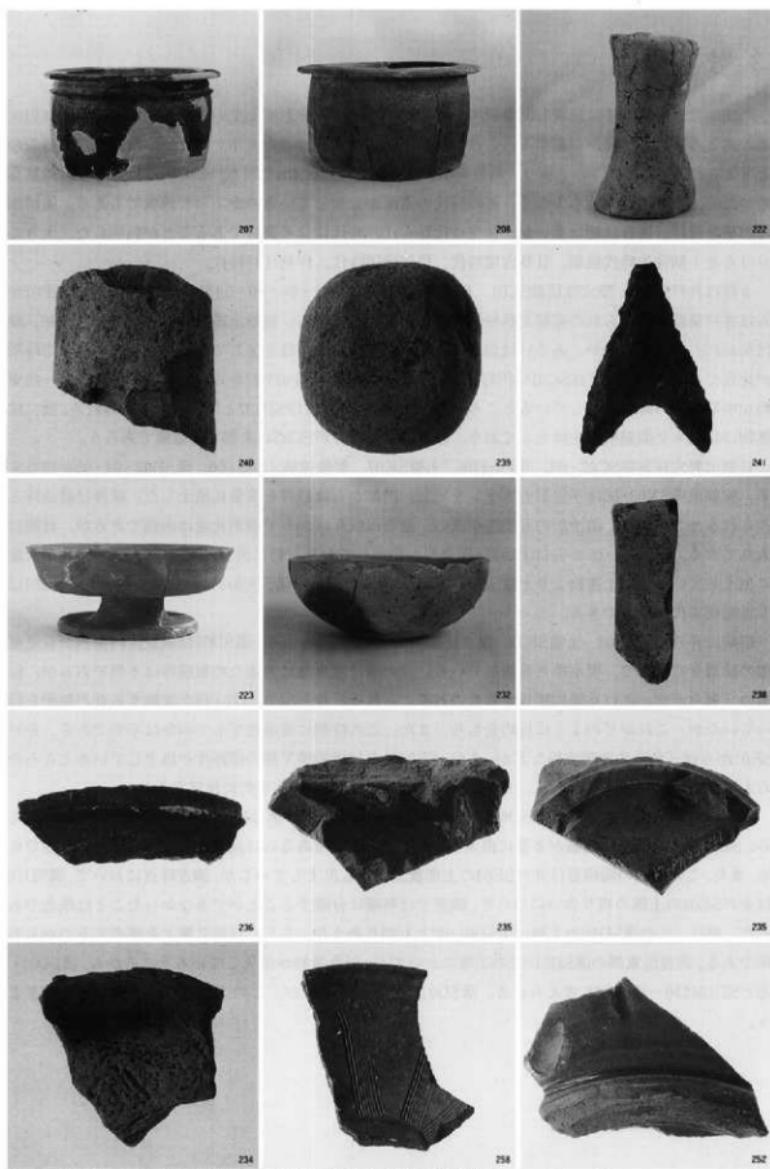


Fig.45 SP出土遺物実測図② (縮尺1/1・1/3)



0 10cm (1/3)

Fig. 46 包含層・造構面出土遺物実測図 (縮尺1/1・1/3)



SP・包含層・遺構面出土遺物

*数字は実測図の番号に一致する

3.まとめ

当該地は金屑川左岸に位置し、金屑川の開析により、段丘を形成している。当該地の東側には旧河道の跡とみられる水路が存在する。この水路は地元の伝承では「鬼丸ホゲ」という濠に相当するものと考えられる。標高約7mを測り、周辺の水田との比高差は0.4mを測る。この周辺は古くからの集落地のため、従来の調査例も少なく、どの時代の遺構が分布しているのか不明な地域でもある。遺構面は削平を受け、遺存状態は悪いが、弥生時代から江戸時代に亘る遺跡であることが判明した。大きく分けるとⅠ期弥生時代後期、Ⅱ期古墳時代、Ⅲ期墾田時代、Ⅳ期江戸時代。

Ⅰ期は井戸SE02、竪穴住居跡SC01、掘立柱建物SB01・03・04・06・09等が相当する。井戸SE01からは井戸祭祀に用いられた壺形土器や夔形土器が出土している。壺形土器は袋状口縁部をもつが、縁は失われ、丸みをもつか、あるいは袋部の退化がみられる。平底を呈しており、弥生後期後半の時期が比定できる。竪穴住居跡SC01は円形を呈している。祭祀土壙SP637から出土した弥生土器の一括資料が中期後半の時期を示しているところから、この住居跡はほぼSP637と同時期と考えられる。掘立柱建物は17間×2間規模を主体としており、住居跡または井戸SC02に共存する遺構であろう。

Ⅱ期は竪穴住居跡SC02・03、井戸SE08、土壙SK07、製鉄遺構SX03・06、溝SD03・04・05が相当する。製鉄遺構SX03・06は不定形のプランを呈し、内部からは鉄滓を多量に出土した。鉄滓は鍛冶津とみられるところから、鍛冶炉の可能性が高い。遺物は破片ばかりで時期比定は困難であるが、Ⅱ期に入れておく。溝SD04・05からは土師器・須恵器が出土しており、特に溝SD05からは大型の甕片が大量に出土している。出土遺物より土壙SK07・溝SD04は6世紀代、溝SD05は7世紀後半代、井戸SE08は5世紀前半代に比定できる。

Ⅲ期は井戸SE01～04、土壙SK12、掘立柱建物SB07等が相当する。溝SD01は調査区の南西から北東側の縁辺を巡る溝で、現水路と重複している。この溝は境界地にあるため規模等は不明であるが、伝承の「鬼丸ホゲ」という濠に相当するものと考えられる。井戸SE01は杵臼を埋納する井戸祭祀を行っていたが、これがどのように目的をもち、また、この時期に普遍性をもつのかは不明である。井戸SE01からは三島手の李朝陶器などが、また、SE04からは備前焼V期の擂鉢片が出土しているところから大略16世紀代の遺構といえる。土壙SD12は足鉗等から16世紀前半代に比定できる。

Ⅳ期は江戸時代であるが、溝SD06～10が相当する。これらの溝は排水済的な役割をもつものである。SD10からは国産陶磁器が多量に出土している。伊万里焼あるいは高取焼から18世紀代が比定できる。また、この時期の陶磁器は井戸SE04の上部覆土からも出土しているが、調査時点において、溝SD10は井戸SE04の上部の切り合について、調査では明確に分離することができなかったことは残念であった。更に、この溝SD10の上層は溝SD01・02とも切り合うか、もしくは同じ覆土を構成するかも不明である。調査区東側の溝SD01・02の上層においても、近世遺物が混入しているところから、溝SD01・02とSD10は同一遺構とも考えられる。溝SD01・02の埋設時期が、この頃にあったことが推測できよう。

Tab. 3 第74次調查遺摺一覽表

(四六二四)

Tab. 4 第74次調査遺物一覧表

(単位: cm)

件名・遺物 番号・年号	出土場所	種類	基準	目録	底板 (高さ)	高さ (保存高)	形態の特徴・調査・文様	地盤・色調・宏細等	備考
15 1 S801 陶生土器 盆 — — (4.9) 底面は深い上げ縁で、凸凹状を呈する。内面はナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。灰茶褐色。	つまみ足置 5.9cm	
15 2 S801 陶質土器 盆 — — (5.5) 外曲は調理火の印きで、2枚の沈縁を施す。内面はナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を少しきむ。焼成良好。青灰色。		
15 3 S801 陶器 瓢 — — (2.9) 内外面に白取抜を施す。							粘土は焼成。焼成良好。	中割正丸子	
15 4 S801 陶質土器 拠体 — — (4.2) 皿縁部内面を肥厚させる。内面はナガメ方向のハケ。外曲は浅いナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。		
16 13 S802 中位 陶生土器 盆 21.0 8.7 26.8 口縁はくの字形に強く外反し、外曲はき木卓位のタテハケ調整。内面カク方向のナガ調整。							粘土に1~2mmの白い砂を含む。焼成良好。你諾外縁に削痕有。	完形品	
16 14 S802 下位 陶生土器 盆 14.5 8.1 26.0 壁がくつき。底底口縁部を有す。体部外表面はタテハケ調整。口縁部はヨコナガ調整。底部はタテナガ調整。							粘土に1~2mmの白い砂を含み、焼成良好。灰茶褐色。底部に黒斑。	完形品	
16 15 S802 底部 陶生土器 盆 11.0 7.4 21.1 装底口縁部。皿縁部外表面はヨコナガ調整。体部外表面はタテナガ調整。							粘土に1~2mmの白い砂を含む。焼成良好。灰茶褐色。底部に黒斑。	完形品	
16 16 S802 舟戸底 陶生土器 盆 10.7 7.2 21.4~25.5 通じる字形の盛底口縁部を有す。体部外表面はタテハケ調整。体部下位はタテハケ調整。体部下位と底部はタテナガ調整。							粘土に白く細かい砂を含む。焼成良好。中や赤みを帯びた灰。	完形品	
16 17 S802 陶生土器 盆 13.2 — 16.0 装底口縁部だが、上位は直口縁時。底部は三角突唇。外曲はタテハケ調整。皿縁部外表面はヨコナガ調整。							粘土に1~2mmの白い砂を多く含む。焼成良好。明茶褐色。		
16 18 S802 陶生土器 盆 — 7.0 9.0 体部上位を全く、上位部に近い。底底は丸く、上げ縁である。外曲はタテナガ調整がある。							粘土は焼成。焼成良好。外曲は底底堅化。内面は底底。		
16 19 S802 陶生土器 盆 — 7.4 9.7 平底で、内外面はナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。灰茶褐色。		
17 20 S802 陶生土器 瓶 13.5 7.5 26.4~26.8 体部は直筒形で、底底である。口縁部は、底底部を茎とし、腰部は丸くもつ。体部外表面は軽いタテナガ調整。口縁部内面部はヨコナガ調整。							粘土は焼成。焼成良好。体部下位に出現。	完形品	
17 21 S802 底部 陶生土器 盆 9.6~10.5 7.8 21.8~22.0 は底部は底に乳頭の發達を呈する。体部外表面はタテハケ調整で、口縁部外表面・体部内表面は軽いナガ調整。							粘土に2~3mmの白い砂を含む。焼成良好。茶灰色。		
17 22 S802 底部 陶生土器 盆 15.0 8.6 28.3~29.1 口縁部は直口ぞうるが、底部が底底に内寄りする。底部に三脚突唇。外曲はタテハケ調整。底部に焼成後の穿孔1ヶ所有。							粘土は焼成。焼成良好。体部下位に出現。	完形品	
17 23 S802 陶生土器 瓶 — 8.8 (8.0) 平底で、体部の立ち上がりが丸くもつ。外曲はタテハケ調整。							粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成不良。灰茶褐色。		
17 24 S802 陶生土器 西古 — — (8.7) 前縁部。外曲はヘラミガキ。内面にはしばり底が残る。							粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成不良。灰茶褐色。		
17 25 S802 陶生土器 西古 — — (6.9) 脊縁部を若干肥厚させた。内面はタテハケ調整。内面はナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。灰茶褐色。		
17 26 S802 手捏土器 小型瓶 5.2 2.4 (4.1) 平底で、口縁部は小さく外反する。内外面はナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。灰茶褐色。		
17 27 S802 陶生土器 瓶子 — — — 本約の半分。断面形は不規則形で、外縁にナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成不良。灰茶褐色。	径手 径3.2cm, 径1.8cm	
29 39 S804 陶質土器 盆 13.5 13.5 13.5 下底で、外曲はタテハケ調整。内面はナガ調整。							粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成良好。灰茶褐色。		
29 40 S804 小型 陶質土器 盆 17.2 (2.2) 高台は外へ広く張る。内外面は焼成している。							粘土に1~2mmの砂を含む。焼成不良。外曲は灰茶褐色。内面は黑褐色。		

種群 番号	地名 番号	先土遺構	種類	器種	口性	直径 (公合径)	高さ (現存高)	形態の特徴・洞穿・文様	施作・名調・測定等	備考
29 11	SE04	白磁	小壺	一	—	(2.3)	(2.7)	高台は高く、内部の削りは深い。高台表面まで施釉。	裏地は淡灰褐色で稍暗。焼成良好。透明感。淡灰色。	伊万里
29 42	SE04 中壇	須恵器	平	一	—	(6.0)	(1.9)	高台は高く、直立状。体部と高台内外面はヨコナテ調整。	粘土に1mm前後の砂を少しきむ。焼成良好。青灰釉。	
29 43	SE04 中壇	須恵器	瓦蓋	一	—	—	(1.4)	口縁部内側のかえりには直立し、口縁部端より下に出る。内外面はヨコナテ調整。	粘土に1~2mmの砂を含む。焼成良好。黑灰色。	
29 44	SE04 中壇	須恵	碗	10.0	(6.0)	(4.9)	体部は半球形を呈し、高台は低く、低い。外面に外縁で草花文を描く。	裏地は淡灰褐色で稍暗。焼成良好。わざかに青みを帯びた半透明感。	伊万里	
29 45	SE04 中壇	須恵器	碗	—	—	—	—	外面に平行押き窓。内面は平行の走て具微がある。	粘土に細かい砂を少し含む。焼成やや良。灰色。	
29 46	SE04	陶器	豆皿	—	19.2	(20.0)	4.4	乾ノ目足が。体部は丸みをもち、端部は内凹する。外縁の体部下段まで施釉。内面見込みは輪郭線に砂を撒き見る。	裏地は稍暗。焼成良好。黄褐色白色。	福岡県
29 47	SE04 上屋	須恵	豆皿	—	14.0	(7.0)	2.9	断面が三角形の高台で、内外面に施釉。高台全体のみ割りとる。内面には斜削子文を施す。外縁にコンシャンカ底があり。	裏地は淡灰褐色。焼成良好。わざかに青みを帯びた半透明感。	伊万里
29 48	SE04 中壇	陶器	指突	—	—	(6.1)	口縁部外縁を肥厚させ、裏口させる。下し口はイモ口。	裏地に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡灰褐色~茶褐色。	福岡県Ⅳ期6 C6	
29 49	SE04 喜10層	瓦質土器	井	60.0	—	—	(13.9)	直口角柱の口縁部を把手させ、丸みをもたらせる。コ紐部外面にはヨコハケ網目。外は縮成している。	切口に1~2mmの砂を多く含む。焼成不良。淡黄褐色~淡褐色。	
29 50	SE04 中壇	瓦質土器	筒蓋	—	—	(7.0)	口縁部は直口し、最弱部は腰を隠り付ける。体部内面に削り跡がある。耳の位置はS字型である。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。焼成良好。淡茶褐色。		
29 51	SE04 小壺	土製品	鰐頭口	—	—	—	—	保存高7.8cm、165.5cm、口径2.2cm。外縁に指突が複数ある。	切口に砂を含む。淡褐色。二次火で受け、部分的に表面を手平する。焼成良好。	
24 78	SE08 第1層	土縫器	甕	—	18.0	—	(6.0)	コ紐部は外反し、壺底は厚くなる。口縁部と体部の境は内面に強い窓をもつ。外縁はタチケノ調節。口縁部内面はヨコハケ網目。体部内面はヘラカズリ調節。	切口に砂を含まず。焼成良好。青灰色。	SC代
24 79	SE08 第1層	土縫器	甕	—	—	(13.7)	口縁部はくの字形に外反し、内面に強い窓をもつ。体部内面はヘラカズリ調節。口縁部外縁はナナ字窓。	切口に1~3mmの砂を含む。焼成やや良。外縁は褐色。内面は茶褐色。	SC代	
24 80	SE08 第2層	土縫器	高杯	—	—	(6.0)	肩部片で、チッパ状に広がる。縁部の粗筋は強い。内外面ナナ調節。	切口は粗筋。焼成やや良。淡茶褐色。	SC代	
24 81	SE08	土製品	壺	6.0	—	8.5	—	内面下部はヘラによる削り取りを行なう。1.4cm×1cmの丸をくっつむつ。外から内への穿孔。外縁に削り痕が残る。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。焼成やや良。淡褐色。	
27 101	SK07	土縫器	甕	—	—	—	—	外縁に筋字目印記。内面は不規方形状のナナ調節。	粘土に砂を含む。やや細かい。焼成良好。外縁は茶褐色。内面は略褐色。	福岡県の 村平法 SC代
27 102	SK07	土縫器	甕	—	—	—	—	外縁はタチ方向の平行窓。内面はナナ調節。	切口に砂を含む。やや細い。焼成やや良。明黄色。	SC代
27 103	SK07	土縫器	甕	—	—	(17.0)	體部は丸底角柱で、体部は直線的に立ち上る。底部に鋸歯状の窓がある。また、体部上位に把手を付ける。外縁にはヘラカズリ調節。外縁はタチケノ調節である。	粘土に入粒の砂を含む。やや粗い。焼成不良。外縁は淡褐色。内面は茶褐色。	SC代	
27 105	SK-C	白磁	瓶	—	(1.6)	(2.20)	高く無い瓶。ねじ口部は高台外縁まで施釉。内面見込みは輪郭状に砂を撒く。	裏地は白灰褐色で稍暗。焼成良好。青色を帯びた半透明感。	中国白磁陶 V代	
27 106	SK-10	陶器	壺	—	(12.0)	(4.0)	高台は成立し、内外面に施釉する。内面の下し口は7cm単位である。	裏地に大粒の砂を含み、やや粗い。焼成良好。底脚は墨茶褐色で、瓶部は墨茶褐色。	TE代	

特徴(造形 番号)	地土造形	種類	基材	口径 (高さ)	底高 (現存高)	部器の特徴・調整・文様	施釉・色調・表面等	備考
27 107	SK12	瓦質土器	泥焼	25.0	—	(10.5) 脚を欠く。口縁部はくの字形に外反し、内面に無い跡を もつ。口縁端部は肥厚させ、平坦部をつくる。	粘土に砂を少し含み、今や細かい。 燒成やや軟。外側は所々色。内面 は無色。	16C代
27 108	SK12	瓦質土器	損傷	26.0	—	(9.0) 体部は直筒的に開き、口縁部内面を肥厚させ、丁取部を つくる。内外部はナガ調整。内面には11~13本の下し口 がある。	粘土に砂を多く含み、やや粗い。 焼成良好、深赤褐色。	16C代
36 121	SB01-074	瓦質土器	焼	—	—	実泰文の口縁部で、刻文を施す。内外両面済。	砂子に白い砂を多く含む。焼成良 好。外側は深赤褐色。内面は焼成 茶色。	焼成 茶色。
36 122	SB03-546	瓦質土器	焼	—	—	口縁部外面を肥厚させ、刻文を形成している。	砂子に白い砂を多く含む。焼成良 好。茶褐色。	
36 123	SB03-67	瓦質土器	焼	30.0	(3.0)	L字形の口縁部で、内側の腰は丸みをもつ。外壁はタケ ハケ調整。内面はナガ調整。	粘土に2~3mmの白い砂を含む。燒 成良好。深赤褐色。	
36 124	SB05-514	瓦質土器	焼	—	—	輪郭の口縁部で、内側を肥厚させる。内外壁はコロナ少 量型。	粘土は精緻。焼成良好。茶褐色。	
36 125	SB06-19	瓦質器	焼	—	—	外側は無い平行叩き。内面は同心円状の凸出痕。	粘土は精緻。焼成良好。青灰色。	
36 126	SB06-197	瓦質器	焼	—	—	外壁は椅子目叩き。内面は青海波の当て具模。	粘土は精緻。焼成良好。白色。外 面はやや暗め。	
36 127	SB06-19	瓦質器	焼	—	—	外壁は無い椅子目叩き。内面は青海波の当て具模。	粘土に砂を少し含む。焼成良好。 淡褐色。	
36 128	SB09-437	瓦質土器	焼	—	(5.4)	笠状口縁部で、開口部が大きい。内外面はココナチ済 等。	粘土に大粒の砂を含み、粗い。燒 成やや軟。茶褐色。	
36 129	SB10-489	瓦質器	焼	—	—	外壁は椅子目叩き。内面は青海波の当て具模。	粘土に砂を含み、粗緻。焼成良好。 外曲は淡灰褐色。内面は褐色。	
36 130	SB12-495	瓦質土器	焼	—	—	くの字窓口縁部まで、外側が肥厚する。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。 焼成良好。明茶褐色。	
36 131	SB12-47	上級品	有孔内盤	—	—	現存高4.3cm、現底幅3.2cm、現底厚0.6~0.8cm。底原径 は約5.5cmを考えると、中央が高く、周囲は徐々に落 くなり、丸みをもたせているとかん。帯部の著とは考 えられない。化粧0.45~0.75。	粘土は大粒の砂を多く含み、焼成。 現底幅。明茶褐色。	
36 132	SB11-609	瓦質土器	焼	—	(2.0)	くの字窓口縁部で、外側が肥厚する。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗い。 焼成良好。外側は茶色。内面は明 茶褐色。	
36 133	SB11-676	瓦質土器	焼	22.0	(13.0)	口縁部はくの字形に外反する。脚上位に三角突起を施 せ付ける。口縁部縮頸と底面に抓痕を施す。外側の脚部 上位はタケハケ調整。上位はコロナ少量型。	粘土に大粒の砂を多く含み、粗い。 焼成良好。茶褐色。	
36 141	SD04	瓦質土器	焼	—	(5.0)	くの字窓の口縁部、外壁はタケハケ調整。口縁部内側は コロナ少量型。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。燒 成良好。淡褐色。	
36 142	SD04	土師器	焼	—	(3.0)	くの字窓の口縁部で、内側に無い後がある。外部外壁は タケハケ調整。内側はヘラケゼリ調整。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。燒 成良好。淡褐色。	
36 143	SD04 北	土師器	焼	—	(5.0)	口縁部は外反する。底部内面はヘラケゼリ調整。	粘土に1~2mmの砂を多く含む。燒 成やや軟。明茶褐色。	焼成
36 144	SD04	土師器	焼	—	(10.0)	底部の口縁部で、体部内面は平行叩き。口縁部にコロ ナ少量型である。口縁部に焼痕がある。内面は網目。 や不規。褐色。	粘土に1~2mmの砂を含む。燒 成良好。外曲は淡灰茶褐色。内面 は褐色。	燒成の最 適方法
36 145	SD04 北	土師器	焼	—	—	外壁は椅子目叩き。内面は網目。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。燒 成良好。外曲は淡灰茶褐色。内面 は褐色。	燒成の最 適方法
36 146	SD04 北	土師器	高耳	—	(5.0)	脚部で、底部はタケハケ調整。口縁部はコロナ少量型 である。	粘土に1~2mmの砂を少し含む。燒 成良好。明茶褐色。	

群別 番号	生物 番号	出上池橋	種類	特徴	日付	標後 (高合後)	身高 (尾脊基)	形態の特徴・調整・文様	地輪・色調・斑点等	備考
39	147	SD04	上の船	高身	-	-	(6.2)	両端中位はふくらみをもつていて、内面はヘラケズリ調整。	地土に1~3mmの砂を多く含む。地成やや不良。底泥褐色。	地成
39	148	SD04	下船器	高身	-	11.6	(7.1)	半幅を欠く。両端は水平に強く傾斜する。内外面ヨコナコア調整。	地土に1~2mmの砂を少しあむ。地成良好。底泥褐色。	
39	149	SD04	下船器	平	-	11.8	-	体部は半球形をなし、口縫部を小さく外反させる。	地土に1~2mmの砂を含む。地成不良。底泥茶褐色。	
39	150	SD06	船底器	平基	-	-	(2.7)	口縫部内側のかえりは小さく、断面三角形状を呈する。内外面ヨコナコア調整。	地土に1~2mmの砂を少し含む。地成良好。青灰色。	
39	151	SD06	船底器	平基	14.6	-	5.8	両端部は平行に近く、鰓室痕跡のつまみか付く。口縫部内側のかえりは小さい。	地土に1~2mmの砂を少し含む。地成不良。底泥褐色。	底泥茶褐色。つまみ部2.4cm。
39	152	SD06	船底器	平	-	-	8.2	くの字形に外反した1枚端部をつまみ出す。体部外側は平行でさき、内面は青海波の当て具筋。	地土に1~3mmの砂を含む。地成不良。白灰色。	底泥器生成
39	153	SD06	船底器	平	-	-	9.7	外側は平行でさき、内面は青海波の当て具筋。	地土に1~2mmの砂を含む。地成不良。墨灰色。	底泥器生成
39	154	SD06	下船器	平	13.5	-	5.3	体部は半球形に近く、口縫部を内側に打ち込む。両端部はヘラケズリ調整。内面はヨコナコア調整。	地土に1~4mmの砂を含む。地成やや不良。底泥茶褐色。	SCD標識
39	155	SD06	下船器	平	-	-	(6.9)	体部は半球形で、口縫部を大きく外反する。両端部内側はヨコナコアのケズリ、外側はテハタケ調整。	地土に1~3mmの砂を多く含む。地成良好。底泥茶褐色。	
39	156	SD07	船底器	平	-	-	(28.0)	外邊はタタ方面的平行でさき、内面は同心円の当て具筋。	地土に砂を少し含み、特徴。地成良好。小灰色を帯びた特徴色。	
40	157	SD06	船底器	横底	-	14.6	13.0	口縫部・体部の大腹部分をくし。底部の取り合はせは外縫から離してさきてる。外縫は無い・平行でさきとくじ目。内面は青海波の当て具筋。	地土に砂を含まず。地成良好。外縫は青灰色・茶褐色。内面は青灰色。	
41	158	SD07	両端	平	-	(4.9)	(4.1)	断面ヨコの字形の割り落し高肉。内面と背面に目筋。骨付は他の種と異る。	裏地は浅黄色で、やや黒い。地成良好。底泥褐色・淡茶褐色。	初期肝津地
41	159	SD09	脚器	横体	-	-	(8.7)	口縫部を大きく肥厚させる。内外面の筋は高い。内面の下し口は日本单位。内底部は腹筋により強度化。	地土に砂を少し含み、特徴。地成良好。褐色。	脚錆粒
41	160	SD09	直張土器	平	-	-	-	内外面ともに組めのハケ調整。	地土に砂を少し含み、やや黒い。地成良好。外縫は淡灰色、内縫は墨灰色。	
41	161	SD10	舟形土器	平	-	-	-	両端は強く高く、外縫はテハタケ調整。地成要しい。	地土に1~3mmの砂を多く含む。地成良好。底泥褐色。	
41	162	SD10	舟形土器	平	-	-	-	断面二角形の為古式。底縫と体部の境は先端をもつ。内面はヨコナコア調整。	地土に1~2mmの砂を多く含む。地成やや不良。白色。	
41	163	SD10	舟形土器	平	-	11.0	(11.8)	断面ヨコの字形の低い高肉。底縫と体部の境は先端をもつ。	地土に1~3mmの砂を少しあむ。地成良好。底泥褐色。	
41	164	SD10	舟形土器	平	11.4	(7.0)	4.3	断面二角形の為古式。底縫と体部の境は先端をもつ。内面はヨコナコア調整。	地土に1~2mmの砂を多く含む。地成やや不良。白色。	
41	165	SD10	舟形土器	平	-	(7.0)	(2.9)	断面ヨコの字形の低い高肉。底縫と体部の境は先端をもつ。	地土に1~3mmの砂を少しあむ。地成良好。底泥褐色。	
41	166	SD10	上端	平	-	-	-	把手手、断面形は船形を呈する。全長5.8cm、幅4.4cm、厚さ2.9cm。	地土に1~2mmの砂を含む。地成やや不良。底泥褐色。	
41	167	SD10	脚器	平	-	-	(7.0)	外縫は舟子目焼き、内面に斜め内凹文の当て具筋。	地土に1~2mmの砂を少し含む。地成良好。墨灰色。	
41	168	SD10	夏賣土器	高身	-	-	(5.2)	体縫は丸みをもち、中央に小さな突起を残り有ける。突起下に花文のスクープ。内面はヨコナコア調整。	地土は暗褐色で、底泥褐色。地成やや不良。三灰色。	
41	169	SD10	夏賣土器	高身	12.9	(8.6)	4.1	低い・高肉の内縫をさらに内縫に削り込む。体縫外縫は切草、内面は茶文、足込みは乳文を施す。	底地は白色。地成良好。通幅幅狭手	
41	170	SD10	上累	漆村	平	-	(5.2)	側面が高い高肉から、体縫はやや直角的に立ち上がる。内底見込みに波浪1条、内面に脊文。	底地は白灰色でやや重い。地成良好。わざかに赤みを帯びた通幅幅狭手	

序号	品種番号	出上毛鱈	種類	器種	口径	容積 (高さ)	容量 (現存高)	形態の特徴・異常・文様	施釉・色調・基底等	備考
41	171	SD16 丸上	焼付	瓶	10.8	(3.6)	5.5	小さく浅い高台。体部は平底を呈す。外側に草花文を施す。	本体は白(淡色)。施成やや軟。透明釉。	伊万里
41	172	SD16 下削	焼付	瓶		(4.0)	(2.7)	高台は細く、高い。体部は丸みをもつ。外側に草花文を施す。	本体は淡茶色。施成良好。白色釉。	伊万里
41	173	SD16 上削	焼付	瓶	—	(5.8)	(5.3)	断面三角形の高台で、体部は斜底を呈する。肩部を除き、外側に無釉。外側に草花文。	本体は淡灰色で枯淡。施成良好。	伊万里
42	174	SD16 上削	焼器	瓶	9.4	(3.6)	5.2	瓶形に削る器形で、瓶は後手をす。高台の割れは深く、断面三刀彫をひする。細は、体部外下部まで施す。	本体は白(淡色)で枯淡。施成良好。白(淡色)。口縁部には飲食印を中心とする施釉。	白(淡色)
42	175	SD16 下削	焼器	瓶	9.2	(4.2)	5.0	瓶形は複形で、瓶は中位にある。瓶に焼付を除き、全周に施す。	本体は淡茶色で枯淡。施成良好。下部には、斑紋をもった淡茶色。内底、口縁部外側は墨水模をかける。	高麗系
42	176	SD16 上削	焼器	瓶	15.0	(6.4)	(3.2)	足ノ目高台吹き。高台内側を円錐形に削り込む高台は低く、上端部は平行する。体部周囲は外側まで施す。	本体は淡茶色で枯淡。施成良好。白(淡色)。	伊万里17C 横手
42	177	SD16 丸上	焼器	切妻	—	—	(5.3)	口縁部は2段に削りぞろ。研磨内側に粘土を貼り付けで丁字形をなす。内側の下口は木本以上の單位である。	本体は精緻。施成良好。褐色釉が薄くかかる。露胎部は新緑色。	
42	178	SD16 丸上	焼器	焼付	—	—	(4.5)	口縁部を丸く肥厚させる。内側の下口は木本以上の単位である。	本体に1~2mmの砂を少し含む。施成やや軟。茶葉地。	
42	179	SD16 上削	焼器	焼付	—	(3.6)	(1.8)	外側を丸い高台で、体部内側は使用により肥厚している。下口は木本以上の単位である。	本体に1~2mmの砂を少し含む。施成良好。白(淡色)。内側下部は淡茶色で、砂は使用により溜まっている。	
42	180	SD16 上削	焼器	瓶	—	15.2	(9.7)	平底で、体部は聞く。内側と外側に輪郭の跡目がある。	本体に1~3mmの砂を少し含む。施成良好。白(淡色)。	
42	181	SD16 上削	丸質上削	足焼	—	(5.0)	片伏した口縁部の内側をつぶみ出している。内側にヨコハナ開窓。	砂本に1~3mmの砂を含む。施成良好。淡灰色。		
42	182	SD16 上削	丸質上削	瓶	12.0	(2.8)	底盤は平底。ソラス法を施し、くじりは綾細。外側に草花・草花文、四葉文等のスタンプあり。	丸上に1~2mmの砂を少し含む。施成良好。白(淡色)。内側下部は淡灰色。		
42	183	SD16 W	丸質上削	瓶	—	—	(2.5)	丸底で、外側底部には組めのハケ調整。体部上部はオナノハク裏窓。下口はヨコハナ開窓。内側はヨコハナ開窓。	丸土に1~3mmの砂を少しきむ。施成やや软。淡灰色。	
43	190	SD12 兔生土器	裏	—	8.8	(3.6)	上げ瓶。内外装飾無。	丸土に砂を多く含み、やや硬かい。施成良好。淡茶褐色。		
43	191	SD12 丸上	土焼器	瓶	12.4	(7.2)	4.8	片側きの細い高台。体部は丸みをもつ。外側面はタコナギ調整。	丸土に精緻。施成良好。内側は淡茶色。	
43	192	SD12 丸質上削	足焼	—	—	(4.7)	この字形口縁部を内側に長くつまみ出す。内外面はヨコナガ開窓。	丸土に精緻。施成良好。淡灰色。		
43	193	SD12 土焼器	裏	—	—	(6.7)	脚部以下。質部は聞く。外側面は削成している。	丸土に精緻。施成やや軟。明茶褐色。		
44	201	SP463 兔生土器	裏	—	—	(4.5)	口縁部外面に次第貼り付け。刻目を施す。外側は条底。	丸土に砂を含み、精緻。施成やや軟。淡茶褐色～淡茶灰色。		
44	202	SP539 兔生土器	底	—	—	(6.0)	瓶形の口縁部で、口縁部内側に脚厚をせる。内外面はヨコナガ調整。	丸土に砂を含み、精緻。施成良好。淡茶褐色。		
44	203	SP96 兔生土器	裏	—	—	(5.1)	瓶形の口縁部で、内外面はヨコナガ調整。	丸土に砂を含み、精緻。施成良好。淡茶褐色。		
44	204	SP271 兔生土器	裏	—	—	(4.7)	瓶形の口縁部で、幅部は丸く仕上げる。内外面はヨコナガ調整。	丸土に砂を含み、やや粗い。施成やや軟。茶褐色～埋込灰褐色。		
44	205	SP466 兔生土器	底	—	—	(2.4)	延字形口縁部の内側を肥厚させる。内外面はヨコナガ調整。	丸土に砂を含み、やや粗い。施成やや軟。茶褐色。		
44	206	SP465 兔生土器	裏	—	—	(3.3)	走り字形口縁部で、内外面はヨコナガ調整。	丸土は砂を含み、やや粗い。施成良好。淡褐色。		

品目 番号	生物 番号	生土構	種類	各種	口径	深度 (高さ)	最高 (現存高)	形態の特徴・測定・文様	地質・色調・基準等	備考
44-267	SP666	先生上層	土				(3.8)	くの字形口縁部分で開口部の下位に突起状の小さな土を設けている。	粘土に大粒の砂を含み、やや粗かい。地成良好。根茎化。	
44-268	SP415	蘭文土苔	土	-	8.0	(2.8)		平底で、端部が強く外へ張り出す。内外面はナガ調整。	粘土は細い。地成やや軟。淡茶灰色。	
44-269	SP667	蘭文土苔	土	-	6.5	(3.2)		上げ台で、厚みがある。内外面はナガ調整。	粘土は細い、硬成度。淡茶褐色～淡灰褐色。	
44-270	SP668	蘭文土苔	土	-	8.5	(3.6)		上げ台で、厚みがある。端部が外へ張り出す。外面に側面修正痕が残る。	粘土は細い。地成やや軟。淡茶褐色。	
44-271	SP573	先生上層	土		7.0	(3.3)		平底。内外面は鉄成。	粘土に砂を含み、やや粗かい。地成やや軟。淡茶褐色。	
44-272	SP167	先生土苔	土	-	7.9	(3.5)		平底。外面はナガハケ調整。内面は選成。	粘土に微砂を含む。地成やや軟。外壁は淡灰褐色。内面は墨灰色。	
44-273	SP559	先生上層	土	-	8.3	(2.3)		平底。外壁はナガハケ調整。	粘土は細い。地成やや軟。	
44-274	SP96	先生土苔	土	-	8.2	(6.1)		平底で、外面はナガハケ調整。内面はヨコナガ調整。	粘土は細い。地成やや軟。外壁は淡茶褐色。内面は淡灰褐色。	
44-275	SP97	先生土苔	土	-	8.3	(7.3)		平底で、外面はナガハケ調整。	粘土は細い。地成やや軟。外壁は淡茶褐色。内面は墨灰色。	
44-276	SP181	先生上層	土			9.0	(4.1)	平底で、外面に細いナガハケ調整。内面には側面修正痕がある。	粘土は粗い。地成中や軟。外壁は墨褐色。内面は暗茶褐色。	
44-277	SP637	先生土苔	土	27.5	-	(14.1)		少し字形口縁部で、開口部上位に前面三角形の突きを残す。外壁はナガハケ調整。内面はナガ調整。	粘土に砂を多く含む。地成やや軟。外面は墨灰色。内面は暗茶褐色。	
44-278	SP637	先生土苔	土	31.0	-	(13.6)		少し字形口縁部で、端部はえみをもつ。外壁はナガハケ調整。内面はナガ調整。	粘土に細かい砂を多く含む。地成やや軟。外面は墨灰色。内面は暗茶褐色。	
44-279	SP637	先生土苔	土		29.5		(15.0)	少し字形口縁部で、内側を乾燥させる。外面はナガハケ調整。内面はヨコナガ調整。口縁部は内外面ヨコナガ調整。	粘土に大小の砂を多く含む。地成良好。黄色。	
44-280	SP537	先生上層	土		30.5	(5.0)		開いた口縁部はやや厚めで、手縫縫を形成する。	粘土は精緻。地成良好。墨褐色。内面は墨褐色。	
44-281	SP637	先生土苔	土	7.2	10.0	16.0		下端は大きく、上端は小さく薄く。内外壁に側面修正痕がつく。ナガ調整。	粘土は精緻。地成良好。砂を含む。墨褐色。	
44-282	SP637	先生土苔	土	8.1	9.7	16.0		下端は大きく、上端は小さく聞く。内外壁に側面修正痕がつく。ナガ調整。	粘土に細かい砂を少し含む。地成良好。黄色。	
45-223	SP92	硝亞器	高炉		16.0	5.6	10.4	高炉内部は外気候から外反する。開口部は鋸く、裏部は大きめに広めし、周縁部は内側する。内外面はヨコナガ・ナガ調整である。	粘土は精緻。地成良好。墨褐色。	
45-224	SP588	硝亞器	平板				(5.2)	扁平固体で、硝亞を盛る。中央上げ台がある。硝亞から周縁部外縁はナガ口縁部を施す。底部に底・放熱部がある。	粘土は精緻。地成良好。硝青褐色。最大幅約11.6cm	
45-225	SP462	硝亞器	土	-	-	-	-	外壁に硝子詰めがあり、内面は平行の呑食痕である。硝亞から周縁部外縁はナガ口縁部を施す。底部に底・放熱部がある。	粘土は精緻。地成良好。暗茶褐色。	
45-226	SP462	硝亞器	土	-	-	-	-	外壁に硝子詰めがあり、内面は呑食痕の外側に具痕がある。	粘土は細かい砂を含み、精緻。地成良好。墨褐色。	
45-227	SP232	土耕器	土	8.8	6.8	1.6		赤切り縁。内外面はヨコナガ調整。	粘土は精緻。地成やや軟。淡茶褐色。	
45-228	SP232	土耕器	土	13.1	8.6	2.8		赤切り縁で、板付窓がある。内外面はヨコナガ調整。	粘土はやや粗い。地成やや軟。	
45-229	SP232	土耕器	土	12.7	8.4	2.3		赤切り縁。内外面はヨコナガ調整。	粘土は精緻。地成良好。	
45-230	SP173	土耕器	土	-	8.6	(2.5)		ヘラ切り縁。内外面はナガ調整。	粘土は精緻。地成良好。淡茶褐色。	
45-231	SP618	土耕器	土	11.7	-	(4.03)		体部は丸みをもち、丸底の底盤との間に隙がある。	粘土に砂を含み、精緻。地成良好。墨褐色。	

種類 番号	直物 番号	出土遺物	種類	基準	寸法 (高さ)	底径 (現存高)	断面の特徴・調査・文様			輪郭・色調・表面形	備考
							外側	内側	基部		
45	232	SD940	土器	鉢	14.3	—	(5.5)	平底を有し、内外面はナメ調性。	輪郭に妙を含み、底調。底成やや軟。浅茎無。		
46	233	SP152	土器	瓶	—	—	(4.5)	体部は丸みをもつ、縁部は外反する。がめの跡を残す。内底足込みに比較的柔。	底邊は稍細。底成良好。底緑灰色。		
47	234	SP912	土器	瓶	—	9.0	(2.0)	中や土付底で、外面はナメ調性。内側の下口は4本手口である。内底にちぢれ口を入れる。	輪郭に妙を含み、底調。底成良好。底緑灰色—底黒灰色。		
48	235	SP179	土器	瓶	—	6.4	(1.7)	平底。内面のみ墨調。底部と外底部に凹窓がある。	底邊は稍細。底成良。外側は淡赤白色。内底は底緑灰色。		
49	251	SD940	土器	杯	—	(10.0)	(2.0)	コリニア形底窓は、底部と体部の境に付く。内外面はコリニア形底。	輪郭は稍細。底成良好。底色。		
50	252	トレンチ	土器	碗	—	(7.0)	(2.0)	低い輪高合体形表面に輪の代表がある。内面無削。内底は括り取る。	底邊は底緑色で、稍細。底成良好。底はオーバーフラッシュ。	越前窓系1類	
51	253	三色土名古屋	土器	高杯	—	—	(7.0)	脚窓片。脚部を欠く。両部は大きく開き、内面に無い縫隙がある。外底部はナメ調性。	輪郭に妙を含み、やや粗かい。底成やや軟。底茎無。		
52	254	トレンチ	土器	瓶	—	—	—	把手部分で、断面形は不整形を呈する。	輪郭に大筋の跡を多く含み、粗い。底成良好。底茎無。		
53	255	三色土名古屋	土器	瓶	—	—	—	把手部分で、断面形は不整形を呈する。	輪郭に大筋の跡を含み、やや粗かい。底成良。底茎無。		
54	256	山根笠置窓	土器	柄杯	—	—	(8.0)	U形窓部を丸く切削させ、外側に段を付ける。内側の下口は4本手口。	底邊は淡赤色で、やや粗い。底成良好。底は小豆色。		
55	258	追跡面	土器	柄杯	39.2	16.1	11.9	平底で、内側した日輪部の外側を削り落させて、平底面を形成する。	輪郭に大筋の跡を含み、やや粗い。底成良好。口縁部は、小豆色。体部は、底茎無。		
56	259	追跡面	土器	碗	—	—	(5.0)	ぐの字形に脚部で、脚部は丸みをもつ。内外面は底成。	輪郭に妙を含み、やや粗い。底成良好。底茎無。		
57	260	追跡面	土器	碗	—	7.3	(2.4)	平底で、体部の立ち上がりは丸みをもつ。	輪郭に大筋の跡を多く含み、やや粗い。底成やや軟。底茎無。		

Tab. 5 第74次調査軒平瓦計測表

(単位: cm)

種類 番号	直物 番号	出土	文 体	計測値 (平均値)					色 調	輪 士	調 査	形態・製作技法	備 考
				上外側	下内側	底周長	底厚	高さ					
41	160	SD07	追跡面	6.1	1.0	9.5	0.5	0.5	4.2	底緑	底	良好	ナメ調性

Tab. 6 第74次調査丸瓦計測表

(単位: cm)

種類 番号	直物 番号	出土	文 体	計測値 (平均値)			色 調	輪 士	調 査	形態・製作技法	備 考
				上外側	下内側	底周長					
29	32	SD04	—	—	—	—	黄色	褐色	良好	青窓はナメ調性。各部は	現存高9.8cm、現存幅6.7cm、厚さ1.7cm
42	166	SD10-1	—	—	—	—	淡白茶色	良好	少し含む	青窓はナメ調性。各部は	現存高9.0cm、現存幅7.9cm、厚さ2.2cm

Tab. 7 第74次調査平瓦計測表

(単位: cm)

種類 番号	直物 番号	出土	文 体	計測値 (平均値)			色 調	輪 士	調 査	形態・製作技法	備 考
				上外側	下内側	底周長					
15	5	SD01第5号	(11.0)	1.7	—	—	底緑	1~2mmの妙を少し含む	良好	ナメ調性	現存幅10.3cm
42	184	SD10-1号	(11.0)	1.9	—	—	灰色—底緑	1~3mmの妙を少し含む	良好	ナメ調性	現存幅10.3cm
42	185	SD10-1号	(10.0)	1.2	—	—	底茶色	1~2mmの妙を少し含む	良好	青窓、各部とともにハケ調性	現存幅10.7cm

Tab. 8 第74次調査鉄製品一覽表

(単位: cm)

種類 番号	直物 番号	出土	文 体	高さ (現在高)	厚さ (現在厚)	幅 (現在幅)	幅 (現在幅)	備 考
45	237	SP528	針	(4.5)	1.0	1.0	—	

Tab. 9 第74次調査木製品一覧表

(単位: cm)

標名 番号	遺物 番号	出土遺構	種類	樹種	長さ	幅	厚さ	径	木取り	備考
15 7	SE01	檜(側板)		(16.3)	3.4	0.3			板目	
15 8	SE01'	檜(側板)		16.4	2.3	0.4			板目	
15 9	SE01	檜(側板)		16.3	3.2	0.4			板目	
15 10	SE01	檜板		—	—	0.75	径12.2cm		板目	
15 11	SE01	朴		163	—	—			完成品	
15 12	SF01'	F1		4.248.5m	—	—	37.2~59		台高24cm、奥くびれの台、台は舌形状に開く	
18 29	SE02	楢(製版)		8.6	4.2	2.9			板目	
18 30	SE02	筋鉛筆		—	—	0.8	径5.3cm		板目	
18 31	SE02	板状木製品		7.6	3.7	1.5			板目	
18 32	SE03	板状木製品		11.3	6.2	2.1			板目	
18 33	SE02	板状木製品		14.8	2.8	0.5			板目	
18 34	SE02	木塊		14.8	2.2	2.1			芯持ち材	
18 35	SE02	木塊		(16.1)	—	—	径2.5cm		芯持ち材	
22 58	SE04	木塊		23.5	4.4	3.95			芯持ち材 半抜材	
22 59	SE04	木塊		14.0	6.1	6.5			芯持ち材	
22 60	SE04	檜(側板)		16.2	2.75	0.4			板目	
22 61	SE04	檜(側板)		14.0	3.5	0.8			板目	
22 62	SE04	檜の底板		11.9	2.8	0.85			板目	
23 63	SE04	檜(側板)		14.8	5.6	0.7			板目	
23 64	SE04	檜(側板)		15.0	3.8	0.8			板目	
23 65	SE04	檜(側板)		15.5	3.2	0.7			板目	
23 66	SE04	檜(側板)		15.8	4.2	0.8			板目	
23 67	SE04	檜(側板)		14.2	2.2	0.8			板目	
23 68	SE04	檜(側板)		10.7	2.6	0.75			板目	
23 69	SE04	檜(側板)		14.8	3.1	0.85			板目	柄穴の切り込みがある
23 70	SE04	檜(側板)		15.3	2.2	0.4			板目	
23 71	SE04	檜(側板)		15.4	2.2	0.45			板目	
23 72	SE04	檜(側板)		15.0	2.2	0.4			板目	
23 73	SE04	檜(側板)		15.2	2.1	0.35			板目	
23 74	SE04	檜(側板)		15.2	2.0	0.4			板目	
23 75	SE04	檜(側板)		15.1	1.9	0.4			板目	
23 76	SE04	檜(側板)		15.2	2.5	0.4			板目	
23 77	SE04	檜(側板)		15.2	1.8	0.4			板目	

Tab.10 第74次調査石製品一覧表

(単位:cm)

規格番号	遺物名	出土直構	器種	長幅(oz)	幅(横幅)	厚(奥行)	重さ(g)	石材	色調	特徴
15 6	SE01	砾石	(10.0)	(6.0)	(6.2)	-	砂岩	淡灰褐色	長方形状の面取りした石材を利用。3面を研磨面は粗粒面。	
17 28	SE02	石鏟	2.7	(1.8)	(0.4)	-	サヌカイト	淡褐色	片方の刃を少し一面を欠く。丁寧なつくり。横長い剣を用いる。	
19 36	SE03	石刀(縦石)	19.0 (復原品)	-	(8.3)	-	砂岩	淡灰褐色	斧形、上部を弧形に削り、芯部分は幅2.4cm、厚さ木口より4.8cm、厚さ3.2cm。握り口は石刀とよく似せて、握持部は幅3.7cm。	
19 37	SE03	石刀	38.4 (復原品)	-	7.1	-	花崗岩	灰色	現在の刀の刃よりも下口で、芯部分は2.0cm、握り口は木口と同様、厚さ6.0cm、削溝8mm。	
19 38	SE03	室蘭市町 (縦石)	9.5	25	(8.15)	-	砂岩	淡灰褐色	斧の部で、頭部突出部の先端部は欠失。轟石は6段造れてある。L字型。	
20 53	SE04	圓刀 (縦石)	(12.8)	(9.4)	(4.9)	-	砂岩	暗褐色	丸員方面に毛刺をして、刃面を斜打磨面としている。A面の中央に凹みがある。側面を砾石として使用。	
20 54	SE04	縦石	(18.6)	5.9	2.4	-	細粒砂岩	黒灰色	塊状の自然石を利用。A面利用。周囲も研磨。B面の一端にA面用あり。	
21 55	SE04	板縫	(16.0)	18.6	9.4	-	砂岩	黒灰色	次大を欠ける。山形の腰帯のみ遺存。2条の裏面形が見られる。裏面に難民が残る。	
21 56	SE04	板縫(縦石)	(16.0)	(16.0)	8.6	-	砂岩	淡灰褐色	盾身の一部。裏面・基部を欠く。砾石や木口と、4つの一部を使用。完了はタフロー(底面背面)を刻む。	
22 57	SE04	縦石	(38.0)	(15.0)	(9.2)	-	砂岩	淡茶灰色	A面と1侧面を砾石とする。A面に堅底。	
24 67	SF08B22等	縦石	(9.0)	(2.4)	1.1	-	泥岩	暗灰青色	一方の口が幅広いL字型で、両小口は面取り壁面。A-B兩面と裏面を使用。	
27 104	SK07	縦石	(6.8)	7.2	(5.3)	-	砂岩	暗灰色	欠損。上の小口は自然面を残す。両側面とA-B両面を砾石で埋め尽し。	
28 109	SK12	板縫	(23.2)	17.3	7.5	-	砂岩	黒灰色	板縫の基部で、縫合を欠く。縫合の残存部は5cmを測る。四面に細い難面がある。次大を欠ける。	
28 110	SK12	右E	33.2 (復原品)	-	(7.2)	-	花崗岩	暗灰色	削り口の下口現在7/4、孔径1.0cm、多孔質の石材。6分解で、握持は土落一本。削落と摩耗が大きい。	
40 158	SD06	石鎚 (未製品)	2.4	(1.7)	0.6	-	墨縞石	黑色	墨縞の最初を用いる。三角底に彫塑するもので、極めて堅底である。	
43 187	SD10上層	縦石	11.4	(7.5)	2.6	-	細粒砂岩	黒灰色	裏面は分離している。小整の長方形状を呈し、両小口と握持の1箇、A面を使用。	
43 188	SD10	縦石	8.4	(4.0)	3.8	-	砂岩	灰色	長方形の立方体に面取りし、1面のみ難面として使用。	
43 189	SD10直上	縦石	6.0	(7.4)	(0.65)	-	滑石	暗灰色	一方の側面に切削痕がある。A面は平順、B面はA面の角であるから、A面は斜面片か。	
45 236	SP155	石鎚	26.7 (復原品)	-	4.5 (復原品)	-	滑石	灰黒色	外側の山根底面下に小さな三尖突部を作り、外側にはタブレットの入る溝。裏面は半分仕上げ。隠面は丸く仕上げる。後に金屬の傷がある。	
45 238	SP018	威石	(12.2)	(4.3)	(2.5)	-	砂岩	明淡茶白色	長方形底を呈し、両小口は底面を整形して使用。	
45 239	SP015	磨石(縦石)	5.3	6.0	5.5	-	玄武岩	暗灰青色	やや角ばった原石全体で、一部に刻難底がある。狭口として使用後、滑石に転用した。	
45 240	SB15-613	磨製石斧	(7.8)	(6.8)	(2.8)	-	玄武岩	灰色	底面蓋部分の表面は研磨。黒化が微しい。	
45 241	SP567	石鏟	2.75	1.9	0.5	-	サヌカイト	墨灰色	先端を少し尖らせる。長い棒を測定した。両方のかどりが長い。彫塑模様は、やや粗稚である。	
46 257	黒色土着 (包含物)	縦石	(27.5)	(9.9)	3.5	-	繊貫砂岩	暗灰褐色	墨灰色の難面が入り、一部ベラ状に底面に削りされた4角を、A-B面と墨縞の難面を有し研磨している。裏面は小口の長い部分が側面で、下は側面を上上げる。	
46 267	通柄束	滑石製品 (未製品)	(10.5)	(6.5)	(2.2)	-	滑石	灰褐色	墨灰色の難面を利用し、面取りを行う。墨縞はA-Bの2箇と1箇底面を利用する。	
46 268	不明	円玉	0.45 (復原品)	-	0.2	-	滑石	灰色	平面研削している。孔径0.15cm。	